3/9
283

始

319-283

帝國圖書館藏

戰史評論

大正四年一月(枕旦堡防禦)

宮本武林堂發行

大正 4. 2. 3

大正 7. 1. 26 製本

戰史評論

成仁武夫補
無名戰士評

第二十一回　枕旦堡の防禦

寒風凜烈として肌に砭し飛雪紛々咫尺を辨ぜざる、明治三十八年の一月二十五日から五日間に渉りて、酷烈慘怛殆んど八寒地獄の如き大激戰は我滿洲軍の左翼に於て行なはれた。これはいふ迄もなく黑溝臺の會戰であるが、他人の見る所は如何にあるか元より知らふ筈はないが、評者一己の考を以てすれば此黑溝臺の會戰程、我日本軍の危險に瀕したことは全日露戰役中に又と再びあるまいと思ふ。廣漠無邊とも稱すべき無慮數十里に亘れる兩軍對陣中の戰線は、萬遍なく到る所徹頭徹尾兵力を充實して置くことは不可能である。

からして我軍は其兵力を戰線の中央なる鐵道線の左右若干の間に集結して。其左翼の方には秋山支隊の騎兵を主とするものを以て、遠く遼河々畔に至る迄の廣大なる間を監視的に防禦せしめて居たのであるが。此方面の我兵力の極めて手薄なる所を機敏にも看取したる、敵の謀將グリッペンベルグ大將は、其統率する第二軍の獨力を以て、攻勢移轉を決行せんとの意見を熱心に具申し。終に不決斷なる黑鳥將軍をして其攻擊を認可せざるを得ざるに至らしめて、其總兵力無慮歩兵百二十大隊半、騎兵九十八中隊半、砲四百五十二門といふ、隊數の算用だけにも頗ぶる手數を要すべき大軍を以て、我が乃木軍の此方面に加はらぬ先に、薄く廣く我日本軍の左翼の所々にばらまいたる微弱なる秋山支隊に向つて、突發的に機先を制して急遽壓迫を加へたのであるから。其危險は實に一髪千鈞を繫ぐといはふか、大磐石を以て雀卵を壓するといはふか、危機一髪とも累卵とも何とも彼とも實に譬へるに物のない程に、危險至極の場合に迫つたのは事實である。

此の大危險に瀕したる黑溝臺の會戰中、特に最も著るしく敵中に突出して敵の唯一の目標となり、敵の第八軍團の殆んど全力を以て頗ぶる猛烈に攻擊せられて。堅忍持久一歩も其彈丸黑子も曾ならざる小村落の枕旦堡を退ぞかず、僅々歩兵しかも後備歩兵一大隊と騎兵二聯隊、砲四門、機關銃二挺を以て。目に餘る十數倍の大敵の包圍攻擊を勇敢に防禦しをほせたのは、實に此の名高い枕旦堡に於ける豐邊大佐(現中將)の防禦である。我軍に於ては此の會戰を黑溝臺と命名して居るけれども、露軍に於ては此の戰を枕旦堡の會戰と稱呼して居る所から見ても、如何に此の一小村落の防戰が敵に大障碍を與へ得たかは明らかであらふ。いでや全黑溝臺の會戰を一時に研究するのは頗ぶる難事であるからして、今此の勇敢無双にして彼我兩軍に勇戰の名隱れなき所の、豐邊大佐の枕旦堡の勇ましく心地よき防禦に就て、聊か乙卯元旦の試筆の代りに評論の筆を揮つて見樣。

抑〻枕旦堡の土地たるや、我秋山支隊の右翼なる李大人屯より左翼黑溝臺並

に頭泡に至る間の、中央より稍〻左方に當れる西北の突出部の角頂にして。常に敵の注意の焦點となりたる而已か、敵は此の枕旦堡を以て此方面の我軍の最重鎖鑰の地として、晝夜間斷なく種々樣々なる手段を用ひ終には繫留氣球までを持ち出して、其防禦編成の探知に熱中して此攻擊前に於て、多少の間違はあるが立派な同村の防禦編成圖が敵中に於て作られた程に、それ程に敵に重要視せられた土地なのであつて。我秋山將軍も其地の左翼の要害たるべきを逸早くも看取して、此所に勇猛なる豐邊支隊を配置したる上に充分の工事をも行なはせたが、何をいふにも騎兵を主とせる兵力の極めて微弱なる同支隊のことであるから、其兵力は極めて少數であつて。豐邊大佐が現に其支隊の主力として枕旦堡に握つて居たものは、後備步兵第二聯隊の第一大隊(二小隊欠)と、同第三十一聯隊第二中隊、騎兵第十三聯隊(第三中隊欠)と、同第十四聯隊、それに騎砲兵が二小隊(四門)、機關銃が二挺而已である。此の取るにも足らぬ小兵力を以て正面約千五百米突に亘る枕旦堡を守備し、十數倍の大敵を引

受けたのであるから、其苦戰の程は其兵力の差を見ても推察するに難くはあるまい。

豐邊大佐が此の小兵力を以て此の大要地を守らんが爲めに、施設したる枕旦堡の防禦編成は頗ぶる合理的のものであつて、專門家と雖ども決して多くの非難を打つことは出來まいと思ふ。即ち彼れは其全村の北西南の三面には强斷面の連續せる塹壕を以て之を繞らし、東南方の一部は工事を施こさなんだけれどもが、其中央に東北と西南に面せる約一中隊を容るべき塹壕を全くの背中合せに築いて、敵が若し同村の左右兩翼から包圍せんと企てたる場合に、これに對して側射を與へるの準備がしてあつたなどは用意實に周到である。而して村の東北部の塹壕の前には繞らすに數重の鹿砦を以てして容易に近接し難く工夫し。又其最も敵の近接し易き西南部枕旦堡との間には鹿砦の前に更に鐵條網を二重に構築して最も防備を嚴にし。其中間の凹入したる部分には何等副防禦を設けず、左右兩方よりの側防を以て敵の進入を防ぐ樣に

巧に計畫し。以上の此の枕旦堡全村の配備を以て殆ど一の複廓として。さて西南部枕旦堡の西南端には騎兵一小隊、歩兵一小隊の塹壕を設けて、警戒監視を嚴にすると共に敵の進來を遲緩せしむるの配備をなし。更に北方は北臺子に工事を施こしてこれに騎兵一小隊を派出し。西北小樹子には北方及西方に向つて二箇の塹壕を設け、こゝに歩兵一中隊を出して警戒及前進哨的の任務を與へた。此の豐邊大佐の枕旦堡の配備は頗ぶる至當であるが、以上北臺子、小樹子、西南枕旦堡の三所に少數の兵を分派したる外は、其全兵力を全部枕旦堡村内に自から掌握して居たのであつて。これ亦申分のない兵力集結の適當なる處置であると思ふが。就中最も評者の大に感服する所は其砲兵陣地を數所に設けたることであつて、小兵力特に砲兵の如きはたつた四門しかないのに、それを以て相當に廣い正面の陣地を防禦するのであるから。餘程巧に其豫備の陣地を設けて、其村内に適當なる交通路を開設して、何れの方面へも快速に其全砲火を移動し得る樣に計畫せねばならぬが。此の配備に關して豐

邊大佐は頗ぶる適當に施設した。即ち北方西北方を充分射擊し得る爲めに、西北面の稍〻南によれる處に陣地を豫備し。南方及び西南方の爲めに同村の南方に更に一陣地を構へ。更に敵が西南部枕旦堡へ侵入したる場合、これを射擊する爲めに東北端に一陣地を選んだのは實に適切である。前の兩陣地は何人もこれを準備するに躊躇すまいと思ふが、最後の東北端に陣地を設けて、敵が西南部枕旦堡へ侵入した場合の爲めに顧慮したのは、實に用意周到にして一寸凡愚等どもには出來ぬ藝當である。これ實に野戰砲兵操典第二部第六十四の『敵ノ種々ノ攻擊方向ヲ顧慮シ斜射及十字火ヲ選フシ又敵ノ縱射ニ對シ有利ニ對抗シ得ンガ爲豫備陣地ヲ設備スルコト頗ブル緊要ナリ』とある原則を其儘に應用したるものであつて。斯の如く其防禦の編成は極めて至當であつて堅固なる上に、此の防禦編成を一見するに此地を撤退する場合の爲めに、少しの工事も掩護陣地も設けてなかつた。これ實に同大佐が此の村落を以て死生を共にすべき所と定めて、何百萬の敵が來ても貧乏搖るぎもせずに之を

擊退するといふ決心を示したものであつて、これ全く歩兵操典第二部第六十二の『防禦工事ハ逐次ニ抵抗シ得ル如ク數線ニ設クルコトナク唯一箇ノ陣地ヲ最モ堅固ニスベシ云々』とある原則にも吻合して居るのである。此の様な周到綿密なる防禦工事ある上に、此の指揮官の堅牢無比の決心があつたのであるから、枕且堡が敵中に孤立して毅然として莫大の敵兵を喰ひ止めをほせたのは、實に至當であつて何等の不思議はないのである。

一月二十五日一時北臺子を敵に占領せられたが、同夜更に之を奪回して騎兵を以て之を守らしめて。戰史第七卷附圖第十一の示すが如く少數の兵を嚴重に配備して、一月二十六日未明から敵の來襲を今か〳〵と待ち受けたが。此日は朝來珍らしくも晴天續きの滿洲に降雪繽紛として鵞毛を散亂し、四望全く咫尺をも辨し得ぬといふ惡天候。爲めに展眸頗ぶる不便であるから、それが本職の騎兵達も搜索の困難非常であつたが、併し餅やは餅や本職お手のものゝ騎兵のことであるから、此の展眸難搜索難の間に於て逸早くも敵の一

旅團が柳條口から大臺方向へ行進中なることを午前九時三十分に知るを得た。他の一旅團は三犬子の方から老橋に向ひ、更に他の一旅團の韮菜河より古城子へ行進中なることをも知つて愈敵の來攻と確定して、騎砲四門の全力を南端の陣地に移して守備を一層嚴にして敵を待つた。右の通り西南方に於ては敵の活動を見たけれども、北方及び西方の敵は依然として靜穩である所から豐邊大佐は滿を持して一發も射擊せず、靜まりかへつて敵のせん様を見物して居たが。大臺方向に前進中の敵の旅團は其先頭が西南部枕且堡の西南約千五百米突に達し、不用意千萬にも我が陣地に其左翼側を全然曝露して居るのを見て。こゝぞ好機逸すべからずとして騎砲兵に射擊の命を傳へたので、今まで待ちに待ちたる騎砲兵中隊は、濛々たる降雪中の沈默を破つて百雷轟發の勢を以て、敵旅團の左側面から猛烈極まる彈雨を注ぎかけたのであつた。

何を隱くさう此の不意の我軍の側射を頂戴したる露軍旅團は、我此の枕且堡を攻擊せんとして其方向を誤まり、大臺を以て枕且堡と考へて御苦勞にも

のこ〳〵雪中を前進する最中であつたので。思ひもかけぬ此の騎砲四門の側射には非常な損害を受けたと同時に、豫想以外の大周章大狼狽を捲き起して、全旅團は僅かに此のたつた四門の砲擊の爲に、潰走して紅河の線に急遽退却するに至つたが。これ實に豐邊大佐が沈勇にして先に午前九時半頃に於て既に此の敵旅團の前進を知りつゝも、少しもこれに對して無效なる遠距離の射擊を行なはずして、殆んど全く人なきが如くに沈默して好機の來るを待つて居たので。敵旅團は濃霧と飛雪の爲めに此所に枕旦堡があらふとは夢にも心付かず、大臺へ向つて其隊を展開して聊かの遠慮會釋もせずに、此の枕旦堡へ側面を現はしかけたがまだ〳〵容易に射擊せず。それが愈我が良射程内に入り全く我に其一側面を曝露したる好機に乘じて、疾風迅雷も啻ならざる大猛擊を加へたので、僅か四門の砲火を以て敵一旅團を散々に潰亂せしめたのであつて。取りも直さず野戰砲兵操典第二部第一の『至大ナル發射速度ヲ利用シ不意ニ敵ヲ急襲スルトキハ其效果一層顯著ナリ』とある原則と一致したる射

擊のやり方であつた。若し此場合不用意に此の砲兵が過早に砲擊を開いたならば、敵に見落されたる枕旦堡の所在を態々廣告すると同樣である而已か、敵の我が此の枕旦堡を砲擊すべき豫定の重輕砲數は少なくも四五十門はあるのであるから、忽ちにして敵砲の爲めに默滅の非運に陷るのであつたが。沈勇にして大膽なる豐邊大佐が充分に敵を近よせて、一時に切つて放つたる此の砲擊には、流石機敏の敵の砲兵も度を失なつて之に應射するの暇まがない中に、彼の第十四師團の右翼の一旅團は全く潰走して仕舞たのであつて。一月二十六日の枕旦堡防禦の手始めは、此樣に小氣味よき程幸先きのよい大有利なる砲擊を以て、其小手調べが行なはれたのであるから爲めに志氣は一時に振起した。

これ實に先に掲げたる野戰砲兵操典に於ける其第二部第一の第一項と同第二項の

『砲火ノ緩急ハ一ニ戰況ニ依ラザルベカラズ而シテ好時機毎ニ至短時間ノ迅

速正確ナル射擊ヲ以テ敵ヲ制壓スルヲ緊要トス』

又同第二部第三十二に掲げたる

『我砲數優勢ナラザルトキニ在リテモ一時敵ノ一部ニ火力ヲ集中シ以テ效果ヲ收ムルコトヲ勉ムベシ』

とある數條項を遵守して巧に砲兵陣地を選定し、且つ其射擊の開始を最も適當に指揮したるの結果にして。此の手始めの一戰の勝利が如何に我が守兵の志氣を引き立てたか知れぬと共に、敵の第十四師團の將卒をして如何に其勇氣を沮喪せしめたかはいふ迄もあるまい。

此僅か四門の騎砲の射擊が敵一旅團を潰走に陷らしめたのは、實に比類なき大手柄であつたが。それと同時に此枕旦堡よりの始めての砲擊は、怠たれる敵の砲兵の惰眠を覺醒せしめて、忽ちにして王家窩棚及李家窩棚より約三中隊の敵砲兵は、我が此の枕旦堡を猛烈を極めて砲擊することになつたので、守兵は爲めに少なからざる損害を被むることになつた。此の敵砲擊の始まり

は午前十一時過ぎであつたが、午後一時頃になると更に敵砲一中隊張庄子北端附近に現出して猛射を浴せた。戰史の上では餘りに遠慮し過ごして敵砲三、四十門で枕旦堡を砲擊したとあるが、事實露軍が此の時機に於て枕旦堡へ向けたる砲門の數は、砲兵第二十九旅團の四十八門と臼砲八門、攻城砲四門、第四十一旅團の四十八門と、狙擊砲兵第五大隊の砲十六門、及びレーシ旅團の三十二門、合計百五十六門の多數に達して居たのであつて。其砲擊は大分緩慢であつた樣には見へるが、此の大砲擊を北西南の三面から受けたる枕旦堡の苦戰は實に容易でない。就中敵の重砲四門の威力は絶大にして我人馬の死傷續出するといふ有樣であつたが、豐邊大佐は泰然自若毛ほども動搖すべき模樣を見せぬのであつた。

午後一時二十分頃になると、柳條口の方から敵歩兵が一大隊程で再度の攻擊前進を始めたので、西端に設けたる砲兵陣地から騎砲二門を以て之を射擊せしめ。それと同時に此敵が目標とせる西南部枕旦堡の歩、騎各一小隊を指揮

さする爲めに、騎兵第十四聯隊第四中隊長土屋大尉篤を急派したが。丁度此前後から李家窩棚附近の敵砲は、此の西南部枕旦堡に火力を集めて猛烈に射撃し、歩兵も漸次諸方面から徐々として攻撃を此の方面に進めて來た。

前進陣地たる此の西南部枕旦堡には、僅かに小隊宛の歩騎兵が居たばかりであるのは前掲の通りであるから、若し此儘にして置けば直ちに本線内に退却したに相違ない。然るに機を見るに敏なる豐邊大佐は、敵の一部が此方面に攻撃し來つたのを見ると同時に、此の西南部に於て敵の前進を遲滯せしむるを最も必要とし、それが爲めには小隊長の共和政治では到底充分な仕事は出來ぬと考へて、直ちに勇敢なる土屋大尉を此方面に派遣し、可成頑强に抵抗して敵の前進を喰ひ止めさしたのであるが。此の人撰と此の處置が頗ぶる至當なものであつた爲めに、此の西南部枕旦堡は鹿砦もなく又鐵條網も何にもなく、僅かに其村端の凍結したる沼池の縁に、二小隊分の塹壕を有した而已であつたに係はらず、此の午後一時過ぎからして午後四時頃迄、前後凡そ

三時間程の時間を、約一旅團の敵兵に對して勇ましく防戰したのは。敵の前進が頗ぶる不活潑であつたのが原因ではあらふが、實に賛歎を禁ずる能はざる勇猛なる動作であつて、豐邊大佐の人撰は實に其宜を得たものであつたと評者は信ずる。

午後二時少し前になると秋山將軍から左の要旨の訓令が來た。

『貴地增援ノ爲メニ歩兵二大隊、砲兵一中隊、工兵一小隊ヲ派遣ス

此諸隊ハ敵兵退却スルニ至ルモ枕旦堡ヲ堅守セシメ追撃前進セシムヘカラス』

といふ頼母しい便りであつたので、枕旦堡守兵は上下一同愁眉を開くの概があつたのは事實であるが。此增援に赴むくべき命令を第二軍司令官から受けたのは誰であるかといふと、此日午前七時頃から楊家甸子、郝家屯附近に集合して、待機の姿勢を取りつゝあつたる歩兵第十七旅團長の兒玉少將であつたが。其歩兵二大隊、砲兵一中隊、工兵一小隊、砲兵彈藥半縱列を急派せよとの命

令が、同少將の手に入つたのは同日の午後一時三十分であつたに係はらず。此枕旦堡の危急存亡の目睫の間に迫れるを知りつゝ、暢氣千萬にも其增援隊の出發が頗ぶる遲滯して、其命令受領より一時間半の後の午後三時に至り始めて楊家甸子を出發したといふのは、實以て言語同斷沙汰の限りであると評者は思ふ。當時兒玉少將は其手中に步兵第十八聯隊と、步兵第三十三聯隊(第一大隊欠)砲兵第三聯隊、機關銃六挺を有して居たのであつて。此日午後零時三十分に步の第三十三の第二大隊が他から到著した外は、何れも早朝から此地に集合して待機の姿勢にあつた筈である。然らば急行增援の命が下つたならば瞬時も猶豫することなく、直ちに即刻急行出發せしめ得る筈ではないか。然るに其增援隊は其集合して居るべき筈の楊家甸子を出るに、軍命令受領より一時間半の後になつたのは如何なる理由が其間にあつたか、これ實に怪しからぬ職責怠慢であると評者は思ふ。戰史の通り此の兒玉少將の諸隊が集合して居たならば、これ程に無益に大切な時間を費やす筈がない。或は風雪凛

烈なる爲めに所在の家屋へてもは入らせて、此の大切な時機に姑息なことをして兵卒を可愛がつた爲めに、それッといふ急場の間に合はずして一時間半も遲刻したのではなからふか。何れにしても集合して待機の姿勢にある步兵二大隊と砲兵一中隊の派遣に、一時間半を費やしたといふは不都合である大過失である。幸にして豐邊大佐が勇猛にして一寸も動かなかつたからよい樣なものゝ、若し此の枕旦堡守備隊長が凡愚等であつて、此の增援の到著せぬのにしびれを切らして退却したらば何とする。其責任は全部兒玉少將の負ふべきものであるのはいふ迄もない。此の兒玉少將の緩慢なる處置は實に赦すべからざる大罪である、間に合つたからよいはと棄てゝ置くべきでない。である。而して其步兵を派遣するに當つても、朝來此の地に集合して休憩して居た步兵第十八聯隊を使用せずして、其一大隊は今方此地に到著したばかりで、相當に疲勞して居るに相違ない所の步兵第三十三聯隊を使用して居るが。これは一方から見れば步の第十八は聯隊が纏まつて居り、步の第三十三は軍

の注文通り一大隊缺けて居るから、それで建制を破らぬ樣に此方をやつたのでもあらふが。此の兒玉少將が枕旦堡の增援に不熱心であつたのはこれでも知れる。何故なれば當時微弱なる兵力しか持たぬ豐邊大佐が、一旅團の敵を引き受けて大奮戰をして居ることは、兒玉少將は前からよく知つて居た筈である。現に戰史は明らかに同少將が此の戰況を知つて居たと特筆して居る。果して然らば同少將たるもの軍命令がなくとも、或る場合には增援を送る獨斷をするのが至當である位である、況んや其急行の命を受けたに於てをやである。同少將たるもの速に步兵第十八聯隊長に精銳なる二大隊と砲兵一中隊を率ひしめて、即時出發これに急行赴援せしむべきである。此場合建制の破れる位の小問題は顧みるべき場合でない。左すれば經驗に富める步の第十八聯隊長は、寸時も早く枕旦堡へ著して豐邊大佐と協力して、其一方面の防禦に力を致し。緩慢極まる增援隊の出發した午後の三時頃には、最早先方に到著して居たかも知れぬ。よし遲くとも其行程は約二里であるから、午後の三

時半迄には必ず到著して居ると評者は考へる。然るに兒玉少將が甚だ此增援に不熱心であつた爲めに、午後零時に到著したばかりの疲れた第二大隊を有する、步兵第三十三聯隊の二大隊を派遣して。しかも其指揮を土地に不慣れなる同聯隊の第二大隊長村岡少佐に命じたので、大遲れに遲れた上に後高大人屯に著してから停止して、何れに進まんかと枕旦堡へ問ひ合せるといふ始末。これ實に建制を破る位の弊害の此の危急の場合に問ふべきでないといふことを知らざる上に、砲彈半縱列の到著した上で出發せしめんとして、枕旦堡の危急を目前に控へながら、悠々として增援隊を出し遲れさせて平氣で居たる、此兒玉少將の罪である過失である。評者の言は過酷であるかも知れぬが、此の一時間半の遲延は他の場合の一日二日の遲延よりも重大であると信ずると共に、此の兒玉少將の緩慢なる處置を何としても咎めずに置くことが出來ぬのである。

それはさて置き枕旦堡の方では、其敵情益〻險惡の徵候を呈し來つて、午後

二時四十分頃には柳條口の方から進んだ敵は、其兵力が頗ぶる增加して近く西南部枕旦堡に迫り。又小樹子に對しても優勢なる敵が攻進して來たので、同村を占めて居た後備歩兵中隊は本線内に退却して豫備となり、北臺子にも相當有力なる敵が進來占領したといふ有樣。まだそれ而已か其後方からは續々として敵の後續大部隊が見へるといふ大危急であつたが。疾くにも到著すべく待ちに待つたる增援隊は影も形も見せぬので、豐邊大佐の痩我慢も到當さう迄は出來ぬことになつて增援隊に其急行を催促したが、事實楊家甸子に於てはまだ其增援隊は出發して居ぬのであるから實に怪しからぬ。其間に敵は愈〻增加して諸方面より益〻壓迫して來たので、如何に勇士でも歩、騎二小隊ではさう〳〵一旅團は支へ切れず。土屋大尉も騎、歩兩小隊をまとめて彈藥盡きて白兵而已を携へたる部下と共に、本線内へ退却して其西南端の守備に就いたのが、彼是れ午後の四時頃で枕旦堡の危急は一秒一秒に其危きを加へて來た。

前にも述べた敵の百五十餘門の大砲は、今こそといはぬばかりに三方面より猛烈なる砲擊を枕旦堡に加へ、これと相照應して歩兵は潮の寄するが如く枕旦堡を目ざして、徐々として其攻擊の歩武を進めて來たが。午後四時二十分頃には其攻擊部隊の戰線の長さは、北は小樹子の東端より南は西南部枕旦堡の南方に亘り、約略四千米突の濃密を極めたる散兵線を以て、殆んど遠く枕旦堡を三面より包圍して攻擊して來る。此時迄は本陣地からは猥りに射擊をさせなんだる沈著したる豐邊大佐も、何れの方面も其小銃火の効力あるべきを測つて、一度にどつと猛烈なる射擊を開始せしめた。無論目前に歩兵は突擊して來ぬとしても、百五十門以上の大砲擊の集中火の下にあつて、三面より一師團の兵力を以て攻擊し來る敵に對し。其敵の一里に餘る全線が千米突内外に達する迄、本陣地からは四門の騎砲の外には一發も射擊させなんだといふ豐邊大佐の指揮法は、評者は實に其實効に著眼して、少しも銃砲聲を以て其臆病心を驅らんとするの傾向に陷らず。堅忍持久毅然として死傷續出

の中に一發も放たず、其効力あるべき時機を泰然として待つて居たといふ勇氣は餘りに外に類がないと敬服する。勇將の下に弱卒なしとは事實であつて、此の勇將豐邊新作の下には僅々二小隊を以て彈盡る迄、一旅團の敵と戰ふたる土屋大尉が居る。否〳〵土屋大尉ばかりでない枕旦堡守備の全體が、此の隊長の勇氣に感化せられて仕舞て。一師團の敵兵が三面から取りまいて約千米突に迫る迄、小銃射擊をせずして敵の良射程内に入るのを待つて居たといふ、無双の勇氣を現はすに至つたのである。實に美事である立派である、此樣な勇戰の爲めに評論の筆を走らせるのは、評者も實に愉快である、實に心地よい痛快の至りである。

其中に敵は小樹子を占領したる而已か、更に多大の損害を顧みずして西南部枕旦堡に突擊して侵入した。そこで油斷なき豐邊大佐は複廓的に工事を施こしたる、本防禦線の西南部に兵力を加へて大に敵を苦しめ。それと同時に敵が餘り我本線に近迫した爲めに射擊の出來なくなつた騎砲兵小隊を此樣な

時の爲めに豫てから準備したる東北端の陣地に退ぞけて、そこから西南部枕旦堡を突擊して蝟集したる敵の頭上へ、遠慮會釋もなく彈雨をばらまいた而已か、猛烈に其家屋を射擊してこれに火災を起さしめたので。敵は小部落に混亂して密集した所を、近い我が本防禦線からは猛極の小銃火を喰ひ、其上に僅か二門ではあるが必死の騎砲の有効彈雨を浴びた上に、其掩體として杖とも柱とも恃んだる家屋は砲火の爲めに猛炎を揚げ出すといふ始末。流石に勇猛なる敵もこれには殆んど辟易して、折角占領した西南部枕旦堡から逃げ出さねばならぬ羽目となつた。

これ實に豐邊大佐の野砲操典第二部第六十三の『最近距離ニ至ルマデ攻擊歩兵ヲ射擊シ得ル如ク其陣地ヲ撰定スルヲ要ス』とある條項に遵據したる遺算なき砲兵陣地の豫備が、如何にこの危急の場合に大効果を奏したか知れぬのである。これより先き四時三十分頃急行して後高大人屯に到著したる增援隊は、一時此所に躊躇したが西南部枕旦堡が敵彈の落下が少ないといふ鑑定から、

増援の本尊たる枕旦堡の方に向はずして西南部枕旦堡の方へ展開して二線となつて前進したが。丁度此の隊が西南部枕旦堡の東南半里程の處に達した時には、午後の五時前後であつて敵は續々西南部枕旦堡を占領したのであつたが。偶然にも此の占領部隊の右側から我が増援隊が正々堂々と進んだので、敵は非常に此の増援隊の爲めに驚慌を來して。正に南方及び東南方から枕旦堡を包圍せんとして居たる右翼隊を退ぞけて、東南方に面せしめて此の歩兵第三十三聯隊に對するに至つた。

これ實に最も我に都合の惡るい所へ、最も都合よく増援隊が現出したのであるがそれは實に全くの偶然であつて、決して村岡少佐が苦心計畫の餘に此樣な適當な處置を取つたのでないことは讀者に承知してもらはねばならぬ。元來他の急に赴むく増援隊が急行して其目的地附近へ到著したならば、何れに向つて増援すべきかを先づ被増援隊長に問ふべきである。若し時機切迫してそれを爲すの暇がなかつたならば、先づ戰聲の最も激しい方に赴むくべき

である。然るに村岡少佐が後高大人屯で人を派して何れに向ふべきかを偵察して、目的地たる枕旦堡方面の情況頗ぶる切迫したるを知りながら、其方面は敵彈が烈しく落下するのでこれを避けて、迂回して西南部枕旦堡へ向つたのは頗ぶる變なやり方であつて、これ實に急に赴むいたのではない不急に赴むいたのである。からして豐邊大佐から大至急直ぐ枕旦堡へ來いといふ又々督促の急使を受けるに至つたでないか。然るにそれが偶然にも敵線の右側に出た爲に、敵が西南部枕旦堡から更に我本線の南端を包圍せんとするのを喰ひ止め得たが。これ實に全くのまぐれ當りである偶中である。よしや其效果は偉大なものであつてもそれは實に過ちの功名である。先づ一種の天佑とでもいふべきものであらふ、少しも其隊長の手柄でない増援隊長としては寧ろ其處置を誤まつたものである。人或はいはん危急に瀕して居る目的地へ行くにしても態〻澤山に死傷をこしらへる必要はあるまいと。然り如何にも其通りである其距離が略〻同じくして、其行進時間に於て大なる差がないならば勿論

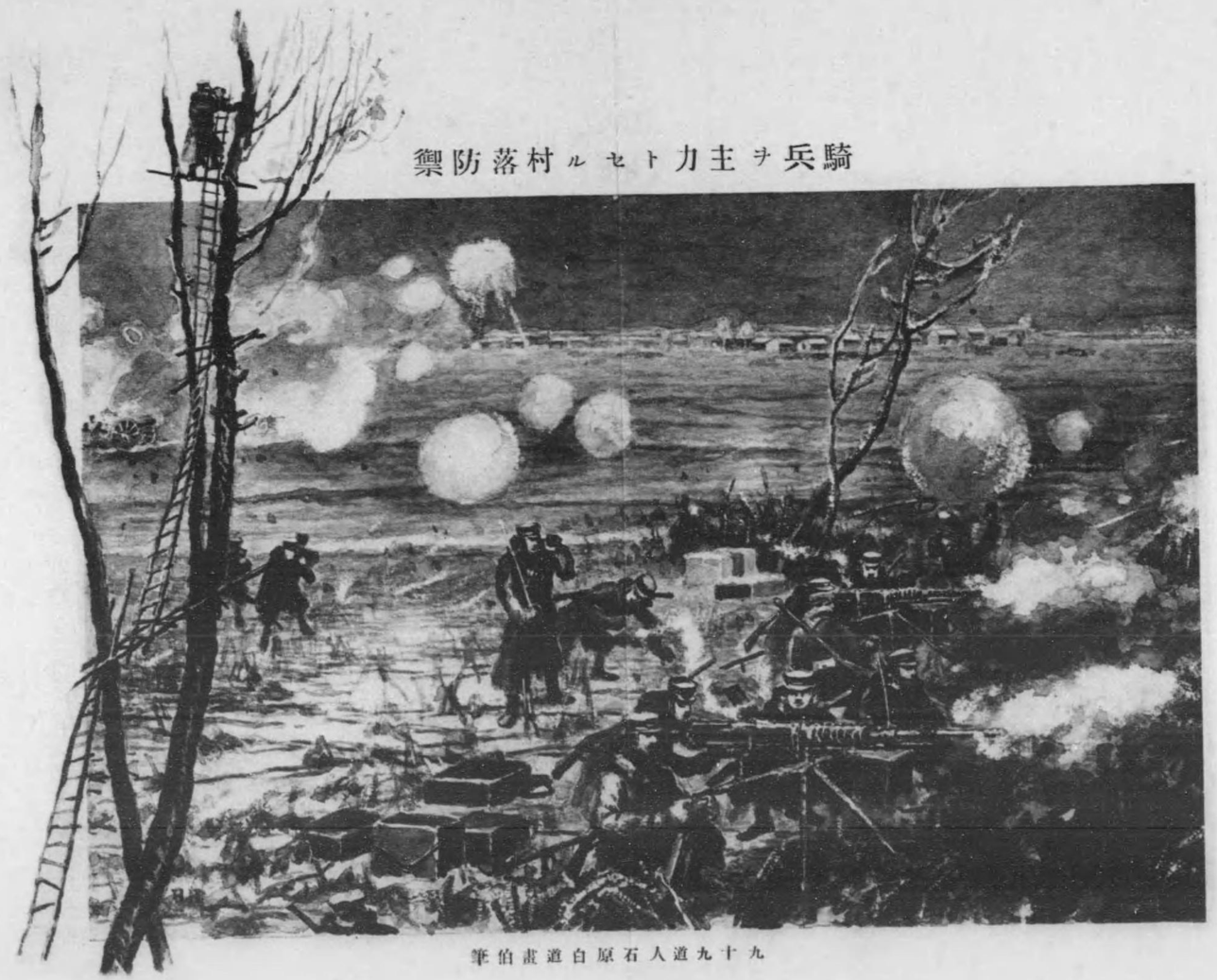
彈の來ぬ方から進むのが得策であるけれども。此大危急の場合に於て西南部枕旦堡に向つては、枕旦堡本防禦陣地の增援の爲めには相當に大なる迂回である。此場合の一秒は千萬金でも購ふことは出來ぬのである、それを時間の空費を顧みずのこ〳〵然と西南部へ向つた爲めに再度豐邊大佐から招喚督促を受けるに至つたのは、此の岡村少佐も兒玉少將配下として實に相當な人物らしい、全く勇將の下には如何にも弱卒はないものである、何といふ腑甲斐ない拙ないことをやつたものであらふ。乍去偶然にも大危急に迫つたる午後五時頃、此の第三十三聯隊の第三大隊がまぐれ當りに敵線の左側へ突然命中してくれたので、忽ちにして彼の攻擊前進を阻止し、終に獅子奮迅の敵を喰ひ止めて枕旦堡を支持し得て、さて夜に入つてから漸次に其增援兵を枕旦堡本線内に移して、午後七時の前後に於て其全力を豐邊大佐の手中に置くを得たが。敵の戰史に記載する所に依れば此場合敵は此の二箇大隊の東南方より進來するを發見し、問違から增援に來た狙擊兵第十八聯隊(二大隊)は更に其日

本軍の左翼に迫り、直ちにこれを擊退したと書いてあるが、之れも強ち否認することの出來ぬ事實なのではあるまいか。評者は參考の爲めに一寸こゝに不思議を存して書き添へて置く次第である。

以上の如く敵は步兵第十四師團の全力を擧げて、小樹子から西南部枕旦堡の線に其部隊を展開して。其一部を以て小樹子を占領して北方より我に牽制的攻擊を加へたる、北臺子の敵と相應じて我が陣地の西北に迫り。其主力を以て日沒前に我が西南部枕旦堡を占領して、其勢に乘じて複廓をなせる枕旦堡の西南部より、怒潮の奔騰するが如く澎湃として此彈丸黑子の枕旦堡を一と呑みにせんず勢を示したが。勇敢無双にして沈著動ぜざる我が步兵一大隊、騎兵二聯隊、砲四門、機關銃二挺の、極めて微弱千萬なる豐邊大佐の支隊は。勇猛に且つ巧妙に防禦を持續して敵をして寸步も本防禦線内に入らしめず。丁度其時遲ればせに到著したる增援隊が、天佑によりて折よくも偶然敵の右側を驚かしたので、敵はこれが爲に忽ち其前進を停止して、其右翼を守勢鉤形

に後退せしめざるを得ざるに至り。其大困戰の間に於て敵の百餘門の砲火をものともせずして、我騎砲兵は僅々二門の微力を以て退て東北端の豫備陣地に據り、近き西南部枕旦堡の敵を猛射したる我が將卒の剛毅なる精神の籠れる彈丸の爲めに、混淆蝟集せる敵軍は多大の損傷を被むれる而已か。此の熱烈なる彈丸は火の雨となつて村落到る所に火災を起し、炎々として天を焦して燃へ揚るといふ凄慘極まる光景に。敵は殆んど氣を呑まれて占領したる西南部枕旦堡をも打ち棄てゝ、終に舊陣地まで寒い〳〵夜中に於て退却せざるを得ざるに至つたのであるが。此の一月二十六日の早朝より夜中に至る迄、其銃數としては僅かに一千五百挺以上に上らず、それも其半分以上は平素射擊術の餘り堪能熟練とは申されぬ騎兵であつて。其他には臨時騎砲兵が二小隊と機關銃が二挺あつた而已て、敵の三方面よりする大砲百二十餘門の緩慢なりしとはいへ、大々的の攻擊準備の大砲擊に堪へ忍んで。更に歩兵十六大隊銃數少なくも一萬二千を下らざる、露の第十四師團の全力を盡せる大攻擊

騎兵ヲ主力トセル村落防禦



九十九道人石原白道畫伯筆

を支へたる上に。北方北臺子方面から露の歩兵第十五師團の一部が、牽制的に攻撃を企だてたのを美事に支持して、終に首尾よく此の枕旦堡の守備の大責任をなし遂げて、智謀逞ましきグリッペンベルグ大將の攻勢移轉に大障碍を與へ、其攻撃をして全く徒勞に屬せしむるの大原因を作つたのは、實に此の豐邊支隊の健氣なる勇戰の賜ものであつて。評者は此の黒溝臺會戰中最第一番の偉勳を建てたものは、此の現騎兵監豐邊中將閣下であることを信じて疑がはぬ。彼れや實に沈勇にして且つ戰機を見るに敏なる勇將であつて、其部下も亦た實に得易すからざる驍勇剛毅なる將校士卒が多かつたのは事實である。

更に此の枕旦堡の防禦戰の戰史を見て、評者が大に敬服嘆服に堪へぬ一事は、此の枕旦堡の戰鬪を簡明に記したる戰史の文面の上に於て、何れの時何れの所に於ても其敵の兵力を極めて過少に記述して居ることであつて、歩兵操典が其第二部の第十三に於て嚴戒してある所の敵情を過大視するの弊竇に

陷らざりしは大に嘆美すべきことである。由來實戰に於ては敵兵は頗ぶる多く見へるものである、又敵と自分との間の距離は敵前に於ては極めて近く見へるものである。お恥かしいが評者なども此樣な臆病な過失は度々犯して居る、隨分實戰の經驗のある方々には御同感の方も少なくあるまい。であるから特に歩兵操典が敵情過大視の過失を特筆して戒めたのであるが、今此戰史を見るに當つて事實々際敵の使用した兵力と、豐邊支隊がこれを見て報告し、又はそれを戰史に記述したる兵數とを較べると常に頗ぶる過少であつて。敵は現在百五十六門の砲を此方面に向はしめて、幾ら少なく見ても百門以上の砲が枕旦堡を砲擊したのは事實であるのに、豐邊支隊の報告では極々多い時を四、五十門と記載してある。即ち何れの場合も此筆法であつて敵が全力を散開して、午後四、五時の頃枕旦堡に迫つた場合に於ても、敵兵實際四大隊半を以て占領したる小樹子を、約二大隊の兵力と算して居り。又十一大隊半を以て占領したる西南部枕旦堡の敵兵を、約一聯隊を以て此地に侵入したものと

して記載してある。これ實に戰史に於て稀に見る異數の特例であつて、如何なる場合如何なる戰鬪にも、彼我兩方の戰史を對照して研究して見ると、多くは敵の兵力を過大に見て居るのが通例であつて、それを過少に見て居るのは極て少ない而已か。若しあつてもそれは多くは敵の兵力を見落し見間違へた場合であるが、此豐邊支隊は常に正當に敵の兵力を判斷し計算して居りながら。其自分に向つて來れる兵力に對して而已、頗ぶる其兵數を少なく見積つて居る。蓋し是れ此守兵一同の意氣が衝天の概があつた爲に、自然に其眼前に現出せる敵の兵數が少なく見へたのであらふが、これは實に勇ましい奥床かしい武士的の記載方であると評者は思ふのである。我全守備隊が頭から敵を呑んでかゝつて、勇氣が日頃に十百倍もして居た爲に、敵の兵力を極て正當に判斷した上に、自己に關係あるものは常に内端に内端にと計算した、であるから何のそれ位の敵兵が防げぬことがあるものかといふ勇氣が出て、如何なる大兵が迫つて來ても平氣で之と相對戰し得たのであつて。これ實に

實戰に於て大切なる心掛けの一つであると評者は思ふ。ともすると敵の兵力を過大視して守れぬ筈のない陣地を過早に放棄する樣なことが隨分ないとはいへぬ、現に我が敵としたる露軍の如き隨分勇猛な軍隊であつたに關せず、いつても其報告の上に於ては我軍の兵力を過大にと計算して居る。であるから非常に優勢なる兵力を擁して、頗ぶる順境なる戰況に立つても退却するといふ不思議な樣な戰をして居るが。初戰に於て手ひどく我軍に擊破せられた爲めに、天邊から全軍の志氣が沮喪したる結果、何時でも日本軍を過大視して終に連戰連敗に陷つたものであつて。これに反して此の豐邊支隊の枕旦堡の戰の如きは、戰かはぬ前から勇氣が守兵に充滿して、意氣が既に敵を呑んで居た爲めに、自然其前に現れる敵の兵力も少なく見へたに相違ない。であるから步騎二小隊で兎にも角にも數時間の間、敵の步兵旅團と對抗して見たり、銃數僅かに千四五百挺で一師團餘の敵步兵を引き受けて少しも劣らず戰つたり、又は僅かに四門の騎砲を巧に移轉して、敵の百五十六門の砲擊

の間に於て、敵に相當に砲擊を以て辛き目を見せたりして居るのであつて、此の敵兵の見へ方は全く我兵の志氣の振否を試むべきよい『メートル』であると評者は感じたのである。自分は實に此の戰史を讀讀して頗ぶる壯快に感じたと共に、豐邊中將なる人が勇敢にして且つ頗ぶる奥床しき人であることを知つた。同じ此の支隊の右隣りに居た三岳支隊などは、其一月二十八日の夜に於て西南啞叭臺と小臺子に夜襲を受けて、腰の拔けたる小臺子の守備隊ども は、後高大人屯と枕旦堡へ其守地を棄てゝ逃げて仕舞い。主力の居た東西啞叭臺でも大騷動をやつて、一時村の中程まで村の北端を棄てゝ退却し、其敵の兵力を隨分大なるものゝ如く報告して居るが。敵の戰史に依つて見ると東西啞叭臺には步兵第百二十三聯隊の二中隊が來襲し、又小臺子へは步兵第百二十二聯隊の二中隊が來たばかりであると記述してある。此の三岳支隊の報告と豐邊支隊の戰況とを比較して、如何に指揮官の勇氣が其部下全體に徹底するものであるかを感ぜざるを得ぬ。何と諸君人事ではない今にも一朝事あ

らば覿面自分達の足許に起るべき問題であつて、平素の修養平素の覺悟が足りないといふと、其戰況を後世に遺すべき報告の上に、自分自身で自分の勇怯を明白に自白することになるのである。豈に一日片時も精神の修養心膽の鍛錬を怠たるべけんやである。

枕旦堡の防戰は我に於ては、非常に好都合に戰鬪が進捗したので評論すべきことが少ないが、それと同時に敵に就ては非常に失態過失の連發であつて、大に評論の筆を煩はすべき出來事が少なくないのであるから。今日は極々中よしになつた隣邦の惡口をする樣で失禮ではあるが、戰術研究の前には何物も憚るべき必要を認めぬ。で大義は親を滅するといふ覺悟を以て、大に露軍の此日の攻擊不成果の原因をすつぱ抜くつもりであるが、決して惡る氣でないのであるから何卒お腹をたてゝ下さるなと、尊敬すべき露軍將校方にお願致す次第である。

此日露の第八軍團長ムイロフ中將は、北方にある歩兵第十五師團をして其

砲兵を以て枕旦堡を砲擊せしめて、歩兵第十四師團の同地攻擊を援助せしめ。他の第十四師團を以て西方より、枕旦堡を攻擊すべく計畫し命令を下したが。此の攻擊部隊として選ばれたる歩兵第十四師團長ルサノフ少將は、ガネンフエリド旅團のシドミル第五十六聯隊とトボリスク第五十五聯隊とを第一線とし、枕旦堡を兩分して其半分宛を攻擊目標と定めて。他のゲレボフ旅團の第五十三、第五十四兩聯隊を第二線として、午前九時前後から攻擊を開始したのである。

堅固に防禦陣地を占領せる敵に對して、既に昨日から攻擊を準備して居りながら。其砲擊の成果如何も考へずして、晝間のこゝ攻擊を始めるといふのは、頗ぶる以て不合理である不都合である。歩兵操典第二部第五十二には、『我ガ砲火ノ效力十分ナラズ且ツ晝間力攻ヲ要セザルトキハ夜暗ヲ利用シテ敵ニ接近スルヲ有利トスルコト多シ』と明白に記載してある如く、此場合何の支障もないのであるから先づ二十

五日の夜に於て十分に敵に接近して、夜間に於て小樹子から西南部枕旦堡に近く接著して置き。此の二十六日の早朝から大砲撃を決行して、それと相呼應して猛烈に攻撃を決行すべきであるのに。何故に此の樣に其攻撃の位置を遠方に定めて、且つ夜があけてから不利なる平坦開濶の地を暢氣千萬にも攻撃前進したのであるか。これに付ては露軍にも頗ぶる計畫の齟齬や實施の蹉躓があつて、それが爲めに此樣な不合理なる時刻に攻撃を開始したのであるらしいが、これが實に抑〻の味噌の附け始めであつて。更に今一つ不審なのは我が此の枕旦堡を兩分して攻撃の目標とする位ならば、何故に其一方を一箇の旅團に受け持たせて、他の一半を他の一箇の旅團に擔當せしめなんだのであるか。聯隊なるものは他の增援を得べき立て前のものでないとしても、第一線の旅團の兩聯隊に遠方から攻撃すべき全地域を切半分擔せしめた以上は。攻撃が進捗したる場合には、勢ひ第二線旅團を推進に使用する樣なことになつて、忽ち部隊の混淆を來すべきは明白なる事柄であるに關せず。此のルザノフ師團長はそれ等に少しも頓著せずして、ガネンフエリド旅團を以て第一線とし、ゲレボフ旅團を以て第二線として、後方旅團を以て漸次に前方旅團を增援せしめたので、終に部隊は全く混淆して仕舞た。此の場合ガネンフエリド旅團の兩聯隊を以て、獨力敵に接近する迄攻撃前進せしめて敵を其小銃火の下に屈伏するに至らしめ。さて其後方にある第二線のゲレボフ旅團を決戰の機に於て、其攻撃點に增加すると共に大突撃を決行するといふ樣な考ならば、此の師團長の取つたる處置でも支障はないが。一の旅團を前に第一線として進ましめて、道々第二線の旅團を之に增加して第一線を推進するといふやり方は、全く指揮の統一精神の統一を度外視したる攻撃の計畫であつて、これでは到底其攻撃の效を奏する見込はないのである。これが即ちルザノフ少將の第二の味噌の色あげであつたと評者は思ふ。

更に前にも申したる如く露軍は非常に此の枕旦堡の偵察に苦心して、立派に同地の防禦編成圖が完成せられて居たのは事實である。これ位に我が枕旦

堡の研究がしてあつたに關はらず、此日此の枕旦堡を半分宛受け持つて、攻撃前進を起したる兩聯隊は。王家窩棚を經て展開して枕旦堡を西北から包圍せんとしたる第五十五聯隊も。柳條口を經て展開西南方から同地を包圍せんとしたる第五十六聯隊も。申し合せて相談でもしてあつた樣に、何れも其方向を失なつて東南方へ向つて迷進した。勿論此日は濃霧が四塞して飛雪紛々たる天候で、殆んど咫尺を辨せずといふてもよい程であつたから、其方向を失なつたのも強ち無理とは思はぬけれども。前にも度々いふた如くこれを唯一の目標として、千辛萬苦して其防禦編成の圖まで作つて置いた枕旦堡を。愈〻攻撃を實行するに當つて其兩聯隊が兩聯隊とも全く方向を誤まつたといふのは、實に何といふ不注意千萬なことであらふ。此樣なことではとてもとても豐邊大佐の大膽なる枕旦堡防禦に對して、攻撃效を奏するといふことは思ひもよらぬと評者は考へる。但し此の場合少しく同情を歩兵第十四師團にしてやらねばならぬといふのは、同師團は數日來ミシチエンゴ騎兵大集團と其

行動を共にして居たのであるが、此前日に此の方面へ急に招喚せられて、晝夜兼行して長灘附近へ到著すると同時に、重要なる枕旦堡攻撃の命令を受けたのであつて。永く騎兵と共に行動した爲めに非常に疲勞して居る上に、確かに此の地方の土地にも不案内であつた、否々不案内と迄にはなくとも其近況は全く知らなんだのである。寒中徹夜の行軍から直ちに堅固なる陣地の攻撃に移つたのであるから、其計畫に行き違ひの生じたのは多少は恕すべき所はあるが。併し永の冬營中隨分と知り合ひになつて居た枕旦堡の村落を、よし近況は知らずとするも兩聯隊とも全然それを見落して東南に進んだのは、過失としてこれを責め樣よりは寧ろ滑稽至極に思はれると評者は考へるのである。此の樣な遲鈍な兵隊を使用したのであるから、夜間に枕旦堡へ接近することが出來なんだのは無理でないのであらふ。晝間でさへもそつ方へ向いて攻撃を始める樣な始末では、これを夜間に進めたならば同志打ちをして味方の方へ向つて猛烈に攻撃を決行するかも知れぬ。況んやそれが單に一聯隊

てなくして、揃ひも揃つて第一線の兩聯隊が同じ過失を犯した爲めに、小樹子の村の蔭に居た第五十五聯隊は先づ大した損害を受けずして、其方向を修正し得たけれども。途方もない遠方の大臺へ向つて正々堂々と攻撃前進した第五十六聯隊は、我が豐邊支隊の騎砲四門の斜射の爲めに散々に打ちなされて、其攻撃の手始めに於て見苦しくも敵に後ろを見せ給ふて、紅河の線まで混亂の體で潰走したに至つては言語同斷である。これ實に怠慢である油斷である不注意である、此れが御丁寧にも此のルザノフ少將の第三回目の味噌の附け燒きである。唯の一度でも隨分恐れ入るが此樣に二、三時間の間に三度も味噌を附けては、これではとてもやり切れぬのは當然である。さるにてもルザノフといへば、隨分と露軍中には名の聞えたる將軍であるのに、何といふへまばかりをやつたものであらふ。

右の通りガネンフエリド旅團の、歩兵第五十五聯隊と同第五十六聯隊は、何れも方向を間違へたが就中其歩兵第五十六聯隊は、日本軍騎砲兵の爲め散

々に潰亂せしめられたので、此日の午前には爲めに再び構を立て直して攻撃を再興する能はずして、午後の一時頃になつて始めて其戰線を整頓して枕旦堡に向つて徐々に攻進したが。此の場合には既に第一線と第二線の旅團は全く混淆して仕舞て、命令もなにもないのに左翼第二線たりし第五十三聯隊は、歩兵第五十五聯隊が方向を誤まつてそれを正す爲めに旋廻をして居る間に、自然と其左翼へ進出する仕儀となつて戰線に加はつて仕舞い。第五十四聯隊は攻撃を再興したる第五十六聯隊の左翼後を前進することになつて、ゲンボフ旅團は遠く戰線の兩翼に分離し、ガネンフエリド旅團が其中間に挾まつて構へて居ることになつたが。併し兎にも角にも先づ〳〵正々堂々と徐むろながらも攻撃を進捗せしむるに至つた。

此間枕旦堡に對して攻撃を準備したる砲兵は、相當に多數の砲彈を該村落に雨下せしめたが。其砲撃のやり方が頗ぶる氣乘りのせぬ緩慢極まるやり方であつた爲めに、枕旦堡では其砲撃を右に左に避けつゝも損害を多く受けざ

る樣にすることが出來たが。併し重砲兵の中隊は其巨彈三十餘發を發射し、又砲兵第二十九旅團の一大隊は、五百八十二發の彈丸を送つたといふことであるから、百五十六門の重輕砲からは緩慢といへども相當に多數の彈丸を枕旦堡に集中したのは事實である。それが互に相協力し相呼應して砲擊を實施せず、各箇各別に氣儘勝手な砲擊をやつたので。守兵も隨分と苦しめられたのは事實であるが、攻者の彈丸を失なふた割合には守備兵の方は、大なる損害を受けるに至らなんだのであつて。これを要するに此の不都合は敵の砲兵には統一的の指揮が全く缺如したのに起因するのであつて。此の砲擊の不一致も亦た大に歩兵第十四師團の攻擊不結果に向つて、大なる影響を與へて居るのは勿論であると評者は思ふ。我が野戰砲兵操典が其第二部第一に於て

『砲兵ノ統一指揮ハ射擊ノ威力ヲ發揚スル爲極テ緊要ナリ』

と其冒頭に於て明瞭に示したのは、蓋し此の樣な失態を生ぜしめまい爲めに、第一番に其威力發揚に最も必要なる要訣を掲げた次第であることを忘れ

てはならぬ。

砲兵の威力が揚がらぬ爲めと、濃霧や嚴寒の爲めに第十四師團の攻擊は頗ぶる遲延したけれども、午後三時前後からは大に其戰線が整頓して、逐次小部隊毎の躍進を以て枕旦堡に肉薄し、右は西南部枕旦堡の南より左は小樹子の北に至る、約四千米突に亘る長大なる戰線を以て、殆んど枕旦堡を三面から包圍して進み迫つたが。猛烈なる守兵の小銃射擊とたつた四門の騎砲の爲めに、師團の被むる損害は驚ろくべき程に莫大であつたが、物々しくも爆彈や小梯子を携へたる、四作業隊を先に進めて漸くにして小樹子の後備歩兵一中隊と、西南部枕旦堡の歩騎兵各一小隊の前進哨を驅逐して。第五十三聯隊と第五十五聯隊の二箇中隊とは小樹子を以て枕旦堡と思ひ違へて、此の小村落中に混淆して突入したのは滑稽であつたが。敵の喜劇は更に其位の程度に止まらずして、其他の第五十五聯隊の主力と第五十六、第五十四兩聯隊も、全く西南部枕旦堡を以て目的とせる本物の枕旦堡と考へて、大喊聲と共に大混

淆を以てこれに突入した迄はよかつたが。大勝利を得たつもりで萬歳を唱へんとする刹那東北方の日軍の本線から、今まで我慢して居た小銃火の雨よりも烈しき彈丸の御馳走を受けて、案に相違の大混雑を始めたのは實に何といふ間の抜けた失態であらふ。

既に此の師團は最初の展開に於て方向を誤まつて、午前中に散々に味噌を附けたのではないか、それにもまだ懲りずして又々午後に於て、現在今度は立派に見へる唯一つの枕旦堡を、右翼に向つた諸隊は西南部枕旦堡と取り違へ、又左翼に向つた諸隊は途方もない小樹子を以て枕旦堡と間違へて、師團が全く二部に分れて何れも枕旦堡と思ふて、誤まつたる村落へ別々に突撃を決行して。其占領の混雑の兵力蝟集の場合を、本物の枕旦堡から有效無類なる射撃を以て、猛烈至極に射すくめられたのであるから、敵の損害は實に容易ならざるものであつて。最初に手まはし能く防禦編成の圖までも作つた露軍が、不思議にも奇體にも全く準備のないものと同じく、何故に此樣な失敗のみを繰り返したのであるか。これには何か深い原因がなくてはならぬと思ふが、それは果して何であつたらふか大に其原因を一つ研究して見たいと評者は思ふ。

これ實に第一に軍團長が此の陣地を攻撃する爲めに、前にも述べたが態々地理に不案内なる此の第十四師團を用ひたのが抑第一の過失であつて。折角地圖まで作つて攻撃を準備して居たのだけれども、其實施者が丸で其地理にも戰況にも暗いのであるから、詳細なる地圖も何もかも何の役にも立たなんだのみか。其又地圖なるものが詳細には出來て居た樣ではあるが西南部枕旦堡と、正銘の枕旦堡との互に相獨立して居ることを知らずして、それを全く連續したる同一なるものとして製圖してあつたので、愈右翼に向ふたる諸聯隊の誤解を深くせしめたのである。其上に此の師團は一月二十三日以來、此の嚴寒中に於て非常に困難なる二回の夜行軍をなしたる而已か、二十四日の夜は全く一睡もせずして、直ちに翌二十五日からの戰闘に加はつて、疲勞殆ん

ど其極に達したる此の師團が、枕旦堡攻撃といふ大責任を負ふたのであるから。することなすこと遲延に〳〵を重ねたる而已か、其計畫も實施も頗ぶる至當を缺きたる事ばかりになつて仕舞て、二十六日は朝から晩まで殆んど不始末不都合のみを繰り返して、終に全一師團がへと〳〵になるまで惡戰して、微弱なる兵力を以て守れる枕旦堡一つを奪略することが出來なんだのであつて。其原因は此の師團の諸將官が戰術的に無能であつたのが第一の原因であつて。更に第二の原因としては土地不慣れなりしと疲勞甚大なりし爲めに終に此樣な失敗のみに終つたのであつて。就中最も大滑稽なりしは各聯隊が何れも自分の前の村落を枕旦堡と取違へたる際、凡愚等なる師團の參謀長もこれと同樣に、小樹子及び西南部枕旦堡を以て全く枕旦堡なりと確信して此の兩村落へ我が戰線が、分れ〳〵に進むのを見たる參謀長トレクボフ大佐は、疎忽千萬にも大歡喜大雀躍で戰鬪の方はそつちのけで棄てゝ置いて、自身親しく第八軍團長の許まで駈け著けて、全く御注進〳〵の格で唯今枕旦堡を略

取したる旨の報告を呈したので。如何に狼狽したからとてまさかに參謀長ともいはるゝものが、態〻自分で誤報を軍團長に齎らさふとは何人も考へぬ。からしてムイロフ中將も大喜びて直ぐそれを總司令官に急報し總司令官からは枕旦堡維持に關する命令が、第二軍司令官へ下るといふ大變な間違を生じて仕舞たが。此烏鷺たへ參謀長が報告を終つて其師團司令部に歸つて見ると枕旦堡がまだ一つあるといふ大滑稽、本線からの近距離の小銃射撃と今增加したる日本の歩兵の猛烈なる彈丸は、火災の中に周章狼狽しつゝ右往左往する西南部枕旦堡の露軍の集團を、無慘至極に殺傷したので何としても居たゝまらず。此の歩兵第十四師團と更にそれを傳令の間違から增援に來た狙撃兵第十八聯隊とは、散々な目に遇ひ殆んど疲勞困憊の極に達して。あの大寒中の滿洲の風雪の中で、しかも敵彈の雨飛する凍結したる地面に困臥したる儘何れも積雪の上に假眠するといふ、非常に危險なる狀態に全將卒が陷つて仕舞た。

無能なるルサノフ師團長は、此場合に於ても志氣を振作する爲めに、乾坤一擲の大夜襲を企だてるといふ樣な勇氣でも出せばよかつたが、何として其樣な大膽不敵なことが出來樣ぞ。士卒困憊の狀を具して軍團長に他隊と交替を懇願したが。餘りに馬鹿〳〵しい失敗ばがりを重ねた而已か、大疎忽なる誤まれる報告を呈して、大人騷がせをやらせた樣な不しだらの師團長には、其樣な勝手な願を聞届くべき限りでないと、斷然として其交替願を拒絶した。然るに此の儘て棄てゝ置けば全師團が凍死して、翌朝には例の那翁の大軍が露國で實驗した如き、白死の山を築くに至るやも知れぬので其儘にじつとして居る譯にもゆかず。終に夜に乘じて折角一日がゝりで占領したる彼の兩村落を打ち棄てゝ、此の夜の中に先づ第一に負傷者を後方に運搬して置き、更に一中隊毎に分れ〳〵になつて長灘河南から王家窩棚、長灘及び馬狼征と思ひ〳〵に全師團は鼠の如く逃げ歸つて仕舞たが、これ實に何といふ腑甲斐ない退却のし方てあらふ。

よしや其目的は達せずとも、既に敵に咫尺なる小樹子、及び西南部枕旦堡を占領したのであるから、これを萬難を排して維持して置いて、更らに一段の勇を鼓して本防禦線に向つて、三面より大突擊を決行したならば。增援が來たとはいふものゝそれでも僅かに一聯隊餘の微弱なる守備兵であるから、決してこれを奪略し得られぬ筈はないのであるが。自から手違ひや間違ひばかりを演出して、態々自己に不利益なる樣にばかり運動して、その自分の過失を犯して居ることには少しも心著かず。無暗矢鱈に日本軍を優勢なりと過信し、今夜此の地に居て其逆襲を被むつては全滅に陷ると、全く風聲鶴唳的の大臆病心を惹き起したのは實に馬鹿〳〵しくて評し樣がない。今此の長灘河南まで退却するだけの勞働をする代りに、必死に此の兩村を頑守すれば決してそれを守りをほせられぬ筈はないのであつたに、夢中になつて大汗を流して夜がな夜通し大働に働いて、御苦勞千萬にも遠い〳〵長灘河南くんだりまで退却して、此一月二十五日、二十六日兩日に渉れる同師團の難行苦行の成績

を、全然めちや〳〵に零點にして仕舞たのは實になさけない程に意氣地のないやり方であつて、甚だ失禮ではあるがこれを豐邊大佐の勇敢なる防戰に比較すると、雲泥霄壤も啻ならざるを感ぜざるを得ぬのである。飜がへつて此の戰鬪に於ける兩軍の狀況を凝つと考へて見ると、露軍が此樣に普通以外に拙ないことのみを繰り返したので、それで寡兵を以て此の大敵に對したる豐邊大佐が首尾よく大功を奏し得たのであつて。若し敵が至當に其攻擊を實施したならば、鬼神ならざる限りは僅々歩兵一大隊、騎兵二聯隊、砲四門で、何として此の枕旦堡を守備しをほせることが出來樣。蓋し此の第十四師團が此の樣に何度か何度か、過失や錯誤をくり返してくれた爲めに、遲延したる增援隊も丁度間に合ふ樣になり、危急に迫まれる一月二十六日の夜も、敵の方から逃げ出してくれた爲めに、少しの危險もなく守備の功を全くすることを得たのであつて。これ實に露軍の爲めには此の一戰が殆んどグリッペンベルグ大將の、有望なりし攻勢移轉の計畫を、根柢から顚覆せしめたといふてもよいのであるが。これを要するに露軍の此日の大不利を來したる原因を綜括して約言して見ると、概ね左の如きものに結著するであらふ。即ち

一、地形敵情を熟知せざる師團長に攻擊を命じたること
二、疲勞の極に達せる軍隊を以て攻擊を決行せしめしこと
三、砲兵の攻擊準備統一指揮を缺きしこと
四、歩兵第十五師團の牽制頗ぶる不活潑にして要領を得ざりしこと
五、天候不良にして展望の自由を失なひ且つ嚴寒の爲め運動遲延せしこと

先づ大略右の五箇條が主なる原因となつたのであるが。更に溯ぼつて其根本的の大原因を調べて見ると、總司令官と第二軍司令官との考が一致して居らなんだので、それが爲めにクロパトキン將軍はつまらぬ干涉をして。此の枕旦堡を北方から充分に牽制せんとする第十軍團や、第十五師團を掣肘したので、砲兵の攻擊準備も丸て緩慢極まることになつたのである。若しも上揭五箇條の如き顯著な原因があつたとしても、始めから兩指揮官の意志が疎通

して居て、熱心に一致協同して攻撃を決行したならば。此大兵力を用ひる以上如何に豐邊大佐が鬼神であつても、一撮みの枕旦堡を奪略し得られぬ筈はないのであつて。何の雜作もなく鎧袖一觸忽ちにして倒し得べきは當然であるが。根本の兩指揮官の意圖が各箇各別であつた爲めに、攻撃の計畫は到る處で齟齬を生じ、軍隊は爲めに其熱心を失なつて志氣忽ちにして沮喪した。その上に天候の大不良に會し嚴寒身を裂く樣な荒れ模樣になつたので、益〻勇氣を挫折して忽ち方向を間違へたり、又は枕旦堡を取り違へたりする樣な大滑稽を演ずるに至つたのであつて。古の尉繚子といふ兵書に

『天時不如地利、地利不如人和』

と書いてあるのは實に名言である千古不朽である。守者は少數な取るに足らざる小部隊であつたが協同一致一豐邊大佐の心を以て心として奮鬪した、であるから非常な困難に打ち克つて防禦を成し遂げ。これに反して露軍に於ては其指揮官同志の意志が一致を缺きし爲に、莫大なる兵力を擁して終に以

上の如き五原因の爲めに散々に其攻撃の計畫を妨げられて、此夜に於て自から苦辛占領したる陣地を棄てゝ退却せざるを得ざるに至つた。これ其罪は天時でもない地利でもない、其根元は人和を缺いたにあるのである。

これは少し枝葉に渉る嫌がないでもないが、事の序でゝあるから諸君の參考として此の評論の末に掲げることにするが、此の黑溝臺の會戰最中に大山元帥から出た訓令の中に

『總司令官ハ諸部隊ノ沈靜ナランコトヲ希望ス』

といふ文字のあつたのを評者はかすかに記憶して居る。如何に此の敵の攻勢移轉が我軍に取つて大苦手であつたかは、此の一片の訓令の文字を讀んだばかりでも、直に其重大であつたことを了解するに難くはあるまい。勿論我軍は何れの方面に於ても頗ぶる沈著して居つた、決して〳〵騷擾がましいことなどは毛頭なかつた。特に總軍司令部の如きは澤山な人が居り、又傳騎の出入や電話電報の交通が非常に頻繁を極めたるに係はらず、全くしんかんと

して無人の境の樣な感じがした。平常の戰鬪ならば談笑するものもある、茶を飲み煙草を吸ふて居るものもあるのであるが、此時ばかりは一人として安閑として居るものはない、總軍司令部悉皆が沈默して其自己の任務を熱心に實施して居た。それが爲に總軍司令部には電話の鈴の鳴る音と、電信機のかち〳〵いふ音の外には全く無音無聲といふてもよい程に、極めて靜肅であつてそれが却て凄愴の感を惹起せしめたのは事實である。此諸事に見ても如何に此の會戰が我軍に取りて危險であつて、且つ重大なる出來事であつたかは推察するに難くあるまいと思ふ。これはお慰さみに一寸當時の追懷を記しただけであるが、事の序に自分が一つ述べて置きたいといふのは、決してその樣なことではないのであつて今から其本文を次に述べることにし樣と思ふ。

明治三十八年の一月上旬であつたと思ふ、何日であつたか其日は十年もたつので忘れて仕舞たが、何でも八日か九日であつたと思ふが。總軍司令部から達せられたる情報の極祕のものゝ中に、一つ頗ぶる重要なことが載せてあ

つた。それは何であるかといふに一月の始めに於て沙河對陣の怠屈まぎれに、兩軍から終始小夜襲を行なひつゝあつた中に、土地もうろ覺へであるが何でも林盛堡か何かで、露軍の一下士を捕虜にしたのである。其下士を嚴重に調べて見た所が、彼は昂然として日ならずして日軍の敗北するであらふといふことを豪語した。で何故に日軍が敗北するかと種々に手段を設けてこれに訊問した所が、彼は忽ち左の一事を語り出てたのである。

其語る所によると、露軍では昨年の暮から新年にかけて、度々高級指揮官の軍事大會議が開かれて。其結果として一月初に於て愈乃木軍の北進せぬ中に攻勢に轉ずることに軍議確定して、時候の大寒に入るのを待ち、大略一月二十日頃を期して全軍の大攻勢移轉を決行する筈である。からして日軍は不日必ず敗北するに極まつて居ると斷言した。多少其文句や何かには相違はあつたか知れぬが、大略右樣な主旨の情報を捕虜の口から得たのであるから、總軍司令部は一下士の口述としてこれを等閑に付せず、極祕としてそれを諸

高級司令官へ通報したのであつた。評者なども如何にも其時機が露軍の攻勢に轉ずるには至當なる時である上に、彼が自分の寒國生れを利用して、溫帶人の日本軍隊に對して極寒中に戰をいどんで、其敏活なる機動力を滅殺し樣と企だてたのは、實にあり得べき計畫であつて決して空漠なる放言でないと思つたので。內心それとなく一月二十日迄に、それ〳〵戰鬪に當つて手違の出來ぬ樣に內々準備を整へた、評者而已ではない此の通報に接した限りは多分斯くあつたであらふと思ふが。さて一月二十日になつても少しも露軍に於て變りはない、が併し我が滿洲軍の左翼の方に向て、頻りに敵の軍隊の移動するといふ報告はあつたが、それでも大攻擊が來る程な模樣はないので、露助の一下士の爲めにうま〳〵一杯喰はされたかと思ふて居る其矢先、一月二十五日の午後から黑溝臺の大會戰が始まつたのである。此事は戰史の上には何も記載してないから、讀者諸君の中にも御存知ない人が多からふが、其時代に高等司令部に居られた將校の方々は、思ひ出したら如何にもそんなこと

があつたと首肯されるに相違ない。

陣中要務令第三篇第四條諜報勤務の第百に曰く

『俘虜及遺留シタル傷病者ノ言並携帶セル圖書、戰死者ノ携帶圖書或ハ敵ノ遺留セシ圖書モ亦情況判斷ノ重要ナル材料ト爲ルモノナリ』

とある外五項に分つて詳細に俘虜に就て記述してあるが、若し此の俘虜の言がなかつたならば、我軍の危險はより一層甚だしかつたに相違ないのであつて。此の露軍一下士の口述が黑溝臺會戰に於て如何に我軍に利益を與へて居るか知れぬ。これに就けても戰鬪に於て敵兵を捕獲するといふことの緊要なることであると共に、萬一武運拙なくして敵手に落ちて敵の訊問を受くる場合には、決して〳〵我軍の計畫などを輕々しく申立つべきものでない。否、輕々しくではない如何なる拷掠に出會し樣とも口を緘して一言も出さぬ樣に常々これを敎育し常々これを覺悟させねば、此時に於ける一下士の口供の如き大利益を、敵に向つて與へるといふ大不忠に陷るのであつて。將校達はい

ふ迄もないそれ位な心得のないものはないが、愚直一遍なる兵卒などには思はず敵のつり出しにのせられて、うか〳〵としやべつて仕舞ものがないとも限らぬから、平素これ等のことはよく〳〵教育して置く必要がある。何でも手なり足なり一つでも動く間は捕虜とならぬが一番である。手足がきかなくなつたならば喰ひ付いても敵と戰へ。それもかなはぬことになつて敵の訊問を受けたならば、舌を嚙んで自から處決するがよい。如何なることがあつても我軍情をおくびにも出してはならぬ。況んやそれを明白に自白するに至つてはこれ實に　皇室及び國家に對する大不忠であることを、深く〳〵銘肝せしめ置くの必要があると評者は思ふ。

大正四年一月二十九日印刷
大正四年二月一日發行

戰史評論奥附

著作者　無名戰士

發行者　東京市麹町區平河町四丁目十一番地　宮本林治

印刷者　東京市芝區櫻川町十七番地　山田三次郎

發行所　東京市麹町區平河町　宮本武林堂
振替東京一〇九一二

不許複製

適確簡潔ヲ以テ稱揚セラレツツアル「同志會著」

陣中要務詳解

全五卷

毎卷價八拾五錢
郵税内地八錢
外地拾貳錢

ハ茲ニ全部刊行ノ完成ヲ告ク

本書ハ當初ニ於テ告白セル如ク講兵指導官協力ノ下ニ同志會五氏ノ分擔執筆及分科專門ニ屬スルモノハ悉ク其專門家ノ筆ニ成ルモノナリ本堂ハ此適確ニシテ簡潔ナル本書ヲ提供シ得ルヲ以テ光榮トス乞フ一本ヲ座右ニ備ヘラレンコトヲ

大正三年十二月

宮本武林堂主人謹言

發行所　東京麹町區平河町四丁目　振替東京一〇九一二　宮本武林堂

特別販賣所　東京日本橋區通三丁目　振替東京四六四一　武揚堂書店

二月刊行
戰史評論　豫告　蘇麻堡の夜戰

適確簡潔ヲ以テ稱揚セラレツツアル「同志會著」

陣中要務詳解

全五卷

毎卷價八拾五錢
郵税内地八錢 外地拾貳錢

ハ茲ニ全部刊行ノ完成ヲ告ク

本書ハ當初ニ於テ告白セル如ク講兵指導官協力ノ下ニ同志會五氏ノ分擔執筆及分科專門ニ屬スルモノハ悉ク其專門家ノ筆ニ成ルモノナリ本堂ハ此適確ニシテ簡潔ナル本書ヲ提供シ得ルヲ以テ光榮トス乞フ一本ヲ座右ニ備ヘラレンコトヲ

大正三年十二月

宮本武林堂主人謹言

發行所 東京麹町區平河町四丁目 振替東京一〇九一二 宮本武林堂

特約販賣所 東京日本橋區通三丁目 振替東京四六四一 武揚堂書店

二月刊行
戰史評論 豫告 蘇麻堡の夜戰

大正四年二月（蘇麻堡夜戰）

戰史評論

大正
4. 3. 6
内交

宮本武林堂發行

戰史評論

成仁武夫補
無名戰士評

第二十二回　蘇麻堡の夜戰

一月二十七日敵が黑溝臺を堅固に維持する爲めには、是非とも蘇麻堡と老橋とを奪略するに非ざれば、其兩地よりの十字火に陷り永く此要地を守備し能はずといふ理由のもとに、西伯利第一軍團長は其部下諸隊を以て、拂曉以來手を更へ品を換へて攻擊を試みたが何れも不成效に終つて仕舞た。其中に二十六日の夜枕旦堡が露軍の手に占領せられたといふことが、全くの誤報であることが明白に知れ渉つて來たけれども、それでも尙且つ此の兩地の攻擊を必要として、此軍團長は必死になつて蘇麻堡と老橋の奪略に頗ぶる剛性に

力を盡した。て第二軍司令官から其攻擊を中止すべく度々訓令や注意があつたけれども、尙ほ且つ頑然として此の攻略を主張した爲めに。折から集成狙擊兵軍團長から請求のあつたを幸に此軍團の總豫備たりし狙擊兵第二旅團を招還して、彼れシタケルベルグ中將の高級指揮官の意圖に反する行動を斷念せしめんとした程であつたが。西伯利第一軍團長はいつかなグリッペンベルグ大將の此の命令を用ひずして、殆んど狂的に遮二無二老橋と蘇麻堡とを占領せんとして有らん限りの手段を盡したのである。

以上の如き敵の意氣込みであつた爲めに、此方面の衝に當れる第八師團は非常な苦戰に遭遇したが。それでも立見大將は偉らいもので著々として攻勢の態度を發揮して、此大苦戰の中に於て漸次に敵を壓迫して居たのであつたが。左翼に迫つた騎兵の大集團を退ぞけて此日の現狀を維持しつつ夜を徹するの計畫を定め。老橋と五家子とに居た第八師團の兩翼隊は翌二十八日朝迄何等の異狀もなかつたが。其中央隊として蘇麻堡附近を守備したる諸隊の前

面には夜に入ると共に頗ぶる不穩の狀況が諸方面から見へて來たのであつた。此日其左翼を頭泡の方に延して蘇麻堡西北の丘阜を占領して居た步兵第五聯隊の主力が、夜間其位置の頗ぶる危險なるべきを知つて、右翼を樞軸として後方に旋回して同村の西南端に退却すると共に。朝來蘇麻堡の西北端に位置せし同聯隊の第一大隊は、其位置を自隊の兩側に分れて居た步兵第三十二聯隊に讓つて、今退却して來た主力の方に合した。

そこで此の大切なる村落の今夜の守備は、兩聯隊が愼重に協議を重ねたる上同村西端の中央を以て兩聯隊の防禦區域の限界として。其以北を步兵第三十二聯隊が分擔守備し、其以南は步兵第五聯隊が守備すべき地區と定めたのであつたが。午後三時過から退却してそれから其守備地を移動せしめたので、兩聯隊とも其守備の交代と隊伍の整頓に大に時間を費やして居る間に、何だか敵の模樣に頗ぶる怪しむべき傾向が見へるので瞬間も油斷なく注意して居ると。步兵第三十二聯隊第二大隊の守れる村の北の方面から、『敵兵約一聯隊

攻撃し來る模樣あり』といふ報告が、午後七時半頃に同聯隊長たる森川中佐《現中將》の許に達した。これ實に容易ならざる大事件である一大事である。既に二十七日一日中殆んど間斷なく敵の攻撃に對して、頑强極まる抵抗を繼續して來た中央隊は、今や非常に疲憊の極度に達して居るのである。然るにそこへ敵の大兵力の夜襲が向つたといふのであるから、其危險なること實にいふばかりないのであつて。森川聯隊長は此の急報に接すると共に、何としても其儘にぢつとして居ることが出來なくなつた。て同村中央の稍〻北方によつた所に置いたる聯隊本部を出發して、其戰線を親しく巡視して周到に注意を與へて、其疲勞の爲めに警戒守備の手ぬかりのない樣に目を配り心を配り、寒夜の暗中敵に近き戰線を數時間に渉つて非常に丁寧に巡廻して親切に戒告して居たので、此の餘り廣からざる戰線の巡視の爲めに約三時間を費やした。これ實に同中佐が此の防禦の爲めに如何に周到懇切に其注意を與へたかは、此の時間の多くかかつたのでも知ることが出來樣。かく熱心に其全戰線に注

意を與へて聊かの油斷をもなさしめざる樣にして、左したる異狀を認むることなく聯隊本部に歸著せんとしたのは、彼れ是れ同夜午後の十一時少し過ぐる頃であつたと思ふ。

一體此の二十七日の第八師團の有樣が、實に非常な大危險に瀕して居たのは事實であつて、其諸部隊の如きも爲めに頗ぶる錯雜紛糾して居たのであつて。隨て此の蘇麻堡も御多分には漏れずして此の日の夕方には、歩の第三十二聯隊と歩の第五聯隊が殆んど混淆して守備して居たのである。即ち歩兵第五聯隊の第一大隊《第二中隊欠》は同村の西北端を占め、これを中央にして歩兵第三十二聯隊の第八中隊が其右に連なつて同村の北方を守備して居り。又其歩兵第五聯隊第一大隊の左には、歩の第三十二聯隊の第七、第四中隊が位置して村の西方を守備して。右翼歩の第三十二の第八中隊の後方には、歩兵第三十二聯隊本部が其第六中隊を豫備として控へて居り。又左翼同聯隊の第四中隊の後方即ち村の南方に當る邊には、歩の第三十二聯隊の第三中隊が豫備と

なつて居たのであつたが。村の西北方の丘阜に迄進出して此の第四中隊の左翼に連なり、終日敵と惡戰を交へて居た歩兵第五聯隊の第二大隊と同聯隊の第二中隊が。頭泡の方から進み迫まれる敵の爲めに、其左翼から側射を被むる樣になつて該陣地を守る能はず、午後遲く同村内へ退却して來たので。上述の如き錯雜混淆したる配備を改めて、此の村の西に面したる方の中央を以て兩聯隊の分界として守備區域を分ち。著々其配備を交代整備せしめつつあつた場合に、先の敵襲來の報告に接したので聊かも油斷することなく、其交代を一層愼重になさしむると共に、森川中佐は直ちに自から戰線を巡視して萬事に目を配つたのであつたが。前回にもいふたる通り此黑溝臺の會戰は事全く不意に起つた爲めに、此日歩の第五聯隊の第三大隊は遠く五家子に於て敵を支へ、又歩の第三十二聯隊の第三大隊も諸方に使用せられて此村には居らず。此の二十七日の夜に此蘇麻堡の村落に居つたのは、歩の第三十二聯隊の第三、第四、第六、第七、第八の五箇中隊と、歩の第五聯隊の第一、第三兩大隊《第二

中隊の在否不明》合計十二、三箇中隊しか居らなんだといふ始末であつた。

此樣な隊伍が錯綜したる上に頗ぶる手薄なる我戰線は、其守兵が何れも連日の惡戰に疲れ切つて居るのであるから、此の夜に於ける此の村落の守備は實に容易ならざる危險が其間に伏在して居たのである。からして敵襲の報を得ると共に慧眼此の弱點を見拔いて居た森川中佐は、聊かも躊躇することなく直ちに戰線を巡視したのであつたが。左したる異狀をも認めず稍〻安心して聯隊本部の位置に歸著せんとせし折も折、村の西北端の突角から其北の方向へかけて、恐ろしいとも物すごいともいひ樣のない喊聲が起ると同時に、急遽猛烈を極めたる銃聲が俄然として響き亘つたのであつた。

歩兵操典第二部第八十七には

『夜間ノ防禦ハ一層困難ナリ故ニ防者ハ防禦線前ニ警戒兵ヲ出シ前地ヲ照明スル等諸種ノ手段ヲ盡シテ敵ノ近接ヲ警ムベシ云々』

とあるけれども前にも述べたる如く、此場合終日敵と近く相接して交戰し

て居た上に、日沒前に於て歩の第五聯隊の退却した爲めに、此の村落を二分して半分宛守備することに協議が纏まつて、其交代に必死になつて居た最中であるから、到底其樣な完全なる手前勝手な注文に應ずるの餘裕があらふ筈がないのである。けれども既に其交代を終て西北角に居た、歩の第三十二の第八中隊の如きは其主力を第二の圍壁中に置き、其一小隊を西北端の突角の最外壁に據らしめて警戒をさ〳〵怠りなく守備して居たが。其他は孰れもとても充分なる警戒法を執ること能はずして、晝間惡戰したる姿勢を夜に入つた後に、少しく補修して其儘て警戒を嚴にして居たといふ位の有樣であつた。からして敵が夜襲をして來た場合には、鼻の先まで來ねばそれを知ることが出來ず、隨て我軍の爲には非常に危險千萬であつたのである。であるから何事をさし措いても先づ第一に戰線を巡視して、其不完全なる場所を改めさせ樣といふのが抑〻の眼目で、森川中佐の戰線巡視は實行せられたのであつたが。諸方面とも大なる異狀なくして聯隊本部へ歸著せんとした此場合に、突然前

揭の喊聲と銃聲を聞いたのであるから、由來頗ぶる愼重なる性質の同中も佐、それを我に對する敵の夜襲の音などとは夢にも思はずして、多分此の聯隊の右に隣接して紅河の線を守れる同旅團の歩の第十七聯隊が、敵に向つて夜襲を始めたる其物音であらふと考へたのであつた。

然るに瞬間の後にそれは全く敵情判斷の間違ひであつて、敵は驚濤怒濤の如く我が此の歩兵第三十二聯隊の第八中隊の占領したる、村の西北角と其北方全部とに向つて、非常な大兵力を以て夜襲を實行したのであることが知れた。其瞬間に敵は待つたなしに既に村落内に闖入して來たので、叱咤の聲叫喚の音は喧々囂々として闇を破つて、其物すごきといふばかりない有樣であつたが。第一番に敵の衝角に突き當つたる第八中隊は、二段に配備したる儘全隊殆んど必死となつて猛烈至極に極々近距離で敵を射擊して。敵が其兵力の大優勢なるを恃んで無理無體に、執拗頑強何度も何回も繰り返し〳〵、鋭鋒當るべからざる勢を以て決行したる突擊に對して、奮然決死の勇を出し

てこれを迎へて。見る〳〵中に其五、六十人を殺戮して大に敵を辟易せしめて、既に圍壁を超へて村内に闖入せんとする强敵を、此の西北角の圍壁に於て兎にも角にも喰ひ止めたのは、流石に立派な戰鬪のしぶりであつて。此の中隊とその中隊から前遣したる最外端の一小隊とが、一心不亂に敵を拒止したる爲めに他の諸中隊も準備が出來て、目に餘る敵に對して曲りなりにも防守の法を講じ得た而已か。敵は此の突角の一中隊の爲めに其前進を喰ひ止められて、死傷は出來る隊伍は亂れる前進は遲滯するといふ結果に陷つたのである。實に此の歩の第三十二聯隊第八中隊の、此の夜に於ける勇戰の懸け引きは全く目ざましきものであつて、これ即ち歩兵操典第二部第八十九の示す所の條文に則とり、全く他の助力を當てにせずして獨力以て其守地を死守したるものであつて。若し此の歩兵第三十二聯隊第八中隊のいの一番の勇戰がなかつたならば、或は此夜此の蘇麻堡の一部を維持して旦たに達するを得なんだかも知れぬのである。

第八中隊が斯くして辛くも北方及び西北方より、汐時の海潮の寄するが如く突擊し來る敵を喰ひ止めたると相前後して。敵の一部は此中隊と其分遣せる一小隊との間にある道路を傳ふて、忽然村落内に侵入して來たので此の中隊は頗ぶる困難なる境界に立つに至つた。巡廻の歸途に此の敵の一部の村内へ侵入したのを知た聯隊長は、其手中にあつた第六中隊を聯隊本部の直北にある土壁に據らしめて、咄嗟の間に此所から今侵入して來た敵の右方の横面を近距離の猛射を以てなぐりつけた。勢込んで突入して來た敵兵も其退路の方には、依然として勇敢なる第八中隊が控へて居り。更に其右横面から烈しい第六中隊のお面とも何とも先觸れのない側射を項戴して、それが爲めに忽ち大驚慌に陷つて更に其後方までも突入するといふ勇氣を失なひ、此近傍の土壁の蔭にかぢり付いて家屋に無暗に放火しつつ、暗中亂射を始めるといふ爲體であつたが。其後續々として此の西北角から北方にかけては、敵が非常の大兵力を以て壓迫して來るので、頑然として西北突角の最外壁を死守した

る第八中隊の一小隊も、遂に其分離して居るの危險を慮ばかつて、其斜後方に壁を隔てて居る第八中隊の主力に合し、此所に全く此の一廓を枕として討死するの覺悟を以て、全中隊一團となつて敵を近く引き受けて其接戰を繼續した。

然るに敵は此の方面而已ならず、西方よりも亦西南方よりも大兵力を以て、殆んど同時に大夜襲を行なつたのであるから、蘇麻堡は實に此の敵の大兵力の三面包圍の中に陷つたのであつたが。當時正西方に面して居た歩兵第三十二聯隊の第七中隊と、其左に連なつて歩の第五聯隊と交代すべき豫定であつて未だ其運びに至らなんだ第四中隊とは、相當堅固なる圍壁に據つて近距離より頗ぶる烈しい射擊をしたので、敵も此所には餘りに突擊を繰り返さなんだらしいのであるが。其南方に居たる歩兵第五聯隊の方には、大分家屋はあつたが、悲しい哉充分掩體とするに足る程な墻壁がなかつたので。北方西方に敵の進來したと相前後して、此所にも亦殆んど大海嘯の寄するが如き有樣を以て、敵は滔々滾々として村落内に突入して來たのであつたが。前に述べたる歩の第三十二聯隊第四中隊の圍壁の左に、急造の眞假似方ばかりの塹壕を設けてそれと相連なつて西方に面したる歩の第五聯隊の第三中隊《一小隊欠》と第四中隊は。敵の近距離に迫るを待つて一時に百雷の轟くが如く、猛烈なる迅速射を以てこれを迎へたけれども、傷者を踏み超へ死者を躍り越へて突擊し來る、無數の大敵に對しては急造の塹壕に據つた五箇小隊、しかもそれは二十七日全日大惡戰をしたる後に、更に移つて此地を守備したる疲れ切つたる五箇小隊では、如何に憤擊突戰しても到底これを防ぐことが出來ずして、無念ながらも漸次村内へ退却するといふ大逆境に陷つた。これ實に已むを得ざるに出てたのであるが此の二中隊の退却は、延いて歩の第三十二聯隊の最左翼にある例の第四中隊の左側背を非常に危くした。忽ちにして此の中隊は其側方及び其背後まで敵が侵入するに至つたが、勇敢にも堅固なる圍壁を恃んで貧乏搖ぎもせず、此の壁中に其後數時間踏み止まつて奮戰したのは、實

に比類の少ない勇戰であつたが、これ實に堅固を極めたる圍壁に據つたお蔭がたしかに五割以上はあつたのである。此點から觀察すると歩の第五聯隊の五箇小隊の退却は、頗ぶる同情すべき所があると評者は思ふ。

前の第五聯隊の第三、第四中隊の五箇小隊が敵襲を受けた時に、其左側後方に位置したる同聯隊の第一大隊長代理夏脇岩與大尉は、一中隊を欠ける其大隊の一中隊と二小隊(即ち前掲の五箇小隊)を以て西方を防がしめ。自からは第一中隊と第三中隊の殘りの一小隊を率ゐて、今や勢すさまじく侵入して來る目に餘る大敵に對して、死物ぐるいの大逆襲を南方に向つて決行して、一時此所に敵の鋭鋒を挫きたる後、稍〻後方に退ぞいて蘇麻堡の殆ど中央に於て、隊伍を整頓して敵の進來を迎へたが。衆寡非常に懸隔したる劣勢の兵力を以ては何事をもなすこと能はずして、殘念ながら次第〳〵に森川中佐の聯隊本部の方へと壓迫せられて、ぢり〳〵退却せねばならぬ羽目になつたのは、實に是非もない運命といふの外はなかつた。

更に北方へは益〻敵の兵力が增加して、彼は漸くにして奪ひ得たる村端に於て兵力を整頓集結して、そこに防守の計畫をなすと共に、更に進んで森川聯隊本部を一擧に奪略せんとする模樣を現はしたが。丁度此際西方第四中隊の後方に位置したる第三中隊は、第一大隊長關口少佐の命によつて、聯隊本部へ急援の爲め駈け著けたので、森川中佐は大恭悅でこれを第六中隊の左方の壁に據らしめて取敢へず直前の敵と對抗せしめたが。敵が村端に足だまりを作つて更に大擧せんとする有樣を看破したる同中佐は、此の第三中隊の全力を以て村の北端の中央家屋に據つて、例の聯隊本部乘り取り策を講じつゝある敵に對して、先制の利を占めて我兵力の寡弱なるを知りながら、思ひ切つて我より進んで此の敵に向つて大突擊を決行したが。敵は非常な大兵を擁して近距離の猛射を以て之を迎へたので、死ねや〳〵とばかりに勇敢なる第三中隊は何度か繰り返して突擊を決行して見たけれども、多大の損害を受くる而已で何等寸功をも收むることは出來なんだ。が併しそれが爲めに敵の企だ

てんとした聯隊本部乘取り策は、全く此の逆襲のあつた爲めに其鼻先をへしまげられて仕舞たのである。

戰史の上で見た所では此の夜襲の時間には、稍〻不明瞭な點がないでもないが敵がたしか午後九時半から運動を起したといふのであるから、それが暗中を靜肅に進んで我蘇麻堡の線に到達したのは、多分十一時かそれより少し過ぎてあつたに相違なく。又其敵の村内へ突入したのは各方面多少の前後はあつたであらふが、何にも左して大なる時間の差はなかつたに相違ないが。何れの方面もそれ相當に其力のあらん限りを盡して敵を支へて、堅忍持久大に敵を苦しめて。五箇聯隊より成る十二箇大隊を師團長が自から指揮して、極めて大規模に實行したる敵の大々的の大夜襲を。微々たる實力二大隊(歩の第五聯隊第二大隊は逃げたから)即ち約敵の六分の一を以て、よし其一部分たりとも終夜頑强に持ちこたへて、敵の八割方の成功と稱すべき夜襲をして終に其目的を充分に達せしめなんだのは。眞に雙手を高く擧げて其勇猛と其堅忍

を稱賛するに餘りあるが。此の勇猛なる諸中隊の間に於て行はれたる戰鬪中特に我々軍人が、大に鑑戒として銘心すべき大教訓が概括すれば三つあると評者は思ふ。否々殆んど其全部が鮮血を以て戰史の上に特筆されたる、世に比類なき至珍至寶の大教訓であるが。其中に就て更に金剛石中の至上至良の金剛石とも見るべき最貴最重なる鑑戒が、確かに三箇程耀々として夜を照して居ると評者は思ふのである。て戰況を述べつゝある途中で少し變な樣ではあるが、忘れては尙更大變であるから幸に思ひ出した所で今からそれを順次に研究して見樣と思ふのである。

即ち夜戰の爲めに前途を照すべき趙氏連城の珠として、其第一に數ふべきは第八中隊とか、第七中隊とか又は第四中隊とか、何れも歩の第三十二聯隊に屬する各中隊が。家屋の堅固なる圍壁に據つて他の應援を求むることなく、其一廓を以て自己の責任と共に國に殉すべき所と定めて。少しも惡びれたる態度をなさず退却とか求援とかいふ行動を取ることなく、自己の背後に大敵

が侵入し自己の側方には大火災が突發しても、少しもそれが爲に動搖したり騒擾したりすることなくして。泰然自若として必死となつて敵の諸方面より來り迫るものに對して、一兵一卒のあらん限りは決して此圍壁を退ぞかぬといふ覺悟を堅めて、頗ぶる頑强に防禦を續行したことてあつて。これは一面から見れば大兵を以て四方から包圍されて、それが爲め是非なく此の樣な有樣を現出したとも見へぬことはないが、よしやこれが已むを得ざるに出たとしても、若し其覺悟が軟弱てあつて且つ其勇氣が足らなかつたならば、到底此樣な頑强なる抵抗が持續され樣筈がない。蓋し我此の蘇麻堡守備の第三十二聯隊の諸中隊は、此地の退却が全第八師團否々々全滿洲軍の一大事であつて。若し此場合此の蘇麻堡を敵手に奪はれたならば、我日本軍の右翼は全く敵に擊破せられて仕舞い。其結果は如何なる大敗を持ち來すかも知れぬといふことを、上下一同深く其心肝に銘ずる程によく知り貫いて居た爲めに。到底敵し難き程の大敵のしかもそれが、猛烈を極めたる夜襲を以て八割以上成

功して、其敵兵が我が守れる村內に充滿するに至つたに關せず。死んても骨になつても其任務の地を離れぬといふ、勇ましく健氣なる覺悟を以て他の力を借り樣とせず、依賴心を起さず獨力を以て各箇に各別に、其受け持てる家屋の圍壁を剛性我慢に何としても手放さなんだ。それが爲めに敵は其大部分が村內に侵入して居りながら、全くこれを奪略することが出來ざる中に天明に達し、忽ち我友軍の加勢の爲めに非常に不利なる位置に立つて、此の可惜獲物を棄てて散々の體を以て退却せざるを得ざるに至つた。即ちこれ步兵操典第二部第八十九に於ける原則の示す所の

『夜間ノ防禦ニ於テハ適時ニ比隣部隊ノ協同ト後方部隊ノ援助トヲ期シ得ザルガ故ニ各部隊ハ斷乎タル決心ヲ以テ各其位置ヲ固守シ最近距離ニ於テ火力ヲ發揚シ敵ヲ殲滅スルコトヲ勉ムベシ云々』

とある條文に全然一致したるやり方てあつて、將來の戰術界千秋に涉つて夜間に於ける防禦に於ては、此の各中隊の行ふたる如き各箇獨立して其守地

を死守するといふことが、不變不滅の光明を夜戰防禦の上に與へてくれたものであつて。これ實に最も大なる敎訓の一つであると考へるのである。寡聞なる評者は此の際此の第八中隊以下の各中隊長の姓名を知らぬのは如何にも殘念であるが、よしや其姓名は世に知られずとも其人の實行したる戰例は殆んど千歲不朽ともいふべき夜間防禦の模範であつて、其勳功は實に比類少なき援群の殊勳と稱すべきものであると評者は信ずる。

更に第二番目の金剛石として數ふべきは、此危急存亡の天下分け目の大事の場合に當つて、此の聯隊の第一大隊長關口少佐が、よし其位置の配備上からそこへ應援するに都合がよかつたとしてからが。自己の不足がちなる兵力の中からして其第三中隊を割いて、それを烈しき戰聲を聞くと共に聯隊本部の方へ增加せしめたことであつて。これ實に協同一致の最良模範であると思ふのは決して評者ばかりではあるまい。勿論此の隊は蘇麻堡の西方面に位置したる第四中隊の後方に、第一大隊の豫備として控置せられて居たのであつ

たから。それが少し退ぞけば自然と聯隊本部の所在に出ることにはなるのであるが。戰史の上に大隊長がこれを聯隊本部の位置に增援の爲め派遣したと明記してある以上は、多分此の關口少佐は今や第五聯隊と交代せんとして居る、此の第四中隊の方に巡視でもして居たのであつたらふ。餘りに想像を逞ましふし過ぎる樣ではあるが、先づ前述の通りと見なしてさてそこへ敵の大夜襲が西北及び北方に起つて、其大戰聲が喧々囂々として鳴り響いたのである。此の場合少しく決斷の鈍いものであると、其烈しい戰聲の爲めに椽面棒をふつて仕舞て、何等の處置も何等の動作も出來ぬ樣なことになるものであるが。よしそれ程の凡愚等でなくとも或は今現に他に此の樣な夜襲が來た以上は、自分の受け持ちの方面にも引續いて敵が來るかも知れぬといふ鬼胎から。先づ其豫備隊を手放なさずして其模樣を見んとする樣な傾向に陷りやすいものである。然るに此の關口少佐は此の戰聲を聞くと同時に、其方向の聯隊本部の方であることを知つて、直ちに其方面に其全豫備隊を急赴せしめて、

他の第四中隊一中隊を以て西方面を嚴重に警戒防守した。これ實に犧牲的の精神に富める證據であつて、極めて高尚なる大道義心より發する、實に尊とむべく敬まふべき誠心誠意より全軍の勝利の外には、露聊かも他の利己の慾念をさしはさまざる所の、全く眞實正銘なる協同動作のやり方の手本であつて。一寸と戰史を讀んで見た所では何でもない、極めて平凡な當然なるやり方であつて少しも褒むべき點がない樣に思はれるが。蠶がへつて各自が實戰に於て苦戰惡鬪を經たる覺へのある人々は、此の樣な場合に此の大切なる豫備隊を、惜し氣もなく他隊の應援に出すといふことが、決して容易に出來ることでなくしてこれが爲めに、如何に顧慮を要するかは評者の言を待たずして知るべしであらふ。これ實に彼の歩兵操典の綱領第六に示す所の大切なる原則に、其高潔なるやり方が極めてしつくりと相吻合して居るのである。誰一人として知らぬものはないのに甚だ餘計なむだ事の樣ではあるが、評者は其れを必要と認めるから此所に彼の綱領の第六の全文を掲げて見樣と思ふ。

『協同一致ハ戰鬪ノ目的ヲ達スル爲最モ重要ナルモノニシテ命令ヲ以テスルノ外各人ノ獨斷專行ニ待ツモノトス蓋シ兵種ヲ論ゼズ指揮官タルト兵卒タルトヲ問ハズ各〻自己ノ任務ノ遂行ニ努力スルハ即チ協同一致ノ趣旨ニ合スルモノニシテ戰況ノ變化ニ應ズル臨機ノ手段ハ一ニ各人ノ獨斷ニ待タザルベカラズ而シテ獨斷專行ハ必ズ軍人精神ヲ基礎トスル公義心ニ出テ時トシテハ自ラ任ジテ友軍ノ犧牲トナルノ覺悟アルヲ要ス』

よしや此關口少佐の差遣したる第三中隊が、左して大なる效果を奏するに至らなんだとしても、その自己の方面の危急なるを知りながら、自からそれを寡弱なる兵しか持たぬ一身で引き受けて。その手にあつたる唯の一中隊しかない豫備隊を、何等命令も通知もないのに主力の急に赴むかせたといふのは、實に後代に傳ふべき戰場大美談の一つとして、評者はこれを特筆大書的に稱贊するに躊躇せぬものである。但し此の場合の各中隊は相錯雜して居た上に、戰史の記述が頗ぶる不明確な點があるから、評者の申分は餘りに想像

に過ぎる褒め過ぎるといはるればそれ迄のことであるが。それても關口少佐が主力の急に投じて一中隊を送つたのは、單にそれだけても充分稱賛するに足るものと評者は思ふ。

更に其第三顆目これは頗ぶる光りのない黑玉の方であつて、實に此評論の紙上で公然とこれを論難するのは餘りに心地よくないのであるが、去りとて棄てて置いては後車の戒とならぬから、是非なく今からそれを一つ研究して遠慮會釋なく評論して見樣。歩兵第五聯隊は此の二十七日終日此村の西北方の丘阜の上で、優勢なる敵を引き受けて大苦戰をやつたる結果。到底その陣地が持ち切れぬことになつて日暮れ前に此の村端に退却し。第一大隊の三箇中隊は前にも述べた勇敢なる夏脇大尉がこれを指揮して、第三十二聯隊の左翼に連なり村の西から西南方にかけてこれを守備して。さて其左翼後方に當る村の中の十字路の邊に、此の大隊の第二中隊と第二大隊とが纏まつて豫備隊となつて居たが。午後十一時前後に於て例の敵の大夜襲が三方面から蘇麻

堡ををつとりまいて、極めて猛烈に決行せられたる場合に於て。此の不都合なる五箇中隊は果して何をしたか、試に戰史の本文を其儘に引用して一つ諸君の參考に供し樣。

『當時歩兵第五聯隊第二大隊（長代理大尉中村午郎第二中隊ノ殘兵ヲ含ム）ハ村落東南部ニ位置セシモ全村既ニ敵手ニ歸セリト誤認シ河圪子ニ退却セリ』

何といふ腑甲斐ない大失態を演じたものであらふ。勿論同大隊は隨分晝間の戰の爲めに疲れても居つたらふ、又其苦戰の結果此所まで退却したのであるから、其志氣も實際大に沮喪して居たであらふと思ふが。併し何れにしても日本男兒としてある間敷振舞である行爲である。實に卑怯千萬である未練至極である何といふ大臆病を起したものであらふ。此際此時戰勝たずして退却して村内にかたまつて居る眞夜中に、蘇麻堡全村に敵が奔龍飛虎の如く荒れ狂ふて飛び來つて、其喊聲銃聲叫喚悲鳴は到る所に百雷の如く轟きわたる而已か。深紅の火炎は滿洲荒野の凄まじき闇夜の曇天を焦して、炎々として

到る所に焚へあがるといふ有様であつたから。これを見て味方は全く敗退したと思ふたのは餘りに無理な想像でもないと思ふが、それなればその退却をここに於て收容するが此の中村大尉の責任ではないか。若し此方面に退却して來る模様がなかつたならば、何故に進んで村内に侵入したる敵の右側面に對して、猛烈果敢の大逆襲を決行して我が友軍が村落中を退却するのを、其側方から掩護し且つ抑止せなんだのであるか。是れ實に同大尉が當然なすべき此場合の任務ではないか。それに何ぞや何等施設する所のないばかりか、單に敵が村内に充滿したといふ而已に仰天して、歩兵第三十二聯隊に聯絡をして見るでもなければ、又同聯隊の第一大隊の夏脇大尉の有りかを尋ねて見るといふでもなく。唯々村内に充滿したる彼我の喊聲と銃聲に、其魂魄を天涯までも飛して仕舞て、全くの腑拔けの骨拔けの腰ぬけとなり果てて退ぞくも退ぞいたり、河圪子まで一目散に逃げ出したとは何といふ醜態であらふ。此様な不祥なことが此の戰史の頁の中にあらふとは評者は全く實に思ひもか

けなんだ、それ故此の夜戰の研究を始めたのであつたか、此の一項を讀過して全く呆然自失した實に殘念である遺憾である、何といふ弱虫が我が此の歩の第五聯隊の中に居つたものであらふ。戰史の文面は頗ぶる簡單であるから詳細は知れぬ、此の退却にもそれ相當に理由があるであらふけれども、如何に大なる理由があつても、又如何に大なる事情があつても、此の隊長の所爲は諺にいふ岩蔭以上であるドン五里も實に三舍を避ける。我が勇猛無比なる第八師團の黒溝臺の會戰に、此の戰史の二十二字は大なる一汚點を印したるものとして、評者は此の中村大尉の指揮したる大隊に向つて、其不都合なる所爲に筆誅を加えずして許して置くことは出來ぬ。是蓋し畢竟するに軍人は或る場合には一下士が大隊を指揮せねばならぬ場合があるかも知れぬ、その様な大非常の場合を考へて平素から、其精神を鍛練し其學術の研究を怠らぬ様にせぬと。えてして突發したる一大事の場合に適當なる處置が出來ずして、其結果は軍人として最も不名譽なる卑怯未練の名を取るに至り、終には其不

覺の爲めに一家一門に其累を及ぼすに至るといふことを、深く〳〵記憶して一刻片時も決して忘れてはならぬのである、前車の覆轍豈に懼れても戒めざるべけんやである。

以上の如き惡闘苦闘を重ねて夜戰の大教訓を作成しつゝ、暗夜の村落内に敵味方混淆して搦闘をして居る中に。其各隊は此の村の中央の稍〻北方に位置して、此の蘇麻堡防禦の中心をなして居た所の、例の森川中佐の歩兵第三十二聯隊本部の占領したる、堅固なる圍壁の方へ何れの方面からもぢり〳〵退却して來たので。同中佐は先づ第一番に退却して稍〻潰走に近き有樣になつて飛び込んだる、歩兵第五聯隊の第三、第四中隊を大聲叱咤してこれを鼓舞激勵し。其人心の稍〻沈靜して其隊伍の整頓するのを待つて、これを同聯隊本部南方の圍壁に據らしめて、此の方面から迫り來る敵に當らしめることにした。

て此の森川中佐の聯隊本部は、西北に突出して一廓に立て籠り准獨立的に奮闘して居る第八中隊と、北方村内を東西に通過する道路に沿へる土壁に據れ

る第三、第六兩中隊と、西方斜めに西北に向へる村端の墻壁に據りて、第八中隊の左方に連なつて村の西端を防げる第七中隊と、更に今ま逃げて來た歩兵第五聯隊の第三、第四中隊とで、北、西、南の三面を兎にも角にも堅く防禦することの出來る樣になつたが。第七中隊の直ぐ右に居た第四中隊とは全く連絡が絶へて仕舞い、又第八中隊は確かに勇敢に敵に相對抗して居るのは知れて居るが、其れとの交通が頗ぶる容易でないといふ有樣で。前にも既にいふた如く此の村落を防禦したる各中隊は、何れも自己の持場持場を一寸も動かずして、殆んど獨立式に必死の奮闘を續けて居たのであつた。

其中に村の南方から突入したる敵に殆んど包圍されつゝ、夏脇大尉が歩兵第五聯隊の第一中隊と第三中隊の一小隊とを率ゐて、此森川中佐の許へ退却して來たので。同中佐はこれをも其前に退却して來た同聯隊の第三、第四中隊と同樣なる、聯隊本部南方の周壁に據らしめたる上に。更に同大尉の頗ぶる勇敢なるを見込んで今此の隊の後方から追躡式に侵入して來る敵の南方より

の進路を塞ぐ爲めに、直ちに此の村落の南部の家屋を燒夷せしめた。斯くして森川中佐は此の聯隊本部の北方にある家屋を以て複廊として、此所に愈〻此地に諸方から集まり來れる疲れ切つたる兩聯隊混合の七箇中隊を纒めて、潔ぎよく城を枕に討死するの覺悟を決定して。現に此村の東北方に紅河の線を我が歩兵第三十二聯隊の第一、第二中隊と、歩兵第十七聯隊二箇大隊とで堅固に占領して敵と對戰し。其後方に此の森川聯隊の第五中隊を豫備として手中に握つて居る所の、田部旅團長の下に急使を走らせて、始めてこゝに其戰況の甚だ危急なることと、更に其採用したる決死防禦の處置とを報告せしめたのであるが。此場合非常に戰況が繁忙を極めた爲めに、殆んど使を出すの暇もなかつたからでもあらふが。併しながら此樣な危急存亡一瞬に決するといふ、一大事の瀬戸際に達する迄も、少しも他人の助力を求めたり、又は依賴心を起したりすることなくして、其體のつゞく限り其力の及ぶ限りを盡して村落内の味方の敗兵を集結して、全く三面に敵を受けて旅團との交通も頗ぶ

る危ふきに瀕するに至つて、始めて其危急なる戰況と其堅確なる死守の決心とを報告して、尙ほ且つ此の旅團長の極めて手薄なる兵力をしか持つて居らぬのを推察して、一兵の增援だも求めなんだのは實に森川將軍一生の大出來てあつた。歩兵操典第二部第十三の『己レ危急ニ瀕スルノ時ハ他部隊モ亦同一ノ景況ニ在ルノ時ナルコトヲ想ヒ妄ニ增援隊ヲ請求スルコトアルベカラズ』とある、此の戒めを守つて堅忍持久自己の責任は全滅する迄も、決して他人の世話にならずして自分の獨力を以て盡して見せるといふ、實に立派な男らしい健氣なる意氣込を以て、毅然として此の大敵中に孤立して、戰史の所謂亂戰紛鬪を形容でなく實地にやつたる森川將軍こそ、實に困難極まる夜間防禦の立派な典型的の指揮官といふべきである。評者は古くから此の將軍を熟知して居るが、實は其溫厚篤實なる上に餘りに寡默なる所からして、君子人としては衷心から尊敬して居たけれども、此樣な戰場の勇將であらふとは全く以て思はなんだのである。然るに自分が好々老爺として敬愛して居た此の將

軍が、此の樣な勇敢にして剛毅なる性質を備へて、操典の明文中にも『夜間ノ防禦ハ一層困難ナリ』と明白にことはつてある程の難儀を、斯の如く適當に斯の如く立派に斯の如く勇ましく持續指揮して。此村落を八割通り迄占領した る敵兵をして、唯此の一聯隊本部の眞の彈丸黑子の如き圍壁而已が奪略し得られなんだ爲めに、多大の死傷を被むつたのを儲け物として、翌二十八日の朝から其日の午後迄に渉つて、散々な目に會ひつゝ退却せざるを得ざるに至らしめたのは。實に此の森川中佐の一心不亂に蘇麻堡の北部を、死を決して遮二無二守備してくれたる賜ものであつて。同少將が豫備に入るに當つて名譽中將に昇進したのは正に當然である、否、當然どころではない自分は此の位の戰爭をやつた人物には、確かに現役の師團長としても充分に其職責を適當に盡し得て餘りあるのみか、其膽略勇氣は戰場の師團長として必要なる性質が立派に具備せられて居るといふを憚からぬ。況んや同將軍は天保錢出身なるに於てをやである、これを豫備にしたのは實に遺憾千萬であると評者は思

蘇麻堡ノ夜間防禦

石原白道畫

ふ。先づこれ位で此の蘇麻堡に於ける夜戰の評論は、一先づ味方の分だけはお仕舞として。さてこれからは前例の如く露軍に一つお鉢を廻はすつもりであるが、これは又頗ぶる研究に値すべき出來事が多々益々ある樣に評者には思はれるのである。

露軍に於ては枕旦堡が二十六日夜に於て、第八軍團の歩兵第十四師團の占領に歸したといふ誤報が一時信用せられた爲め、此の方面に戰鬪しつつあつたる西伯利第一軍團長シタケルベルグ中將は。同夜第二軍司令官から老橋、蘇麻堡、黑溝臺の線に位置して、以て日本軍の來襲に備ふべく命令せられたので。翌二十七日には レーシ 支隊をして老橋を攻擊せしめ、東狙兵第三聯隊をして蘇麻堡の日軍を擊攘せしめんと計畫して居たが。其中に同夜遲く更に新なる命令が下つて

『明二十七日第二軍諸隊ハ防禦ノ姿勢ヲ以テ休憩スベシ』

といふ前命令と異なつたる主旨を傳へて來たのである。然るに前にも述べ

た如く既に枕旦堡が我軍の手中に入つたる以上、それと殆んど齊頭にある老橋と蘇麻堡を速に奪略せねば、此西伯利第一軍團は相併列して協同動作を完全にすることが出來ず。第一此の兩地が敵の有に歸して居る以上は、其兩地から敵の有効なる十字火を被むるので、黑溝臺の維持が非常に困難であるのは勿論。萬一日軍が古城子、大臺の線を以て、三犬子から韮菜河の方に向つて攻勢に轉じた場合、此軍團は敵の中央突破を喰らひ、全く其中央から二つに斷絶せらるゝの虞があるといふので。此休憩の命令があつたに係はらずして、獨斷を以て戰鬪を繼續して是非とも老橋蘇麻堡を攻略せんと企圖して、拂曉以來諸方面から此兩地の攻擊を開始したけれども、それは何れも殆んど不成効に終つたが其中に枕旦堡占領の通報は、全く例の輕率者の第十四師團參謀長の誤報であつたことが知れたので。愈々以て左まてに血道をあげて此の兩地を取るの必要はなかつたのであるが。此の西伯利第一軍團長は尙ほ且つ此の老橋と蘇麻堡の攻略に未練を殘して愈々益々其占領を必要なりと感じて、非常に

これが爲めに無駄骨を折つたのであつた。

全體クロパトキン大將は黑溝臺の會戰に頭から同意ではなかつた、が第二軍司令官の殆んど强制的の意見具申に出會して、本意ではないが澁々ながら此攻勢移轉を開始したのであつたから、始終第二軍司令官の活潑なる動作を控撃するにかゝつて居た。で此日此の第二軍諸隊を現在の位置で休憩せしむるといふのも、これはグリッペンベルク大將の眞意ではなく、全く總軍司令官の指し金から出たことであることを推察した第一軍團長は、無暗無性と獨斷專行を名として上級指揮官の意圖外の戰鬪を交へた。それに其部下たる東狙兵第一師團長ゲルングロス中將が、これが又非常に攻撃の大主張者であつて、其又參謀長の大佐ノウオセリスキイが、これが又頗る付きの猪武者であつたので。下地の好きなる第一軍團長へ御意はよしといふ鹽梅に、盛に攻勢の意見具申を焚き付け煽ふり立てたので、終に此西伯利第一軍團は休憩すべき筈の廿七日に、終日其反對の行動を執り諸方面から老橋と蘇麻堡の兩地を

執拗に攻撃したが、何れの方面も思ふ様には其攻撃が進捗せなんだのであつた。

第二軍司令官は餘りに同軍團が命令違犯的な戰をやるので、流石の攻勢移轉の主張者も稍〻不安心になり、これを控撃せんとして其總豫備隊たる狙撃兵第二旅團を、其本軍團に招還するの命を發したが。今更此旅團を取り還へされては全く同軍團の豫備が皆無となるので、それを還付するのは非常に危險である旨を返答しつゝ、一方に於ては更に其攻撃動作を少しも中止し様とせなんだので。軍司令官は其剛性我慢を持て餘して、態々オレンブルク哥騎兵師團長グレゴフ少將をシタケルベルグ中將の許まで差遣して、其攻撃を中止せしめんと盡力したけれども。やりかけたる此攻撃は事實上到底中止することを得なんだか、又は自分の剛性我慢を張り通さんとしたのか知れぬけれども、如何にしても第二軍司令官の勸告に從がはずして、晝間に奪略することが出來ねば是非とも夜襲まで決行するといふ報告を、反對に使に來た此の將

軍に委託して第二軍司令官に呈出するといふ様な、甚だ面白からぬ不軍紀千萬なることをやつてのけたのである。

但し此の西伯利第一軍團長とても其攻撃の主張は、誠意から出たもので少しも惡意はなかつたので、其最初即ち此の二十七日の拂曉には、其友軍の第八師團に於て既に重要なる枕旦堡を占領したといふので、此の軍團もそれでは進んで老橋から蘇麻堡を攻撃して、以て此の第八軍團と相連繫して攻撃を進捗せしめんとしたのであつたが。其後枕旦堡占領が全くの誤報であることを知つた後に於ても、尙ほ且つ其企圖を改めなんだのは、既に前にも述べた通り此兩地から黑溝臺が十字火を受けるといふのと、更に愈〻枕旦堡がまだ取れて居らぬとすれば、此の西伯利第一軍團の力を以て前兩地を占領して、露軍全般の大障碍をなす第八師團の枕旦堡占領を容易ならしむる必要があると考へたのであつて。此のシタケルベルグ中將の獨斷の攻撃專行も、決して惡意でやつたのでないのは明白である。

けれども假令惡意はないとしても總司令官は元より、第二軍司令官も此の日此の軍團の攻擊を好まなんだ、であるから何度も命令や訓令を下してこれを中止せしめんとした。然るに此の軍團長は獨り我意を通して全く其令を用ひず、愈〻益〻攻擊を進捗せしめんとしたのは頗ぶる不穩當なるやり方である。

蓋し獨斷專行なるものの精神は、歩兵操典綱領第六の第二項に

『抑〻獨斷專行ハ其精神ニ於テ服從ト相離ルルコトヲ許サズ常ニ上級指揮官ノ意圖ヲ忖度シ必ズ其範圍ニ於テスベキモノトス然レドモ戰場ニ於テハ或ハ不意ノ變局ニ遭遇シテ其範圍ヲ超越スルヲ要スルコトナキヲ保セズ此場合ニ於テモ尙上級指揮官ノ意圖ヲ察シ之ニ投合スルコトヲ勉メ決シテ擅恣ニ陷ラザルヲ要ス』

とある通り先づ第一に上級指揮官の意圖を忖度して、それに合する樣に臨機應變の處置をするのが眞の獨斷專行であつて、それでこそ協同一致の實を擧げることが出來るのである。然るに此のシタ中將は上級指揮官の意圖を忖

度したり推察したりするに勉める所の沙汰ではない、現在の地にあつて休憩をせよといふ軍命令があつたに關せず、勝手に老橋と蘇麻堡の攻擊の計畫を改めず、夜の明けぬ中から猛烈に攻擊を開始して大に軍司令官を困らせ。枕旦堡が取れぬ以上左までに此兩地の占領が必要でもなかつたのに、枕旦堡が取れなんだ事實が知れても其攻擊を中止せざる而已か。第二軍司令官が集成狙擊兵軍團長の請求によつて

『現ニ焦眉ノ急ナクバ狙擊兵第二旅團ヲ集成軍團ニ歸還セシメンコトヲ希望ス』

といふ訓令を其參謀長に命じて急送せしめたに關せず、愈〻其攻擊の兵力を增して前計畫を續行し、却つて其狙擊兵第二旅團を後方の後煙臺子より態〻黑溝臺に前進せしめた。是れ實に此の軍團長の此日の處置は、既に甚だしく獨斷專行の範圍內を大超越して居るものであつて、本人は攻勢移轉といふ軍司令官の根本意圖に合して居ると思ふてやつたに違ひあるまいがそれでは申譯は立たぬ。これを擅恣の所爲自儘の振舞といふべきものであつて、棄て置く

べからざる軍紀上の大罪を犯したものと評者は思ふ。

但し此の日此の軍團の前進を控制したる大原因は、總司令官クロパトキン大將が我が日軍の狀況を誤判して

『日本軍ハ其兵力ヲ枕旦堡附近ニ集結セルモノノ如シ』

と斷定したるが爲め、急に今まで猛烈に始めかけた攻勢動作をさし控へて、敵の前進を待つて其右翼から之を擊破せんとして

『西伯利第一軍團ヲシテ其兵力ヲ集結シテ守勢ヲ執ラシメ必要以外ニ枕旦堡附近ヨリ西南ニ離隔セシメザルヲ要ス

敵若シ左翼ヲ枕旦堡ニ托シ渾河ト第三軍トノ中間ヨリ攻擊シ來ラバ貴官ハ枕旦堡附近ノ兵力約一百大隊ヲ以テ其左翼ニ向ヒ攻擊ヲ企ツベシ』

といふ訓令をグリッペンベルグ第二軍司令官に與へたのが抑〻の始まりで、前に述べた如く百方手を盡して此の軍團の攻擊を控制せんとしたのであつて、其敵情判斷が頗ぶる不至當なるものであつたから、其判斷より生じたる前掲

の訓令も極めて現狀と一致せざるものであつた。からして此軍團長に對して其處置のし方が強ちに間違ているとか惡るいとかいふのではない、又其攻擊の計畫や實施が拙劣であるといふのでもない。西伯利第一軍團長には勿論惡意もなく、又其したことに付ても決して全然理由のないといふのではないけれども、正さしく上級指揮官の意圖に反して其命令も訓令も之を用ひず、唯々一途に自己が有利であると考へたる老橋、蘇麻堡の攻擊を中止せなんだのは、確かに軍紀違反である擅恣の誤用を逞ましくしたものである、決して其罪を問はずに置くべきものでない。加之其攻擊が幾分たりとも效を奏すれば、まだ〳〵功罪相償ふを得るともいへるけれども、殆んど軍團の全力を其攻擊しかも上官の意圖に反した攻擊に使用して、終日惡戰を繰り返したに係はらず纔かに蘇麻堡西北方丘阜に據れる、日軍歩兵第五聯隊の塹壕の一部を占領したる外には、多數の死傷者を作つたのみで何等の得る所がなかつたのであるから。丸て罪の上に罪を重ねた樣なものであつて、此の日の此の軍團長のや

り方は頗ぶる不都合千萬であつた。

流石に剛性を張り通して狙擊兵旅團も歸還せしめず、又一刻も老橋、蘇麻堡の攻擊の手をもゆるめざりしシタ中將も、此日夕刻までの惡戰に僅々蘇麻堡西北の日軍塹壕の一部を占領した而已で。其利が其損を償ふ所の沙汰でなく、大々的のくたびれ儲けをやつたので始めて其上官に服從せざりし所爲の、襲むべきことでなかつたのを悟つて、夜襲してでも是非とも蘇麻堡を攻略すると軍司令官に報告は出して置いたものの、それ迄やつて若し不成効に終つたらば大變であると、日沒に至つて頗ぶる躊躇逡巡の色を現はしかけたのであつたが。鬼の女房に鬼神といふ諺の如く、大擅恣家の部下には又之に似寄つた小擅恣家が居るものと見へて、東狙兵第一師團長ゲルングロス中將と其參謀長とは、是非とも蘇麻堡を占領せざるべからずと主張し。更に此の軍團の參謀長ブリンケン少將も

『蘇麻堡ノ占領ハ軍ノ枕旦堡攻略ノ爲メニ至大ノ利益ヲ與フルハ疑フベカラ

ズ』

といふ說を述べてゲル中將の主張を贊成したので、一時夜に入つてから一寸躊躇したものの元來それと同一なる理由の下に、終日の惡戰を繼續したる西伯利第一軍團長は終に意を決して、此夜莫大なる兵力を以て蘇麻堡を夜襲することに決心した。

即ち此日蘇麻堡を攻擊せしめたる兵力の殆んど全部に、更に狙擊兵一聯隊の新手を加へて、三面より蘇麻堡を包圍して夜襲をすることに計畫を定め、左の部隊を全くゲル將軍に委して此實行を指揮せしめることにした。

東狙兵第三聯隊（三大隊）
同　第四聯隊（一大隊）
同　第三十四聯隊（二大隊）
同　第三十五聯隊（三大隊）
狙擊兵第六聯隊（二大隊）

東狙兵第一師團長ゲルヒ中將は夜襲指揮の任を受くると共に、直ちに其參謀長を助手として左の如き夜襲に關する詳細なる計畫を決定した。

一、東狙兵第三十四聯隊、同第三十五聯隊ヨリ成ル右翼隊ハムスペロフ大佐ノ指揮ニ屬シ蘇麻堡西方及西南方ヨリ攻撃シ狙撃兵第六聯隊ハ其兩大隊ヲ併列シテ右翼隊ノ中央後ヲ前進ス

二、東狙兵第三聯隊、同第四聯隊ノ一大隊ヨリ成ル左翼隊ハゼムリニヤツイン大佐ノ指揮ニ屬シ同村北方ヨリ攻撃シ第四聯隊ノ一大隊ハ第三聯隊ノ左翼後ヲ前進ス

此の諸隊の部署配備は評者は至極同意である。上官の意圖には全く合して居らぬけれども、其夜襲を決行したる時機も頗ぶる適當である。晝間終日各方面から同村を攻撃した部隊を、其儘其方面の夜襲に任じたのであるから、敵情も地形も極めてよく知つて居るので此の夜襲の爲めには頗ぶる都合がよい。又此の夜襲の爲めに新に豫備隊から進めて其右翼隊に加へたる狙撃兵第

六聯隊を、特に敵が此日の午後しかも日沒に近く我攻撃に堪へずして、同村端に退却したる方面に加へて。敵の頗ぶる志氣沮喪したる西南部方面へ、我の最も志氣旺盛なる新鋭兵を向はしめる如くし。各部隊は少しも錯雜なる運動困難なる行進をなす必要なく、何れの部隊も殆んど晝間の攻撃方向を變ぜずして、同村に向つて眞つすぐに前進すればよい樣に、其行進方向と受持區域を定めたのであるから。此の夜襲部隊の部署は評者は極めて適當であつたと思ふのである。

而して此の夜襲隊は同夜午後九時半を以て、各方面とも一齊に運動を開始して、其各隊は中隊毎に二小隊の閉縮間隔の縱隊となりて横方向に並列して前進し。如何なる場合にも射撃することなく靜肅に連絡を失なはぬ樣敵に迫り、其前方五十歩に達したならば喊聲を揚げて突撃するといふ手筈であるから其計畫は殆んど現想的であつて、夜襲に於ける都ての原則に違反したる處置は少しもなかつた。であるから此の夜襲の計畫及び其實施の方法ともひつ

くるめて、評者は極めて適當であつたと信ずるのである。

以上の豫定計畫の如く同夜午後九時三十分に、肅々として枚を銜んで運動を起したる各縱隊は、著々として其計畫を間違へずに敵に向て進んだが。北方に向たる左翼縱隊は同村を離るる約五百米突の地點で、不意に烈しき日本軍の小銃及機關銃の射擊を受けて、爲めに一時其隊伍が混亂したけれども、直ちに其備へを立て直して勇を奮つて同村に突擊し。これと相前後して西方及び西南方からも猛烈なる接戰を繰り返して、日本軍の村端の塹壕を奪略した。此の前後に於て軍團長は更に機關銃を有する、歩兵二中隊を此の夜襲部隊に增加したので、夜襲隊は非常に勢づいて忽ちにして同村は殆んど露軍を以て充滿せられるるに至つたが。日軍の同村北方防禦の任に當れる一部隊は、何としても其圍壁を死守して退却し樣とせず。加ふるに夜暗の中に村落内に大部隊が混入したのであるから、其指揮統一が非常に困難であつた爲めに、殆んど同村の八割以上を占領して居りながら、充分に此の占領を確實にする

の處置を取ることが出來ず。且つ其上に其一部を頑然として死守する敵の爲めに、全夜襲部隊は非常な損害を被むる而已か、交通も連絡も全くこれが爲めに妨げられて、容易に隊伍の整頓集結が出來ぬといふ大困難。此の場合の大混雜の有樣は前に評論したことがあると思ふが、例の我軍が沙河會戰で三塊石山を夜襲して、第十師團全師團が全く混淆紛糾して仕舞た場合と非常によく似て居た。然るに其三塊石山では敵が全く殲滅に歸したからよい樣なものの、此日は我森川聯隊が其村の中央に毅然として控へて居るので、夜襲部隊は爲めに全く其秩序を囘復すること能はずして、終に複廓式の圍壁に據れる森川聯隊を、此の村外に擊退することが出來なかつたのである。

敵は殆んど必死を期して村内の一部に立て籠つて、如何にしても動搖せぬのに味方の方は村内に於て隊伍全く混亂して、これを統一して指揮することが出來ぬので。西伯利第一師團長は其情況を知ると共に今まで砲兵護衞の爲めに殘したる、東狙兵第三十四聯隊の二箇中隊に機關銃を屬して增援に赴む

かしめ、以て更に此の夜襲の結果を十分に收めんとして見たが。これも思ふ樣には往かずして依然として森川聯隊は村内に頑張つて居る。て一度占領したる此村落を再び日軍に渡すまいといふ考から。ゲル中將は其占領地區の防禦を完全ならしむる爲めに、東狙兵第四聯隊の大隊長ムラビョフ中佐に其指揮を任命し。他の諸隊は必死になつて其隊伍を集結して、我第三十二と第五の兩歩兵聯隊を粉碎擊退せんと苦心したのであつた。

ゲル中將が最初の計畫に於て晝間其部隊の戰鬪を行ふたる方面に、各其部隊を向はしめたのは、歩兵操典第二部第八十三の

『夜戰ニ在リテハ指揮官ハ百方手段ヲ盡シテ詳細ナル計畫ヲ定メ成ルベク晝間ニ於テ各部隊長ヲ集メテ之ニ命令ヲ下シ以テ諸準備ヲ爲サシムベシ云々』

とある要領に遵がひて、晝間に詳細の準備計畫をするの暇がなかつたので、その不利を除く爲めに晝間其方面で戰鬪を交へて居た部隊を、其儘其方面の攻擊に使用することにしたのであつて。これ實に晝間準備をすることの出來

ぬ已むを得ざる時であつたから、此場合としては最も至當な處置のやり方である。又其全夜襲部隊を左右兩翼縱隊に分ち、それにそれ〴〵指揮官を定め其各中隊に二小隊面の閉縮距離の縱隊を作らしめてこれを横列し、其運動連絡に便利なる如くしたのは適當であつて。更に其兩縱隊とも其後方近く豫備隊を隨がへ、就中右翼縱隊が其二大隊編成の狙擊兵第六聯隊を、大隊毎に横に併列して先行兩聯隊の後方に豫備としたる配備は、評者は一點も非難すべき所がないものと思ふ。これ實に歩兵操典第一部第百八十四の

『夜間ノ攻擊ハ特ニ靜肅ニシテ連繫ヲ保チ確實ニ行進方向ヲ維持シ敵ニ接近スルヲ主要トス之ガ爲メ勉メテ單一ナル隊形例ヘバ密集隊形ニ在ル中隊ヲ併列又ハ重疊セルモノヲ用ヒ《中略》近ク豫備隊ヲ隨ヘテ前進シ云々』

とある夜戰部署の要訣を其儘に實行したもので、此の部署配備には少しも缺點として指摘すべきものがない、て評者はこれを正々堂々たる殆んど模範的なる夜戰のやり方と見るのが至當てあると思ふ。

又此の各部隊に行進中如何なることがあつても射擊することを禁じ、愈〻敵前五十步に迫つてから直に喊聲をあげて敵中に突擊する樣に命令したものも、矢張前同條の『火戰ヲ行フコトナク直ニ突擊ニ移ルヲ可トスと』ある、第一項の末文と正しく吻合したるものであつてこれも極めて適當なる注意であるが。唯此所に一つ研究すべきは此の五十步の距離から突入するに當つて、喊聲を擧げて突入すると定めたことが果して至當であるかないかといふことである。此場合喊聲を發して突擊すれば極めて靜肅なる暗夜のことであるから、此の聲は防者の陣地全體に響き亘つてそれからして烈しひ射擊が、此の喊聲を目標として雨注されるのは勿論である。左すれば此の場合は無言の儘で何か一つの記號が信號を合圖に、全然啞の如くに沈默して無二無三に突入するが利益であると評者は信ずる。但し人間が何か一奮發して全力を出す場合には、必ず何とか懸聲を出すの必要があるもので、自身にはこれを出す考は少しもなくても其樣な場合になると、必ず無意識で自然と其懸聲がウンとなりヨイ

ショとなり出るのは天然自然の狀態である。であるから其一身を敵中に擲つて鐵でも石でも打ち破つて突進し樣といふ樣な、猛烈果敢な突擊を決行する場合に於て、芝居のダンまり場をやる樣に撫でまはし搜ぐりまはして、無言の儘で飛び込んでは確かに間が拔けて勢がつかぬに相違ないといふ論者もあるであらふ。これ實に尤千萬なる非難であつて決して評者も無理とは思はぬが、今日の如く發射速度の快速なる上に命中の正確なる小銃を用ひて、銃を水平にして迅速射をするとして見た場合には。敵前五十步か三十步から急驅突入する僅少なる時間の間に於ても、非常な敵の彈丸を受けて一彈の爲めに二人も三人も傷くべきは、これも亦理の當然で決してこれを否認するを許さぬ。であるから平素に於て夜間の戰鬪には默々無言で突擊をやらせる樣に、それでも間が拔けず又充分に勢のつく樣に、十二分に訓戒し演練してこれに熟達せしめ置く必要がある。左すれば此樣な場合に大喊聲をあげて敵に迫るよりも却つて大なる驚慌を惹起せしめ得る效能があるといふのは。斯くすれ

ば夜襲された方では敵が果して何れの方向から進來して、又それが如何に莫大なるものであるか寡弱なものであるか皆目見當がつかぬので、愈〻益〻仰天して大混雜に陷つて仕舞ふのは目前である。であるから此の樣な場合に喊聲をあげて突入すると定めたのは適當でない。が併し當時日露兩軍ともにまだまだこれ等の細かいことには全く不注意であつて、甚だしきは遠方から大つぴらに進襲の譜を吹奏して夜襲を行ふた樣な、殆んど常識を以ては判斷の出來兼ねる樣な、不注意千萬なる夜戰を彼我共に繰り返した時代であるから、强ちにこれのみを非難するのは氣の毒ではあるが。此場合に於ても此の喊聲が我軍に夜襲を先き觸れして、我軍は此の聲を目標として射擊の集中を行なひ、又其敵の襲來の方向と多寡とを知るを得たのは事實であつて。此の喊聲が露軍の此の夜の夜襲の不成效の爲めには、少なからざる大なる原因の一つになつて居るのは、爭そふべからざる事實であると評者は信ずる。

又其夜襲の行進途中に於て不意に日軍の射擊に出會して、一時隊伍の混亂を來したので少し距離は遠かつたが、此所から直ちに遮二無二突擊に移つた樣な形跡が見へるのであるが。これも亦頗ぶる拙ないやり方であつて此時はまだ敵を距るる五百米突もあつたのであるから、速に一時停止伏臥して極めて靜肅を守つて、巧に敵の注意を避けそれに油斷をさせて置いて。さて更に前進を起すべきであつて、步兵操典第一部第百八十五は其第三項に

『行進中敵ノ有效射擊ヲ受クルカ又ハ火光ニ依リ探照セラレタルトキハ其效力及注意ヲ減殺スル爲一時靜止スルヲ可トスルコトアリ然レドモ之ガ爲成ルベク前進運動ヲ澁滯セシメザルコトニ注意スベシ』

と明白に記載して此場合に於ける準則を與へて居るが、此時の如きは既に日沒から日軍の方では必ず夜襲の來るべきを豫期して居たから、或は靜止して射擊の止むのを待つても、無益に時間を徒費するの結果になつて其效がなかつたかも知れぬが。多少明かるかつたとはいへ夜間しかも五百米突の距離で日軍の射擊を受けたとすれば、日軍が露軍の夜襲を確に認めて發射したも

のか、或は一時の雷同的の濫射であるかそれは容易に判斷し難い。からして一時停止して其注意をゆるめると共に其損害をも避くるが至當である。此際唯それだけの注意を各夜襲隊長が缺いた爲めに、隊伍混亂の儘で村内へ突入して仕舞たので、終に容易にそれを回復し整頓して手中にしかと掌握することが、全く出來なくなつて仕舞たものと評者は考へるのである。

更に愈〻村内に突入して仕舞てから、所々方々で支那家屋の圍壁を隔て、終夜惡戰苦鬪を續けたのであるが。此の叫喚呼號して更に相接戰搭鬪する間に於て、露軍の方から無暗と家屋に火を放つたといふが、これは大に考へものであると評者は思ふ。敵が極々少數のものでそれが一家屋に據つて逃げ場を失なつて死戰して居る樣な場合には、一擧にこれを焚殺する爲めに家屋に火を放つもよからふが。全力を盡して敵と一村落を爭そふ場合に夜間無暗に火を放てば、自から其進路を遮斷してこれが爲めに夜襲の進捗を妨害すると共に、其火光によつて自己の多寡と自己の位置とを敵に知られて有效なる射擊を被

むるに至るは、實に免がれ能はざる自然の數であつて。此場合に於ける無方針の放火は頗ぶる愚劣なる拙策であつた。爲めに露軍の方では少なからざる損をしたと評者は思ふ。但し此夜日軍に於ても森川中佐は夏脇大尉に命じて、村落南方の家屋を焚燼せしめたが。これは其目的が敵の侵入を此の火炎に依りて防ぎ止め、且つ其行動を照明せんとする爲めに非常手段をとつたものであつて。此樣な目的から放火したのであれば至當であるが、迅速に攻擊前進せんとする夜襲隊が其進路に火を放つたのは極めて理由がない。これも露軍の夜襲を失敗せしむるに大分の加勢をして居る原因の一つであると評者は思ふ。

數へ來れば隨分澤山に缺點はあるけれども、兎に角一時殆んど蘇麻堡を占領したるゲル中將は、其隊伍の混雜紛亂の爲めに指揮が思ふ樣に出來ず、隨て其占領を完くするに兵力の不足を感ずること甚だしいので、頻りに增援隊を請求したけれども、軍團長の手許にも澤山な貯蓄がないので、容易にをい

それとは出してくれなんだが、それても日軍の頑據せる圍壁を破壞する爲めに、二十八日の朝方に近く砲兵二中隊を送つてくれたが。此の砲兵は日軍の有效猛烈なる射擊の爲めに、敵の據れる圍壁を破壞する所の沙汰ではなく、蘇麻堡の村に近接することさへも容易に出來ず、途中で空しく大損害を被むるといふ散々至極の始末であつた。

露軍が蘇麻堡の村内で混亂錯雜を極めて居る間に、二十八日の夜はほのぼのと明け初めたのであるが。斯くなつては夜襲部隊はもうおしまいである。此の地の急危を救援せんとして日軍第八師團の諸方面から、此の村落の左右に集まり來つたる諸隊は。非常に猛烈な射擊を以て此の森川中佐を包圍して居る露軍の左右兩翼隊の兩翼に向つて、其の側面から銃砲彈を雨注霰飛させるので居ても立つても居られぬといふ難境。そこで軍團長に急使を楠の齒をひくが如くに送つたけれども、豫備隊の兵力が少ないといふので少しもこれに應援せぬ。それが爲めに此の夜襲に當つたるゲル中將の十二箇大隊は散々

に日軍から惱まされて殆んど潰走の姿を以て二十八日の正午頃までに諸方に分れて退却して仕舞たが。昨夜加勢に來た右翼縱隊の豫備の狙擊兵第六聯隊の如きは、實に左表の如き大損害を受けたのである

隊號	階級	現員	損害				
			計	死	傷	失踪	殘員	損害ノ百分數
狙擊兵第六聯隊	將校	二三	二	一			二	九一 %
	下士卒	一、五〇〇	一、一五〇	六五一		四九九	三五〇	七七 %
	計	一、五二三	一、一七一	六六八		五〇三	三五二	七七 %

此の狙擊兵第六聯隊は殆んど全滅といふてもよい、即ち將校は僅かに二名を剩し下士以下は三百五十になつて仕舞た。此隊程に甚だしいことはなかつたに相違ないが、他の諸聯隊も隨分とこれに匹敵すべき程の損害があつたらふ。其又損害の大部分は敵の彈丸に斃れたのか或は混戰亂鬪の間に、味方同士討をしたのか知れぬのであつて、即ち單に此の露軍の夜襲ばかりではない、

現に我軍の三塊石山の夜襲の如きも、成果は相當に擧げ得たけれども第十師團全部が、殆んど翌日一日戰鬪することが出來ぬ程に混亂して、其損害も隨分と非常なものであつた。此樣な實戰の適例を公平に研究して考へて見ると、大部隊を以てする夜襲なるものは大に熟慮を要するもので、決して妄りにこれを決行すべきものでないといふことが知れるのであつて。此夜といひ三塊石山といひ相當に準備し相當に實行せられたものでさへも現に斯くの如しとすれば。若しそれが稍〻不充分なる準備に於て行なはれた場合には、當然失敗に歸するものと考へるのが至當である。からして步兵操典が其夜戰の部の第八十二ノ第二項に

『大部隊ニ在リテハ夜暗ヲ利用シテ敵ニ近接シ小部隊ニ在リテハ夜暗ニ乘シ敵ヲ急襲スル場合屢〻之アリ云々』

と明白に大小部隊の夜戰のやり方を、きつぱりと區劃して揭げたのであつて、これ實に大に熟慮せねばならぬことであると思ふ。

更に今一つ露軍に就て論じて置きたいことは、昨日以來あれ程迄に上官の命令も聞き入れずに、擅恣式なる獨斷專行をやり通したるシタ將軍が。折角此の蘇麻堡を八割通り手に入れて苦戰して居るゲル中將に對して、頗ぶる冷談に兵力不足といふ一點張で、其增援を拒絕したのは何といふ定見のないやり方であらふ。昨日强て主張した樣に是非此地の占領の必要があるならば、何故に今日も全力を盡して此村落を維持して、以て全第二軍の爲めに此要地を占領しをほせて。我大日本の戰線中から大切な一の鎖鑰地を奪ふて仕舞て、全露軍の爲めに其前進を誘發するのが大切ではあるまいか。現に此將軍はそれが爲めに昨日終日上官の命をも用ひずに惡戰したのではないか。それに何ぞや愈〻それが取れかけたる今日に於て、兵力の不足であつたのは事實であらふが、折角それ迄に漕ぎ付け進捗せしめたる夜襲の結果を、忽ち弊履の如く打ち棄てて顧みなんだのは何といふことであらふ。實にこれシタ將軍の無定見と其薄志弱行を表白するものではあるまいか。

『歩兵操典第二部第三十七　一旦占有セル地區ハ尺土ト雖再ビ之ヲ敵ニ委スベカラズ云々』

と我操典が掲げたのは、蓋し大に熟讀玩味すべき大切な事柄であつて。此日に於ける此方面の大損害は夜戰の間に於てよりも。却つて其晝間に於て三方四方から射撃を集中せられる中に於て、潰亂式の退却を行ふた際に生じた損害が多かつたのである。前に掲げた表中の失踪者の如きは其現世の地獄を通過すること能はずして、村落内に居すくまつて仕舞い。我日軍の捕虜となるを甘んじてをめ〳〵降參したものである。これ蓋し我操典が第二部第二十四に

『退却ハ敗走ニ陷リ易ク動モスレバ收集スベカラザルニ至ルモノトス故ニ指揮官ハ縱ヒ戰況不利ノ場合ニ在リテモ尙諸種ノ手段ヲ盡シテ戰勢ヲ挽回スルコトヲ圖ルベシ云々』

と大嚴戒を指揮官に向つて與へたのは、實に此樣な場合の爲めであると信

ずると共に、深く露軍の餘りに早く見切りを付け過ぎたのを惜むのである。戰勝なるものはどこ〳〵迄も我慢强く堅忍持久死んでも退ぞかぬといふ、毅然たる魂の据つた人の手に歸するといふのは、此の森川中佐の防禦とグルングロス中將の攻撃との夜間に於ける覺悟と懸引きの如何とを比較研究したならば、十二分にこれを會得することが出來ると思ふのは自分ばかりの勝手な申分ではない、實に戰術學上の動かすべからざる大原則がそれを明かに指示するのである。

東煙臺より遙に黒溝臺
方向の兵燹を望みて　成仁

物すごき炎の色は諸越の
あら野の末の空こがすなり

大正四年二月二十二日印刷
大正四年三月　二　日發行

戰史評論奥附

著作者　無名戰士

發行者　東京市麹町區平河町四丁目十一番地　宮本林治

印刷者　東京市芝區櫻川町十七番地　山田三次郎

發行所　東京市麹町區平河町　宮本武林堂
振替口座東京一〇九一二番

不許複製

適確簡潔ヲ以テ稱揚セラレツツアル「同志會著」

陣中要務詳解

全五卷

毎卷價八拾五錢
郵税内地八錢
外地拾貳錢

ハ茲ニ全部刊行ノ完成ヲ告ク

本書ハ當初ニ於テ告白セル如ク講兵指導官協力ノ下ニ同志會五氏ノ分擔執筆及分科專門ニ屬スルモノハ悉ク其專門家ノ筆ニ成ルモノナリ本堂ハ此適確ニシテ簡潔ナル本書ヲ提供シ得ルヲ以テ光榮トス乞フ一本ヲ座右ニ備ヘラレンコトヲ

大正三年十二月

宮本武林堂主人謹言

發行所　東京麹町區平河町四丁目　振替東京一〇九一二　宮本武林堂
特約販賣所　東京日本橋區通三丁目　振替東京四六四一　武揚堂書店

三月刊行
戰史評論　豫告　水洞、榛子嶺、千合嶺の小戰

大正四年三月（水洞、榛子嶺、千合嶺小戰）

戰史評論

大正
4.4.5
內交

宮本武林堂發行

戰史評論

成仁武夫補
無名戰士評

第二十三回　水洞、榛子嶺、千合嶺の小戰

正に是れ奉天大會戰後十有一回の紀念日を迎ふる今年今月に於ては、是非この奉天會戰の研究をして見たいと思ふて居たのであるが、生憎偖行社から同會戰の戰史が送達せられるの運びに至らなんだので、已むを得ずして此所に鴨綠江軍の一小戰を研究することにしたが。此小戰たるや奉天大會戰の初つ端なのであつて小さい戰鬪の極めてつまらぬものではあるが、研究して見ると相應に爲めになることも少なくないのであるから。これを此會戰研究の最初としてこれから年々の今月に於ては、壯快を極めたる此の奉天會戰の一

部一部を評論して、以て我々の先輩諸戰友が『不惜身命』の大働きをなしたる、其大偉勳に感謝と敬意とを表すると共に、其過失缺點はこれを詳細に論究して以て後日の鑑戒とする考てある。時は春風和煦梅花の清香を放つ今日此頃、書窓偶〻戰史を繙いて此の大會戰の有樣を一讀過すれば。其千歲不磨の大戰功の餘芳は馥郁として今尙心胸に薰徹して、梅花無双の清香も殆んど其幽芳を比較するに足らぬの感が深い。

先是露軍が我軍に不意打ちを喰はせたる黑溝臺の會戰も、敵の諸將軍の間に意見や感情の衝突があつた爲めに、頗ぶる有望なるべき有樣を一時現はしかけた而已て、全然無駄骨折となつて仕舞たのは前にも述べた通りてあるが。此黑溝臺の會戰があつての後には彼我共に一日も速に攻勢に轉ぜんとして、頻りと相互に其準備に忙殺されて居たのてあつたが。我が滿洲軍總司令官大山元帥は此時逸早くも帷幄の謀略を祕密の中に運らして、彼に先んじて巧に攻勢に轉ずると共に我より遙かに優勢なる露軍をして、我が攻勢移轉の準備を過早に感付かしめざる樣。又新たに此の滿洲軍の主力に加はるべき、乃木第三軍の其戰線の左右中央何れに向へるかを彼れ露軍に知らしめぬ樣に百方手段を盡して。以て敵が情況判斷に大困難を來して躊躇逡巡して居る間に、十二分に攻勢の準備を整へ十二分に兵力を充實して、猛然一擧彼れを一擊の下に粉碎し盡さんとして苦心した。

てあるから方法手段のあらん限りを盡して敵中に斥候を放つて見たり、或は又澤山の間諜を敵中に潛入せしめたりなどして、詳細の配備を探索せしめて見た結果によると。右翼の第二軍カウルバルス大將が約九萬、中央の第三軍ビリデルリング大將が約六萬、左翼の第一軍リネウキッチ大將が約十萬、クロパトキン總司令官が約四萬、合計銃數約二十八、九萬、砲約千五百門といふ大兵力。其上にまだ〳〵澤山の增援が三月末には戰線に到著する豫定てあるといふことが知れた。

敵が以上の如き配備にあるとして見れば、現在の我軍の沙河對陣の配備の

儘て敵と相衝突したとすれば、到る所に於て敵が我より優勢であつて頗ぶる成效の見込が少ない。そこて大山元帥は一策を案じて敵を一翼に牽制し、其虛に乘じて第三軍を敵の他の一翼に突然侵入せしむるの策を建てた。即ちそれが爲めに大本營では一月十二日に於て新に鴨綠江軍を編成して、これに韓國西北方を防禦せしむると共に、深く敵の左側に進入せしめて敵を此方面に牽制せんとしたが。單に此方面に微弱なる一新編成の兵團を向はしめても、それを敵が實際事實の如く偵察し得たとしたならば、少しも彼の總司令官の決心に動搖を起させぬから、隨て其兵力牽制の效能は全然ないといふことになるのである。ここに於てか多士濟々たる我總軍司令部及大本營の諸參謀は、日夜鳩首凝議したるの結果として、現に韓國方面に居る後備第一師團に、更に旅順に於て非常な惡戰を繼續したる丸龜の第十一師團を加へて。これを新に陸進したる川村現元帥に指揮せしめて、それに鴨綠江軍と命名すると共に、敵をして此の鴨綠江軍を以て全く乃木軍と誤信せしめて、此方面に大々的に敵の兵力を牽制せんとの大奇謀を運らしたのは、山縣元帥も大山元帥も相當に人が惡るい。

即ちこれが爲めには先づ乃木軍中にあつて勇戰したる、第一師團と似寄りたる名稱を有する後備第一師團と。現在實際其軍中にあつて最も敵に其名を熟知せられたる、丸龜の第十一師團とを以て此の軍を編成したのが抑々の曲者であつて。更に此の第十一師團を第三軍の他の各師團が、一月中旬頃から北遼陽に密かに前進したに關せず、依然旅順に停止せしめて乃木軍移動の消息を極めて曖昧にする材料として置き。愈々鴨綠江軍が成立する運びになると此師團を同軍に編入して、公然大ぴらに南滿洲を南西から東北に向つて陸續として行軍して。今や乃木軍は鳳凰城に向つて集中するといふ氣勢を示したのは、頗ぶる巧妙なる敵牽制の奇謀の運らし方であつたと思ふ。

彼我の間諜は滿洲到る處に充滿して居たが、悲しいことには敵の將卒どもは紫髯碧眼の異人種である所から、日本人の如くに巧に支那人になりすます

ことが出來ぬ。であるから已むを得ずして金力を惜まずして支那人を使用したが、此の支那人が軍事教育を受けたものは皆無であるから。それが兵力の增加や軍隊の移轉や何かを報ずるのは頗ぶる不確實であつて、彼支那間諜等は相當に忠實に必死に其確報を得るに勉めて、決して虛構や誤魔化しをやつたのではないが。軍隊の人員などは容易に門外漢に計算することの出來るものでない上に、日本軍に於ては故意に彼れ等を誑かさんとして、必死となつて大言壯語をまきちらし種々樣々に虛勢を張つて。大々的に其兵力を誇張しつつ南滿洲の橫斷行軍を正々堂々とやつたのであるから、沿道の支那露探は全く一杯も二杯も喰はされたのは實に尤千萬であつたのである。

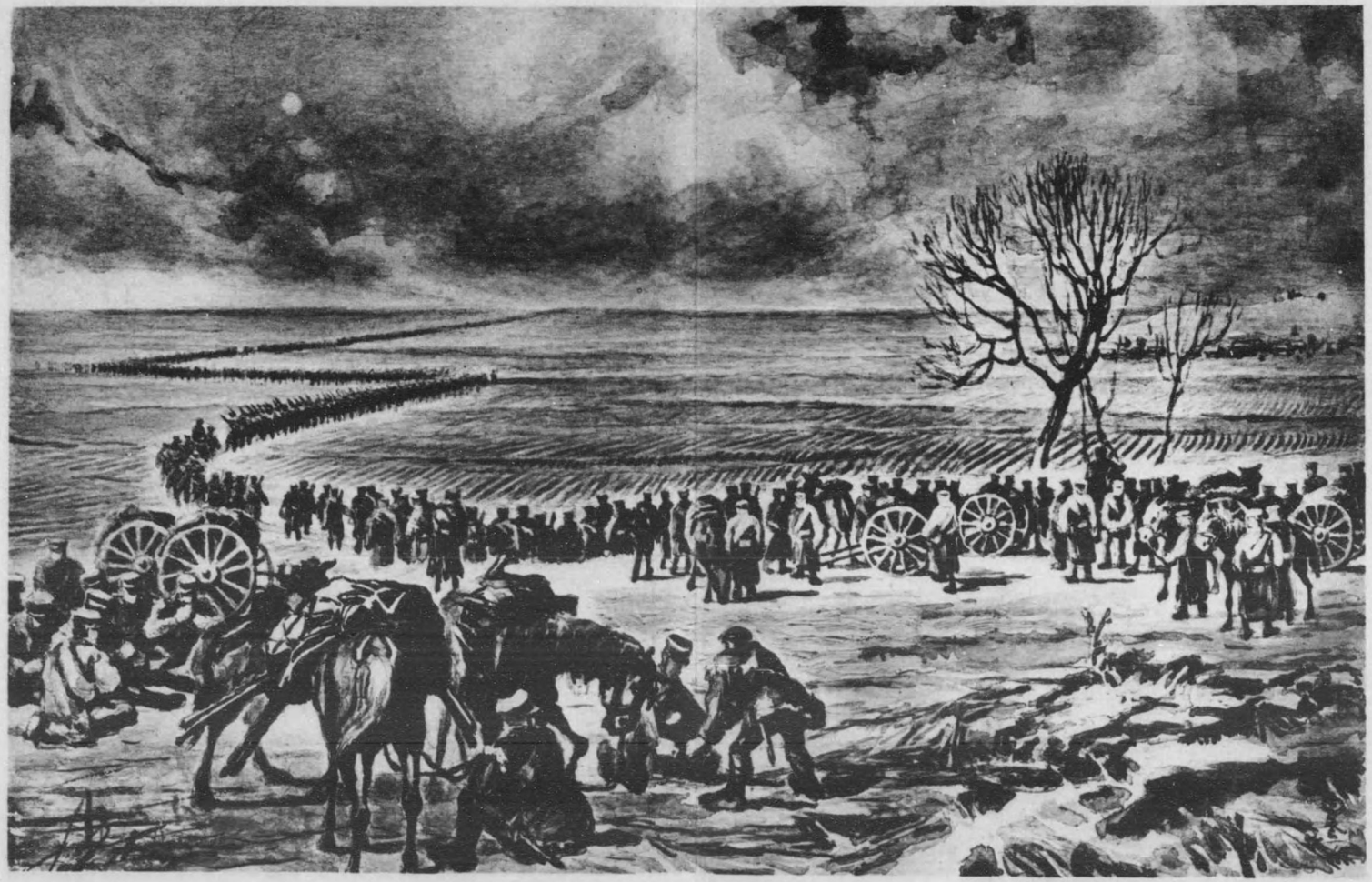
旅順から鳳凰城迄の四十里に亘る南滿洲を、まだ旅順戰後の補充は充分に到著して居らぬとはいへ、一箇師團の步、騎、砲工の各兵種が陸續として連日行軍したのであるから。皆無軍事眼を有せざる支那露探どもは、全くこれを以て乃木第三軍の東北方に轉進したものと確信して、連日連夜間斷なく其情報が露軍總司令部へ輻湊する。鐵道の東に五十人其西に四十人といふ樣な澤山に出してある間諜が、時刻を選まずにどん〳〵と報告を呈出するのであるから。重複の上に重複を重ねる樣なことになつて、我軍に於て故意に誇張せずとも同一兵隊が別々な間諜から別々に報告されて、二倍にも三倍にもなつて敵軍を驚かしたのである。まして況んや我第十一師團が恰かも第三軍の轉進するかの如き態度を以て、敵を僞り敵を誑かさんとしつつあつたのであるから。露軍に於ては此の第十一師團の鳳凰城集合を以て、全然第三軍の自己の左翼へ迫るものと信じ切つたのも無理でない。

由來露軍の右翼第二軍の方面では、黑溝臺會戰の前までは其兵力を縱深に構へて居たのであつたが。グリッペンベルグ大將の攻勢移轉の際に於て、非常に其線面を擴張して我軍を左翼から包圍せんとして、其戰は全く失敗に終つて仕舞たけれども。其一度廣大になつて縱深の備から橫廣の備へに移つて、線面の過廣になつたのを其儘改めずして置いて、第二回目の攻勢移轉を計畫

しつつあつたのであつて。爲めに其線面は非常に廣く其諸豫備隊も多くは其距離が第一線に近か過ぎたのは事實である。で心あるものは此正面過廣なる配備に就て大に懸念して、無能なりとの評判高き臨時第三軍司令官ビリデルリング騎兵大將でさへも、敵の攻擊は必ず第二軍若くは第三軍の方に來るべき徵候があるから、總豫備隊を增加する必要があるといふ意見具申をした程であつて。これ實に尤千萬なる申分ではあつたが、其兵力增加の方法が第一線を減じて後方に縱深に配備するといふ主意でなく、他軍の方から其兵力を此方面に集め樣といふのであるから、稍〻其正鵠は失なつて居るがそれでも先づ適當なる意見であつたが。總司令官は頭からそれを拒絕して相手にしなかつたといふのは、前にも陳べたる如き左翼に向ふた日本軍に大に其心を動かされたからであつた。

半信半疑の間に彷徨した敵の大將も、我鴨綠江軍の一部が漸次北韓地方から寰馬集の方へ前進する頃に至つては、過敏なるクロパトキン大將は最早殆

第十一師團ノ南滿洲橫斷



九十九道人石原白道筆

んど第三軍を乃木大將が引率して東方から迂回すると信じ出したのであつた。丁度此頃即ち二月の二十一日頃に敵の第二軍司令官カウリバリス大將は枕旦堡攻撃の命令を下した。これ實にグリ大將の失敗したる攻勢移轉を更に再び再興せんとしたものであつて、其計畫部署は頗ぶる雄大を極めたものであつたが。愈〻二十五日に於てこれを決行せんとして其前日の二十四日に於て、明日より愈〻攻撃開始の命令を下したのであつたが。此所に頗ぶる不思議千萬なる一現象が露軍總司令部に於て持ちあがつたのであつた。

張沙木屯から荒山の方に進んで居た總司令官及同總參謀長は、奉天に殘置したる總軍司令部間諜掛のウハヂ、オゴロウキチ少將から、突然此の二十四日の早朝に於て重要なる諜報を得た。即ちそれは最も信ずべき支那間諜が此の二十四日の午前七時に、ウハヂ少將に大至急の御注進をやつたものであつて、其要領は實に左の如きものであつた。

『日本軍ハ敏クモ露軍ノ攻勢移轉ヲ偵知シ露ノ第二軍ニ對シテ十萬乃至十二

萬ノ兵力ト砲三百四十門ヲ集メタリ又露軍ノ左翼清河城方面ニモ有力ナル日本軍進出シ不日猛烈ナル攻撃開始セラルベシ』

といふのであつて。それを近日來の敵線内の兵の移動の模樣とか、又は水洞、榛子嶺方面の戰況とかに徵すれば、其諜報の頗ぶる信ずべきを思はしめる事實が多いのであるから。左なきだに後入齋のクロパトキン大將は非常に明日の攻撃開始を懸念し出して、直ちにウハヂ少將を第二軍司令部へ駈け著けさせて、其諜報を傳ふると共に同少將の意見をも陳述せしめることにして。さて此の少將に明日枕旦堡の攻撃開始に就て充分の審議を遂げたる上、其やるかやらぬかを至急電話を以て總司令官に報告する樣にカウ大將に傳言をしてやつたのであつた。

勢込んで明日の勇ましい攻撃計畫を遺漏なからしめんと、必死になつて努力して居る第二軍司令部では、突然降つて湧いたるが如き此不思議なる諜報の爲めに少なからず決心の動搖を來したのは事實で。第二軍司令官は即時各

部長を會し自から砲兵陣地記入の大地圖を其前に開いて、明日に迫れる攻撃開始の可否に就て審議すると共に。此の諜報を持つて來たウハヂ少將をして其情報を詳述せしめたる上、更に同少將の意見を陳述せしめたのであつたが。同少將は委細に敵情を說明したる後自分一人の意見として左の如き陳述をしたのであつた。

『今露ノ第二軍ハ總計九萬ノ兵力ヲ使用シテ枕旦堡ヲ攻撃スルヲ得ヘキモ此事アルヲ知ッテ豫メ之ニ備ヘタル日軍ノ十萬ナルハ諜報ノ傳フルガ如ク更ニ戰鬪開始後ニ於テ中央ヨリ此左翼方面ヘ移シ得ベキ日軍兵力皆無ト見ルベカラザルヲ以テ之ヲ二萬ト假定セバ約十二萬ノ兵力ハ露ノ第二軍ニ對シ準備セラレアルモノト認ムベク果シテ然ラバ假令一旦枕旦堡ヲ第二軍ノ手ニ占領シ得ルトスルモ結局不利ニ陷ルノ虞ナキヲ保スベカラズ假シ前記假定シタル二萬ヲ全ク除外スルモ守者ノ十萬ヲ攻者ノ九萬ヲ以テ攻ムルハ頗ブル不合理ナリ況ンヤ予ガ現ニ連日敵線内ニ於ケル西方移動ヲ見聞セシヨ

リ推算シテモ其數決シテ寡少ナルモノニアラズ而シテ此移動ノ軍隊ハ前述諜報ト全ク同一ナラザルハ信用スヘキ他ノ理由アレバ思フニ敵ノ第二軍ニ對スル兵力ハ十二萬ヲ上ルトモ決シテ下ルコトナカルベシ』

此様な弱音を吹いたのが總司令官より重大事件傳達の上使の口上である。カウ將軍の決心は頗ぶる的に大波動を起したが折角これ迄漕ぎ付けた攻勢移轉を、『左様で御座るかでは中止仕る』とは睾丸がなければ兎に角、縮みあがつても梅干程でもこれがぶらさがつて否々縮みあがつて居る以上は、露西亞人とても男兒であるから、おいそれと實は申上げる譯にゆかなんだらしい。これも實に尤千萬なる次第であると評者も同情に堪へぬのである。

そこでカウ將軍は一通り審議を遂げた上に於て、電話を以てクロ總司令官と直接談判を開始したが、總司令官は前にグリ大將を掣肘した爲めに現に下士以下迄が總司令官を陰げて誹謗するのを知つて居るから。押し切つてこれを否なりとも可なりともいはないで、攻撃の開否は一に貴官の意見に一任す

といふ返答であつて、何等それに付て指導する所がなかつたので。更にカウ將軍が戰闘の都合によつては總豫備隊を第二軍の方に進められ得るや否やを問ふたが。これに對しては明確に左の如く答へた即ち

『最左翼日軍ノ攻撃猛烈ニシテアレクセエフ中將窘窮セリ此方面ノ敵情判明セザル中ハ第二軍援助トシテ一兵ヲモ出ス能ハズ』

極めて明白に其増援の不可能を示したので、左なきだに最早餘程決心に動搖を來して居たカウ大將は、此の意見交換をやつた後に於て再び會議を開いたけれども、何れも大弱腰の屁つぴり腰説のみが勝を占めて、終に此攻撃は中止のことに決定して。二十四日の午後九時を以て再びカウ大將とクロ總司令官とは電話口に立つて、全く明日の枕旦堡攻撃を中止するに決定して仕舞た旨を報告して。一方急使を各軍團に發して此の命令を傳達せしめたとは實に惜しいことをしたものであつて、何といふ腑甲斐ない將軍連ばかりが露軍にはあつたものであらふと、評者は此の戰史を見る度に殘念に思はぬことは

ないのである。

斯くまでに敵の大將連の膽を奪つた鴨綠江軍も、其集中と其初戰とは極めて面白くはないけれども。奉天會戰の全局面の上から見ると頗ぶる重要なる關係のあるものであるから、今から此の川村現元帥の指揮したる鴨軍の一部たる後備第一師團が、清河城の敵を攻擊するの準備と其軍の集中掩護とを兼ねて。二月十九日に於て決行したる水洞附近の小戰と、翌二十日の棒子嶺、千合嶺の戰鬪とを詳細に研究して、來月に於てはこれに次て清河城の攻擊を研究して見樣と思ふ。で要するに此の三月に於ける鴨軍初戰の研究はつまり清河城戰鬪の前提として、ここに評論の筆を下したのであることを、讀者諸君に於て了解して置いてもらいたいのである。

先是川村軍司令官は滿洲軍總參謀長と意見を交換し、且つ其部下の大谷兵站監の軍需輸送の計畫を聽取したる後に於て、概略左の如き作戰の計畫を立ててこれを標準として戰鬪を指導せんとした。即ち

奉天會戰ニ於ケル鴨綠江軍作戰計畫ノ梗概

一、後備第一師團ノ主力ヲ下夾河附近ニ第十一師團ノ主力ヲ南臺附近ニ二月二十一日其運動ヲ終ル如ク開進シ次デ清河城附近ノ敵ヲ二月二十三日ヲ以テ攻擊ス

二、清河城ノ敵ヲ破リタル後第十一師團ハ直ニ馬群鄲ニ向ヒ追擊シ後備第一師團ハ主力ヲ金斗峪、五龍口ヲ經テ前進セシメ情況ニ應ジテ一部ヲ以テ社嶺方向ノ敵ニ對シ主力ヲ西方ニ轉進シテ馬群鄲附近ノ敵ノ左側背ニ迫ラシムルカ又ハ地塔及社嶺ヲ經テ直チニ撫順ニ向ハシム

三、馬群鄲攻略後情況ニ應ジ軍ノ主力ヲ以テ石灰廠ノ平原ニ進出スルカ若クハ撫順城ニ向ヒ敵ノ左翼ニ對シテ策動ス

四、後備第一師團ノ增加隊ハ急行シテ追及セシム

五、軍ノ直屬タル後備步兵第十六旅團、同第五十九聯隊ハ城廠ニ向ヒ前進シ一部隊ヲ寬甸、鳳陽邊門、賽馬集ノ線ニ配置シ旣ニ守備ニ就ケル徒步砲兵獨

立四中隊ト共ニ韓國西北境ノ防禦並ニ兵站線路ノ守備ニ任シ從來ノ守備隊タル後備第一師團ノ諸部隊ニ代ラシメ此部隊ト新守備隊ノ一部トヲ以テ三月上旬懷仁ノ敵ヲ擊攘スル如ク運動ヲ開始セシム

抑此軍編成の目的が此東滿洲方面に在つて北韓地方を掩護し、爲し得たならば敵の左側背を脅威するといふのであつて。北韓掩護の爲めには敵の左側背を猛烈に脅威すれば、直接に其方面に網を張つて用心をせずとも自然と掩護は出來るのであつて。一擧兩得であるので我滿洲軍の方では此鴨軍の敵左側大脅威を切望して居る場合であるから、此川村元帥の立てられたる作戰の計畫は頗ぶる適當なるものであつて、何等これに對して非難すべき點を認めぬのである。此の計畫が策定せられてから其第一著手として、軍を太子河畔の下夾河泡子沿附近に集合せしめんが爲めに、二月十五日に於て左の要旨の軍命令を鳳凰城に於て下した。

一、守備及增加部隊ヲ除ケル現在ノ後備第一師團ハ二十一日迄ニ其主力ヲ

下夾河附近ニ集結シ歩兵一大隊ヲ基幹トセル一支隊ヲ草子峪ニ派遣シテ軍ノ右側ヲ掩護セシムベシ但シ騎兵第十一聯隊ヲ之ニ屬ス

二、第十一師團ハ二十一日迄ニ主力ヲ泡子沿、河東荒地、全家堡子ノ線内ニ集結スヘシ依テ右地區内ニ在ル後備第一師團ノ諸隊ハ十九日中ニ其東方ニ移轉スルヲ要ス

三、第十一師團ノ歩兵二大隊、騎兵一小隊ハ軍總豫備隊トシテ二十一日迄ニ城廠ニ集合セシムベシ

此命令を得た阪井後備第一師團長は、直ちに其運動に著手すると共に此の集合を容易ならしむる爲めに必要なる、千合嶺より水洞に亘る線を占領して、敵の警戒部隊を驅逐するの策を建てて川村元帥から其認可を得て。ここに始めて其戰鬪の準備にとりかかつたのであるが、同中將が十八日の午前十一時に下したる命令の要旨は

一、騎兵中佐河村秀一ハ後歩第二十三聯隊第一大隊(第二中隊欠)騎兵第十一

聯隊(一中隊ト一小隊欠)ヲ率キ明十九日其歩兵主力ヲ以テ葦子峪ヲ占領シ曹家嶺、長春嶺及千合嶺方向ノ敵ニ對シ軍ノ右側ヲ掩護スベシ

二　後備歩兵第六旅團長大佐草場彦輔ハ後歩第二十三聯隊第八中隊、同第四十八聯隊、後騎第一中隊ノ半小隊、後砲第一中隊(一小隊欠)後工第二中隊(一小隊欠)ヨリ成ル右翼隊ヲ率キ主力ヲ以テ太子城、河南ノ線ニ進ミ一部ヲ以テ馬二嶺ヨリ松樹口ヲ經テ兩嶺子ニ亘ル線ヲ占領シ特ニ一部隊ヲ兩嶺子西方鞍部附近ニ出シ左翼隊ノ攻擊ヲ援助スベシ

三　後備歩兵第九旅團長少將比志島義輝ハ後歩第七聯隊(第二大隊欠)同第三十六聯隊、後騎第一中隊ノ半小隊、後砲第一中隊ノ一小隊、後工第二中隊ノ一小隊、機關銃四挺ヨリ成ル左翼隊ヲ率キ水洞高地及哈叭嶺ノ線ヲ占領スベシ

此場合敵の大兵力が近傍に居るのではない上に、其目的が警戒部隊を驅逐して其集合を容易にするにあるのであるから、以上の如き計畫でも強ち悪るいといふ次第ではないが。兵力甚だ多からざる後備師團が六里餘に亘る正面を占めて、敵と交戰せんとしたる部署のやり方は、兵力に比較して餘りに其線が過廣であつたと評者は思ふ。勿論此場合は敵を脅威して其兵力を此方面へ牽制するのが主眼であるから、可成大なる正面を占める必要があるのはいふ迄もないのであるが。前述の如き僅少なる兵力を以て六里に亘る線を占めては、清河城灣柳河、富家樓子など餘り遠からざる所に敵の相當に有力なるものが居る場合、萬一敵から反對に攻擊せられたとしたらば何とする、何れの方面も悉く突破せられるに至るの虞がないとは決していへまい。であるから此部署のし方は餘りに廣大に失したと思ふのである。て若しも評者が此場合假りに此樣な任務を受けたとしたならば、軍の要求もあることであるから河村支隊をして葦子峪を占領せしめて、これをして軍の右側を警戒せしむるのは至極同意であるが。歩兵一大隊を基幹とするとあつたのにそれを一中隊へずつたのは其意を得ぬ。又草場右翼隊をして太子城、河南の線に進出せしめ、

松樹口と兩嶺子を占領せしめて此二道より進んで敵を驅逐するの策を立て、馬二嶺の方までは手を延さぬが利益であると考へる。更に比志島左翼隊をして水洞と哈叭嶺を占領せしめることも聊も異存はないが。何等良好なる道路が通じて居るといふてもないのに、葦子峪から馬二嶺を經て松樹口に亘る山地嶮峻なる線を占むべく、右翼隊に命令したのは確かに至當の處置でなかつたのである。であるから愈〻十九日に於て此命令を實施するに當つて、此方面に兵力を配備することが出來なんだのは、論より證據事實が明かに兵力に比して其占領正面が過大であつたことを、實際に於て證明して居るのである。

此の最初に於ける戰に於て阪井中將の廣大なる正面を占むべく命令した結果は、十九日及び二十日の戰鬪に於て至る所兵力の稀薄を感ぜざるはなく、僅かに敵の警戒隊を驅逐するだけのことに、全二日の日子を費やすといふことになつたのも、豫定とはいへ要するに此の部署が適當でなかつたからであつて。若し最初から今少しく兵力を集結してかかつたならば、彼の様な緩慢

なる戰鬪を交へずして今少してきぱきと、其行動を際だてて立派にやることが出來たであらふと思ふのであるが。但し一方に於ては此の不得要領ともいふべき過廣の正面を占めて、頗ぶる緩徐なる攻擊を行なつた爲めに、敵は非常に我此の後備師團を莫大なるものの進來と誤認して。其強大なるものが開進を掩護するのであるから、それて其線面が廣くして且つ其攻擊が緩やかなのであると考へて、頗ぶる疑懼を抱いて此方面に懸念するに至つたのである。これは彼の敵情搜索なり又は情況判斷なりが不充分であつたのが原因で、此の稀薄にして廣大なる阪井將軍の部署計畫が、巧妙に敵を欺瞞した爲めに敵をして大に鬼胎を此方面に懷かしめたとはいはれぬと思ふ。て評者は此場合後備師團は松樹口、兩嶺子、水洞、哈叭嶺の四道より進めば、敵を震駭せしむるのは現在の部署と同樣て。顧みて自分の方が萬一敵から攻擊を受けても味方同志互に相應援することが容易であつて、少しも危險を感ずることがないから、これが最も萬全の策であると評者は信ずるのである。

阪井中將の命令のことは先づこれ位て切りあげて、次に此命令實施に付て評論をするつもりてあるが。十九日の早朝から後備第一師團は何れの方面に於ても、前述の阪井中將の命令の如く運動を開始し。又河村支隊は同日の正午過ぎに葦子峪を占領して、西山、大堡、哈嗎溝に出沒する敵騎と、千合嶺を占領して居る敵とに對して軍の右側を安全にする爲めに警戒を嚴にし。更に草場右翼隊は同日の午前四時頃に於て、片倉中佐の後歩第四十八聯隊を以て冷口子から下夾河及下房子北方高地を占領し。次に其第一線部隊は蜂密溝東方高地から松樹口北方高地を經て、左翼兩嶺子に亘る線に陣地を占めて其主力を河南に集合せしめ。尋て午前五時半頃には右翼隊の主力が漸次進んて來て、松樹口西方高地に砲兵陣地を選定して、榛子嶺の敵情を偵察するに熱中して居る間に。それと知つてか知らずてか敵の歩兵一中隊と騎兵若干が康家窩棚から下夾河の方に向つてのこ〳〵前進して來たので、我歩砲兵は靜肅に其近づくを待ち突然起つてこれを掩擊して。敵を潰走に陷らしめて先づ第一に敵

膽を寒からしめたのは、ほんの慰み半分の仕事てはあるが片倉千萬多君これは大分の御手柄てあつた。

敵の兵力は元よりいふにも足らざる騎兵二十騎と歩兵一中隊のことてあるから、それを潰走せしめたとて決して稱賛するには當らぬけれども。これが此の方面の初戰ともいふべき此日此場合に於て、敵を掩擊して散々なる目にあはせて。我軍の爲めに非常に志氣を振起せしむると共に、敵をして愈〻此方面に大强敵の來進を直覺的に感ぜしめて、大に彼れに疑懼の念を深からしめて、敵の兵力を此方面に吸收するの第一著手をやつたのてあるから。ほんの小戰も小戰實に大海中の一粟粒にも値せぬ小ぜり合てはあつたが、其勳功は大に認めてやらねばならぬと評者は思ふ。えて此樣な失態が起り易いものてあるから、それて評者は前に阪井將軍の無暗に過廣な正面に、兵力をばらまいたのを難じたのてある。此の一小戰の後は右翼隊の方面は全く無事てあつたので、後歩第四十八聯隊は松樹口と双臺子附近に位置して前哨となり、千

合嶺と榛子嶺の敵に對して警戒して、其主力たる爾餘の諸隊は下夾河附近に宿營したのであつたが。榛子嶺附近には元來若干の敵が據守して居て、前の掩擊の爲めに潰走した敵兵一中隊は逃げ歸つてこれに加はつて、終日非常に其警戒を嚴にして我軍の前進に注意し、諸所に工事等を起して固守の計畫をするのが遙かに偵知せられたのであるから。右翼隊が明日に於て之を攻擊するには相當に骨の折れるのを豫察するに難からなんだ。

右翼隊の方は右樣の次第であつたから頗ぶる我に有利な形勢であつたが。比志島左翼隊に於ても此の右翼隊の活動に少しも遲れをとることなく、後歩第三十六聯隊の五箇中隊を以て水洞附近の敵を攻擊せしめんとして、十八日の夜半なる午前一時に砬砠子附近を出發して馬家城子に向はしめ。又後歩第七聯隊第一大隊は哈叭嶺を占領し進んで第三十六聯隊の攻擊を援助せんとして。其第三中隊を遠く西方から迂回させて、荒地から小干溝を經て敵の右側背を脅威せしむる爲めに、後歩第三十六聯隊よりはずつと早く十八日の日沒

を以て大堡を出發して、徹夜運動して其目的の遂行に熱中したが。一體此左翼隊が師團長から受けた任務は、水洞、哈叭嶺を占領して右翼隊の攻擊を加勢すればよいのであつて、これが爲めには左して大なる敵に衝突するの虞はない筈である。況んや師團長の目的は敵の警戒部隊を擊攘して、今後の運動に自由を得樣といふに過ぎぬのであつて見れば。現在此の左翼隊が決行したるが如く、前日の日沒から出發して全運動を夜襲的に計畫するの必要はあるまいと評者は思ふ。水洞及哈叭嶺に近接する爲めに夜暗を利用するのは無論さし支はないが、前にもいふ通りこれが此方面で始めて敵と戰を交へるといふ場合であるから、決して猥りに輕擧をして萬一にも初戰に於て蹉躓をしては大變である。斯く考へて見ると夜暗を利用して敵に近接するといふことは大體同意であるけれども、前日の日沒から出發したり又は夜半から出發したりして、全く夜襲的に戰を交へたのは適當なる處置ではあるまいと思ふ。況んや我が兵力は頗ぶる寡弱にして敵の此附近の兵力もまだ〳〵明瞭に知れぬ場

合であるから、此場合評者は此の右翼隊が餘りにはやり過ぎて不知案内の山地で、夜間の運動をするのは頗ぶる得策でないと考へる。此諸隊は一面たしかに餘りに敵を輕んじて此樣な擧に出てたのであらふが、幸に敵を擊退したからよい樣なものの若しも敵が頑强に防禦して。齟齬や過失を犯し易い夜間に於て不意にこれに衝突し、豫め我の夜間の進來に備へた敵と戰を交へたとしたならば。夜中廣大なる正面に兵をばらまいた此の左翼隊は、統一も出來ねば連繫もとれず命令も報告も容易には到達せずして、各箇各別なる戰鬪を交ゆるに至りたるはいふ迄もなく、敵に其虛に乘ぜられて思はぬ失敗に陷つたかも知れぬのである。て評者は此の左翼隊の初天邊からの夜襲は餘りに大膽に過ぎて、且つ餘りに冒險に過ぐるものであると思ふのである。此の大膽に過ぎたる左翼隊の計畫が爲めに其攻擊に種々なる困難を持ち來したのは、これから研究してゆく中に明白に知れる樣になるのである。

後步第七聯隊長小澤德平中佐は此夜の前進に當つて、先づ第一に遠く左方

から敵の背後を脅威すべき任務を負へる第三中隊をして、荒地から嶮岨にして碌々道もない山地を經て小干溝に至り、それから太子河谷を傳ふて夜中に敵背を衝かしめた上に。其手薄極まる僅かに一大隊しかない兵力を惜氣もなく分進せしめて、第一中隊を馬家城子西方高地に派遣すると共に、第二中隊の二小隊を達子嶺の方に分進せしめて仕舞つた。てあるから榛子窰溝を經て哈叭嶺に向つたる主力とも稱すべきものは、實に第二中隊の一小隊と第四中隊ばかりで、これを小澤聯隊長と山岡大隊長の兩人で指揮するといふ、稍滑稽に類したる狀況を現はすに至つたが。これ實に頗ぶる不合理千萬なる部署のし方であつて、晝間と雖ども此樣な山地で前述の如く其兵力を分離しては到底其指揮を完全に行ふことは出來ぬのであるのに。まして夜間しかも不案内なる地形不明なる敵情の場合に、僅々後備兵一大隊を四隊に分進せしめたる而已か、其正面が三、四千米突もあるに至つては、これ實に常識を以て此の小澤中佐の部署を判斷するのは困難である。それてもまだ自己の手中に主な

る兵力を握つて居ればまだしもてあるが、殆ど全力の四分の三を手離して仕舞つて、僅かに一中隊を大隊長の山岡少佐が指揮して、聯隊長ともいはれるものが初めて敵と遭遇したる場合に、一小隊を豫備隊として山岡少佐の第一線に續行したといふのは、實に言語同斷である不可思議である。これてもし此方面の敵を破ることが出來るのなれば、何も聯隊長が出馬するには及ばぬ一中隊長即ち第四中隊長に命じて哈叭嶺の敵を攻撃せしむれば、それて此の方面の戰闘はちやんと埒が充分にあくのてあつて、大隊長や聯隊長は全然無用の長物たるに過ぎぬのてある。これ蓋し此時小澤中佐は前にも述べたる如く、比志島左翼隊長と同一の過失を犯した爲めに、夜間に於て不統一無連繫の戰を交ゆるに至つたのてあつて。歩兵操典は其第一部第百八十四に於て

『夜間ノ攻撃運動ハ特ニ靜肅ニシテ連繫ヲ保チ確實ニ行進方向ヲ維持シ敵ニ接近スルヲ主要トス之ガ爲勉メテ單一ナル隊形例ヘバ密集隊形ニ在ル中隊ヲ併列シ又ハ重疊セルモノヲ用ヒ且危險ナル外翼ヲ警戒シ要スレバ裝塡ヲ禁ジ近ク豫備隊ヲ隨ヘテ前進シ火戰ヲ行フコトナク直ニ突擊ニ移ルヲ可トス』

と示したる大體の主旨に全く背戻して居る而已か、同第二部の第八十五の第二項に

『夜襲ノ部署ハ決戰ニ必要ナル兵力ヲ最初ヨリ第一線ニ備ヘ其各部隊ヲシテ勉メテ集團セシムルヲ必要トス而シテ豫備隊ハ成ルベク第一線ニ近接セシムベシト雖過早ニ戰闘ノ渦中ニ投ゼザル如ク注意スルヲ要ス』

と示してある何れの主旨にも準據せずして、殆んど畫間に於けると同樣に行軍中に於て其兵力を分進し、容易に拾收し能はぬ程に其戰面を擴張して仕舞た爲めに。肝心自己の最大任務たる哈叭嶺を攻撃する場合には、唯の一中隊と一小隊て戰かはねばならぬことになつて、他の約三中隊は全く此の占領に加勢し得なんだのてある。但し哈叭嶺に於て初めて敵と接著するや、勇敢に戰闘して急峻なる斷崖を攀登して、躊躇することなく敵中に突擊したのは

第一部に於て『直ニ突擊ニ移ルヲ可トス』とある條文に一致して、頗ぶる適當なる處置であつたと思ふが、其他は殆んど戰術の原則を無視したる行動と評するの外はあるまい。

更に痛切に此の小澤聯隊長の過失の罰を蒙むつたのは、半田中尉の指揮したる第三中隊であつて。彼は遠く大堡出發の時から大迂回の任に就き、前にも述べたる如く荒地から小干溝へ向ふ途中、荒地西方の嶮峨たる山地の夜中に於て、先に進んだ第一小隊と第二小隊の一部は、後にあつた第二小隊の一部と第三小隊とを見失なふて全く連絡を絶つて仕舞い、無我夢中で嶮山峻谷中のしかも暗夜の内をさまよいまはつたが。それでも中隊長半田中尉の率ゐたる先進の一小隊餘は辛ふじて太子河谷に出てて、其左岸に沿ふて敵の背後へ侵入し樣と進んて往く中に。丁度午前三時鍋成石附近に達したと思ふ頃、前面から突然約自分と同兵力位の射擊を受けたので突擊せんとする刹那、其東北の山上からも亦た敵の瞰射を受けたので。忽ち中隊長半田中尉を始めと

して多大の死傷を出したので、突擊どころの沙汰ではなく終にほう〳〵の體て達子嶺へ退却するに至り。他の一小隊半の中隊長に離れて道に迷つた連中は、山中にうろつく中に哈叭嶺の戰聲を聞いて來つて主力に合したが。これに反して中隊長半田中尉を失なつたる他の一小隊餘は、非常な困難を冒して死傷者を收容して遠く棠子窰溝まて退却して、此日の戰に參加することの出來ないことになり至つたのてあつて。若し此の方面の敵が相當の配備をして我を待つて居たなれば、第一中隊も第二中隊も無論殆んどこれと同一の運命に陷るべきは決して智者を俟たぬ。果して然らば小澤中佐が此場合如何にしたらば適當てあつたかといふと、評者の考へる所では先づ左の如き部署をしたのが一番に合理的てあつたらふと思ふ。

先頭の一中隊を以て前衛として極めて愼重なる警戒をなしつつ、大堡から棠子窰溝を經て哈叭嶺に進ましめて。主力は近く其後方に跟隨して達子嶺東方三叉路附近に於て、小隊以下の斥候を馬家城子西方高地と達子嶺とに出し

て。主力二中隊餘の兵力は確實にこれを聯、大隊長兩人の手中に握つて、直に哈叭嶺に向つて前進したる後。豫定の如く此目的地が占領せられたならば此所に一中隊を止めて流嘯哨の方面を警戒せしめて。他の三中隊を以て哈叭嶺から東北に小高力營子の方へ延びたる、山脈の稜線を進んで後歩第三十六聯隊の水洞攻擊を助ける爲め、水洞の敵の左翼隊側を脅威するといふ手段を取るのが上策であると評者は信ずる。他の諸中隊方面は兎に角としても暗夜に於て、僅々一中隊の兵を遠く荒地から敵背に迂回せしめたのは、最も非難すべき處置の著明なるものであつて。これが旅團とか師團とかいふものなれば格別、僅々一大隊の兵力の中から夜中數里を迂回する爲めに其四分の一を割くといふのは、殆んど戰術上に於て何等の理由もないものといふのが至當であつて。此小澤中佐は一大隊を以て殆んど旅團以上の兵力を握つた樣な部署をしたので、それが爲め漸くにして敵の小哨しか居なかつた哈叭嶺は占領し得たが、水洞攻擊を加勢する方面の任務は全然これを行ふを得なんだのであ

る。

此戰に於て後歩第三十六聯隊と連絡の爲めに、馬家城子西方高地に派遣せられた後歩第七聯隊の第一中隊が。水洞方面には左したる戰もない中に、哈叭嶺で大隊主力の戰鬪が酣になつたのを聞いて、一小隊を同地に殘して依然後歩第三十六聯隊との連絡に任ぜしめて。其他の二小隊を以て急行して山岡大隊長の許に赴援したのは、評者は如何にも適當なる獨斷のやり方であつたと考へるのであつて。更に其後此の中隊は遠く左翼に進出して流嘯哨の敵を警戒し、傍ら第三中隊の行衛不明の探索に任ずるなど。先づこの後歩第七聯隊第一大隊の中では、此の中隊だけが略ぼ滿足なる戰をした位のもので、其他は全く價値ない動作をしたに過ぎなんだが。詮ずる所これ全く小澤中佐の其部下をばらまいたのが大原因であつて、これを以て諸中隊長の無能を責めるのは、餘りに同情のないやり方であると評者は信ずる次第である。

又此場合小高力營子方向から哈叭嶺を距るる約六百米突に進んで來たる、

恢復攻擊でもし様といふ風に見へたる敵兵に對して、殆んど山岡大隊の全部を哈叭嶺東北側の高地稜線に展開して、盛に敵と銃火を交換したる後其第二の目的たる、後歩第三十六聯隊の水洞攻擊を援助せんとしたが。此時同大隊の第一中隊から流响哨の東方に砲兵を有する敵が居るといふ報告が届いたのと、更に夜が開けて仕舞て同隊應援の機を逸したので、哈叭嶺附近の陣地を確實に占領するを得策として、終に此地に居すくまつて仕舞た様であるが。當時後歩第三十六聯隊の齋川大隊は水洞南方一帶の高地で、敵と相對峙して容易に前進が出來ず、戰鬪持久の有様を呈して徒に火戰を交へて居るといふ次第であつて。此場合小澤聯隊が哈叭嶺から山脈の稜線を傳ふて水洞の右側に迫つてくれれば、頗ぶる好都合であつて決して時機を逸したといふ程ではなかつたのに。流响哨の敵が砲兵を持つて居るといふ不確實なる報告に聞き怯ぢして、第二の任務の遂行に勉めなんだ爲めに、左翼隊主力の方面では大分戰鬪がながびくことになつたが。これも小澤中佐が最初餘りに兵力を分離したのが原因で、纏まつた兵を以て水洞の方へ前進するには、頗ぶる時間を要するといふ困難があつた爲めで、如何にも殘念なことであつた。

又左翼隊の主力の方に於ては、橋本中佐が後歩第三十六聯隊の第一大隊の二中隊と第二大隊の三中隊を率ゐて、夜半出發午前四時頃に馬家城子東南端に達して敵情を搜索し。其後方には左翼隊長比志島少將が後歩第三十六聯隊の第一、第四、第五中隊と砲兵一中隊(一小隊欠)とを率ゐ、跟隨するといふ有様であつたが。此の橋本第三十六聯隊長も餘りに其處置が適當でなかつたと評者は思ふ。今此の馬家城子から水洞に進まんとするには、道路は太子河に沿ふて遠く西方に灣曲して、其正面は斜面急峻なる山地を以て屏風を立てたる如く塞がれて居るのである。からして若しも敵が此の隘路の入口を占めて居たとしたならば、馬家城子から一歩でも北進すれば北東西の三面から敵の射擊を受け、到底前進の目的を達することは出來ぬのである。であるから若しも此水洞南方高地にある敵を擊攘せんとするには、左右何れかの高地にとりつ

いてそれから前進するが至當であつて。左方即ち馬家城子西方川を隔てたる高地は、これを占領してもそれから北進するには再び太子河の深い谷に降つて、更に大斷崖を攀登せねばならぬといふ大障碍があるから。要するに此敵兵を攻擊する爲めには右方金邊洞方面から前進して、敵の占領せる水洞南方高地の東方に聳立する、即ち後に後歩第三十六聯隊の第三中隊が占領したる直き東の山に向つて、山の稜線を傳ふて前進するのが最も有利であつて。よし其地形は嶮峻であらふとも決して歩兵の通過を許さぬ程な土地ではないから。一部を以て正面に向はしめると共に、其主力を擧げて此方面から攻擊したならば適當であつたと評者は思ふのである。

然るに事實はこれと正に反對なる行動に出てた。即ち馬家城子に於て水洞南方高地の敵を攻擊すべき命令を受けた、同聯隊の齋川少佐は先づ第一に其第七中隊を、急峻なる馬家城子西方高地に派遣したが。これが實に極めて適當でないといふのは、よしやここには敵が出て居たとしても、其後方には川

があり谷があるのであるから、決して大なるものが居る筈はないのであるので。此方面を警戒する爲めとあれば一小隊も出せば澤山である。然るに僅かに三中隊しか握つて居らぬ齋川少佐は、其三分の一を此の方面に出したので、其兵力が愈〻手薄になつて仕舞たが。折角それ迄にして出した此中隊は、川を渡り山を登り殆んど斷崖ともいふべき嶮を凌いで、所命の地に進んで見ると敵の影も形もないといふ有樣であつた。一方齋川少佐は此第七中隊が其山上に登つたならば、それの掩護によつて前進し樣として居たものと見へて、幾分馬家城子附近で其進出を待ち合せて居た樣であつたが。夜間のことであるから其消息は容易に知れぬので、第六中隊を正面より進めて標高二二七の附近で川を渡つて、其北方の高地即ち敵の監視兵の居る高地へ危險千萬にも魚貫して登つて、敵の射擊を受くると共に猛烈に突擊し、直ちに此の川の北岸の高地線を占領したが。此方面に出て居た敵は後貝加爾哥歩兵の第五大隊であつたから、若し其主力が此の水洞南方一帶の高地の要害を占めて居たとし

たならば。想ふに此第六中隊は魚貫の上に更に彈貫になつて全滅させられたに相違あるまい。幸に敵は此所に僅少なる歩哨を配布した而已であつたので、齋川少佐の攻擊は功を奏して更に其占領したる線上に、第八中隊を增加し第三中隊、第五中隊も加はつたが。其高地より谷一つ隔てたる水洞に直接したる一帶の高地に、敵が全大隊を持ち出して來て。特に其東方山脈をも占領したので、左翼隊の主力は此の高地上で持久戰的の戰をせねばならぬことになつた。是蓋しいふ迄もなく橋本聯隊の攻擊の計畫が至當でなかつた爲めであつて、更に其原因ともいふべきは小澤中佐が哈叭嶺に居すくまつて、進んで水洞の西方から敵の右側を脅威してくれなかつた爲めであつて。要するに此の十九日に於ける比志島少將配下の、水洞及び哈叭嶺の戰鬪は何れも其攻擊の計畫が適當でなかつたが。敵が僅少なる警戒兵を出して置いたばかりであつたので、左したる大損害も被むらずして其目的を達し得たのは何より幸運であつたが。何れの方面も敵は漸次に退却して趙家甸子、流嗚哨の線に據つたの

て、此の左翼隊も一先づ此所に其運動を止めて。前哨を配布して宿營することにしたが其配備に付ては、大體に於て同意であると評者は宣言するにたゆたはぬ。但し此日比志島少將が敵を砲擊せんとして、御苦勞千萬にも其砲兵二門を水洞南方例の第六中隊が魚貫して突貫したる嶮峻なる高地にあげたのは、已むを得ざるに出でたのではあらふが陣地の選定が不當である。此附近では到底完全なる砲兵の陣地は得られぬけれども、已むを得ずんば水洞西南方道路と河川が西方に灣曲して居る、彼の附近に進ましめて水洞及小高力營子方向を射擊せしむるの外には、何れの方面も山地嶮難にしてとても〳〵砲を引きあげることが出來ぬと思ふ。それを無理無體に例の第八中隊の占めたる高地上に出さうとしたので、工兵と砲兵が總がかりで午後一時にやつと放列を布くと共に、敵はお先へ御免と逃げて仕舞たので全くの骨折損の草臥れ儲けといふことになつたが。これも詮じつめて見ると小澤中佐が哈叭嶺から北進しなんだのが原因であつて、若し後歩第七聯隊が其一部でもよいから、

水洞の方へ延びたる高地稜線上に兵を進めて、敵の水洞に據れるものの左翼を脅威してくれて居たならば。必ず比志島少將も其砲兵を評者のいふた點に進めたに相違ないが、左方高地が我軍の手に入つて居らぬ上に、前面水洞附近からは極めて其距離が近いので此所へ砲を進め兼ねて。難儀なるを知りつつ第八中隊の位置附近へ布列せしめたので。それで全く戰機を逸して仕舞たのであつた。

十九日の戰に就ては先づこれ位て小言をやめて。さて此の十九日阪井後備第一師團長は第一線部隊が、何れの方面でも自分の考通りに豫定の地點を占領したので。今夜はこれて宿營することにして、明二十日に於て右翼隊をして榛子嶺を豫定の如く攻撃せしむることにしたが。此の二十日の戰闘にも隨分と申分があるからそれをこれから研究したいと思ふ。

此晩堿廠で阪井中將が下した命令の中に、葦子峪に在る河村支隊の一部を以て千合嶺を攻撃せしめて、右翼隊の一部を以てそれを助すけさせる樣にしてあるが。これも實は少しく評者の腑に落ち兼ぬるのであつて。河村支隊から出すべき一中隊が兵力寡弱に過ぐると見たならば、今少し其兵力を增せばよいてはないか。河村支隊からも右翼隊からも何れからも三里内外の距離にある敵を攻めるのに、僅々一中隊宛の兵が東西四五里も相離れた所から、千合嶺に向つて前進してそこで都合よく出合ふて相共に攻撃をし樣といふのは、餘りに其計畫が巧妙に過ぎて居ると評者は思ふ。これ即ち前に此支隊派遣當時軍命令に背いて歩兵一大隊の中から一中隊を減じたので、それて右翼隊が加勢にゆかねばならぬ樣になつたのてあつて。幸に兩中隊とも時機を誤まらなんだからよかつた樣なものの、此樣な遠方から寡少な兵力を以て協力して一地を攻める樣なことをやると、敵が强かつた場合には非常に不利に陷つて、各箇各別に撃破せられるの危險が少なくない。てあるから自分は全然これを河村支隊に一任して、若し其兩地の間に連絡を通ずる必要があつたならば、それが爲めには小隊以下の少數なる斥候を出して其間を連絡せしむるのがよ

いと思ふ。

果せる哉此方面に居た敵は極めて少數であつたに關せず、其翌二十日に於て河村支隊が一小隊を以て杉松排子に進めて、此方に敵の注意を牽きつけて置き。後歩第十三聯隊の第一、第四混淆中隊を後堡の方から迂回して、其眞つ左側に迫らせて見たが敵は少しも驚かぬ。それこれする間に右翼隊主力から來り援けた後歩第十三聯隊第八中隊も微弱なる敵を擊退しつつ、丁度其千合嶺の敵に對して眞つ右側へ出て來たので、三面から敵を挾擊するといふ有利なる狀況になつたのであるが。敵は此の三面からの射擊に對してもびくともせず頑然として千合嶺を死守して、少しも退却するの模樣がないので。此の小隊又は中隊は各〻互に二千米突宛も相離れて、敵を中央にとり込めたる儘徒に銃火を交へて居たが。これ實に餘りに少しばかりの兵力を以て頗ぶる複雜にして巧妙に過ぎたる攻擊の計畫を立てたものであるから。小兵力が遠く三箇所にも分れて居る爲めに、其相互の間の連絡が容易に付かぬので。何れの

方からも進んで敵に肉薄することが出來なんだのであつて、これ實に歩兵操典綱領第七の

『戰鬪ニ於テハ百事簡單ニシテ且精練ナルモノ能ク成功ヲ期シ得ベシ』

といふ戰術上の大切なる戒めを守らなんだのの致す所であると評者は思ふ。然らば此場合如何にしたならば評者の氣に入るかといふ人があらふ、如何にも自分にも拙ないながら一の意見は確かにある、て今からそれを開陳して諸君の敎を乞ふことにし樣と思ふ。若し此場合自分が此の千合嶺攻擊を計畫したとしたならば、河村支隊の歩兵二中隊に騎兵一小隊を附して、此の一部隊を以て千合嶺の敵を獨力攻擊せしむる考である。而して右翼隊から此の千合嶺の方面との連絡を通ずる爲めには、松樹口から蜂密溝を經て一小隊以下の斥候を派遣するつもりである。斯くすれば攻擊隊長は歩兵二中隊に騎兵一小隊を持つて居るから、相當に敵情を搜索することも出來れば、又敵の左翼即ち後堡、令家溝方面から之を攻擊して、直ちにこれを驅逐することが出來るの

てあつて。其使用した兵力は同じく二中隊であるが、それが何れも其指揮權が別々な部隊である上に、それが又何れも二、三千米突宛隔てて敵に對して居るのと。一人の手中に其兵力を握つて一方面から烈しく攻擊するのとては、受身になつた敵の方には大分の相違があるのはいふ迄もないことである。此の阪井將軍の三方からの攻擊も矢張大部隊の應用すべき戰鬪法を、小部隊に於て實施したの感じがあるのは何人も否認すまい。斷はつて置くが大は小を兼ねるといふ諺はあるが、小は大を兼ねるといふ諺は聞いたことがない。耳かきの小を以て飯杓子に代用し樣としても、それは到底實際には何の役をもなさぬものである。何となく此の十九、二十兩日の戰鬪の上には、小なる耳かきを以て飯杓子に代用せんとした樣な形跡が、到る所に現出して居る樣に思はれるので一寸一苦言を呈して見たのであるが、若しもこれが評者の偏見であつたならは何卒煩勞を避けられずして御教示に預りたいと思ふのである。

以上の如く千合嶺の攻擊も豫定以上に頗ぶる時間を費やして、終にはこれ

を確實に占領はしたものの爲めに正午頃から午後の五時近く迄も戰を交へたのは、確かに其兵力を分散して攻擊したのの致す所であると評者は信ずる。

一方右翼隊主力の方面では草場右翼隊長は其後備歩兵第四十八聯隊を以て本道の右に位置せしめ、同第十三聯隊を以て本道の左を受け持たしめて、榛子嶺に向つて前進を開始したが。土地嶮峻にして起伏頗ぶる多く、加ふるに積雪尺餘の深さを有する有樣であつたので、其前進の困難は實に豫想以外であつて、將卒ともに勇を鼓して前進したけれども大に時間を費やして、二十日午前十一時に於て漸くにして康家窩棚附近に到著して。榛子嶺上にある約一大隊の敵と千二百米突を隔てて相對し、其砲兵中隊は双臺子に放列を布いて敵に向つて砲戰を開いたが。其後は前述の如き地形と積雪の爲めに戰況殆んど意の如く進捗せずして、草場大佐も阪井中將も少なからず焦心苦慮したが何分にも前進し兼ねて居たのであつた。

又左翼隊は此日第十一師團から來るべき前田支隊と其守地を交代して、兩

嶺子、夾河を經て棒子嶺に據れる敵の右側へ迫るべく命令せられて居たのであつたから。二十日午前の九時三十分迄に其主力を大溝の南方太子河谷に集合し、今朝前田支隊がまだ交代に來てくれぬので後歩第七聯隊の第一中隊と同第三十六聯隊の第一大隊とを舊位置に殘して、依然水洞から哈叭嶺に亘る間を警戒せしめて居たが。これより前に比志島少將は後歩第三十六聯隊の齋川少佐に第五、第六中隊を率ゐしめて、兩嶺子西方鞍部から夾河南方鞍部に亘る間を占領して、左翼隊の前進を容易にし且つ甸脚溝方面の敵情を捜らせんとしたが。此齋川少佐が午前九時頃夾河南方鞍部の南麓へ達すると同時に、俄然夾河西南高地から三、四十の敵の不意の射撃を受けて、頗ぶる狼狽してこれを避けるに至つたが。此時には既に此の齋川少佐の部下の第五中隊は夾河東方高地上に進んで居たのであるから、敵が標高七二七の巖山の上に居るのが知れぬ筈はないのであつて。此齋川少佐の不意に敵の有效射撃を喰つたのは結局其部下第五中隊の捜索が極めて不充分であつた罪に歸する外はないので

ある。

これが爲めに齋川少佐は全く前進の途を失なつて仕舞た、其報告を得た比志島少將は猶豫することなく、同大隊の第七中隊を遠く西方小嶺子から迂回せしめて、標高七二七の敵の右側に迫らせたが。地形極めて有利なるを恃んで此の少數の敵は頑然として退却せぬ。そこで橋本中佐は殘りの第八中隊を率ゐて第二大隊の全力を擧げて此敵を攻撃せんとし、左翼隊長は其砲兵を大溝北方高地に布列せしめて此攻撃を援助せんとしたが。敵が其中に退却したので砲撃を始むるに至らずして第七中隊は例の巖山を占領し、橋本中佐は其第二大隊を以て夾河南方の鞍部を占領して、敵情の捜索に勉めて居たが是れが二十日の午前十一時前後であつたのである。

前晩の命令では今朝早く交代に來るべき第十一師團の前田支隊が、此の十一時前後になつてもまだ來ぬと見へて、後歩第七聯隊の第一中隊も、後歩第三十六聯隊の第一大隊も、まだ集合地へ歸還せぬけれども遙かに北方に當つ

て、康家窩棚と思はれる方面では最早此時非常に猛烈なる戰聲が起つて、空しく此の太子河谷に交代から歸り來るべき一大隊と一中隊を待つて居るべき時機でないことを警告するので。比志島少將は敏くもこれを右翼隊の榛子嶺攻擊開始なりと判斷して、例の交代兵の歸還を待つことなく直ちに集合地を出發して、急に其全力を齋川少佐の占領して居た夾河南方の鞍部附近に進めると共に。其砲兵一小隊をして同鞍部の南側に放列を布かしめて、午後一時と思ふ頃に康家窩棚西方高地の敵に向つて突然砲擊を開始せしめた。

齋川少佐が二中隊を率ゐて僅々三四十の敵の爲めに、其行進を阻碍せられて退避したのは頗ぶる不手際であつたが。これに反して康家窩棚方面の銃聲によりて、決然前進を企だてて右翼隊の攻擊を援助せんとして、全左翼隊の集合し了るを待たずして急進したる、比志島少將の此日の處置は頗ぶる適當であつて。就中其砲兵一小隊が夾河南方鞍部に進出して、敵の榛子嶺守備隊の右翼に向つて砲擊を開始したのは、更に〳〵時機に投じたる最も適當なる處置であつた。此の僅々二門の砲兵の砲擊が如何に右翼隊に向つて莫大なる利益を與へたかは、後に說く所に依つて明瞭であるが。要するに此の場合の比志島少將の處置は最も適當にして、且つ其敵情の判斷も亦全く的中して居たのである。

丁度此時右翼隊は非常に困難なる地形で敵と相對して、其戰鬪少しも進捗を見ること能はずして、草場右翼隊長は全豫備隊を擧げて第一線に增加して、極力これが推進に勉めたけれども、容易に其前進を繼續することが出來ずして、更に師團の豫備隊から增加を受けるといふ樣な、頗ぶる不利なる位置に立つて居たのであつたが。其困難の眞つ最中へ左翼隊の砲兵が勇ましく康家窩棚西方高地の敵に對して、大有效なる砲火を集注してくれたので、流石に頑强なりし敵も忽ちにして動搖し始めて、暫時の後には敵は此の高地を棄てて退却したので。此の二門の砲擊の爲めに一時萎靡したる勇氣を挽回したる右翼隊は、其殆んど全力を展開して榛子嶺一帶の敵に對して萬難を排して前